

---

# 魔法少女リリカルなのは～世界からの来客者～

TR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜世界からの来客者〜

### 【Nコード】

N2441M

### 【作者名】

TR

### 【あらすじ】

数多くある世界の安定化を図る役割を持つ”世界の意思”は、ある日”創造の神”より、ある世界に矛盾が生じ始めた事を伝えられる。

伝えられた世界の意思は現地に降り立ち矛盾を消していく任務を創造の神より任命され、人間界へと降り立った。そこはリリカルなのはの世界であった。

これは、世界の意思と少女達の物語です。

魔法少女リリカルなのは〜世界の来客者〜……… 始まります。

不定期更新ですが、よろしくお願ひします。

\*1月19日追記：あらすじを変更しました。

## プロローグ「世界」（前書き）

初めまして、TRと申します。

今作では難しい用語や言い回しが多数あります。

私の方でも出来るだけ分かりやすくしますが、もし分からない点がありましたら、なんなりとお尋ねください。

また、本作では残酷な表現があります。

さらにはオリキャラはとてつもなく強いです（チートと呼ばれてもおかしくないほど）そう言った作品を好まない方はお読みにならない事をお勧めします。

それでは、本作をお楽しみください。

## プロローグ「世界」

早速ですが、あなたは世界とは何だと思えますか？

恐らく色々な答えが出ると思えます。

この質問には答えは存在しないのです。

では、もう一つ。

“世界”と“時”の違いは分かりますか？

このようなおかしな質問には意味があります。

この世界や生物を生み出したのは神様だという事は誰しもが一度は思った事ではないでしょうか？

神が世界と生物を生み出しその生物はやがて知恵を付け、一つの文化を作る。

それが今の状態なのだ。

そんな私達をまるで手のひらで踊らせる存在がある。

それが世界の“意思”だ。

それは世界がおかしな方向に行かないようにするための、一種の道しるべと言っても過言ではない。

そして、おかしな方向に行けば世界の意思の力で元に戻す。

ここにある説がある。

『もし世界の意思に人格があれば、それはその世界ごとに異なるだろう。』

戦争が起こる世界では、どのような戦闘機にも負けない力を持った人物が、狩りなどが行われる世界であれば、狩りのエキスパートのスキルを持つ人格が現れるのではないか』

しかしこれはあくまで一つの説に過ぎない。

なぜなら世界の意思の人格など、一度も出ていないのだから。

そんな世界の意思の天敵は、“時”だ。

時は自由気ままに場をかき乱す。

それは時には、あつてはならない方向に導いてしまうほどに。

これはそんな“時”のきまぐれから始まった物語だ。

## プロローグ「世界」(後書き)

ということであらためまして、TRです。  
今回はそんなに長くはなかったと思います。  
恐らく突っ込みどころ満載でしょう。  
それでは、また次回にお会いしましょう。

## 第1話「全ての始まり」

答えよ

何だ？

誰かが俺を呼んでいるのか？

世界の意思よ答えよ

(何の用だ？神)

俺に呼び掛けていたのはこの世界を作り出した神だった。

実はお主の管轄する世界で、理不尽な要素が発見されたのじゃ

(何だと？)

理不尽な要素、それは変な方向に歩み始めた事を示す言葉だった。

(だったら、今からこっちで修正を)

それが無理のようなのじゃ。この要素は完全な形として固定されている。我々とて手を出すことはできないのじゃ

(俺にどうしろと？)

俺は、神に先を促した。

そう急かす出ない。お主にやって貰いたいのは、その世界に降り立ち不安定な状態を、修復して貰いたいものじゃ  
さて、少しだけ説明しないとイケないな。

俺の名前だが……実はないのだ。

しかしコードネームのような物ならある。

神からは”世界の意思”と呼ばれている。

そのコードネーム通り、俺は世界の意思その物だ。

そして俺はこの世界が、ちゃんと安定しているかを監視するのが仕事でもあり、役割でもあるのだ。

しかし、悲しい事にこう言う事が起きてしまうのだ。

今の状態は不安定になった状態で、世界はそれが正しいとして認識した状態なのだ。

これが、いわゆる”革命”なのだ。



俺としては革命は喜んで受け入れる。  
しかし不安定な状態の革命は、その後世界が崩壊する危険性があるのだ。

だからこそ俺はそうならないように対処してきた。  
ある時は、世界をいじり発展出来ないようにしたり、天変地異を起こしたり。

一体俺は悪魔なのかとも思えるほどのえげつなさだが、  
それが出来ないレベルと言うのは、かなり深刻な物だった。

(了解だ。俺が降り立つ場所の情報と、俺の正式な名前を)  
俺はこの時ともわくわくしていた。

俺は今初めて自分の管轄する世界に、降り立てるのだ。  
これ以上に嬉しい事はない。

ああ、お主が降り立つ場所は海鳴市内の公園だ。名前やそのほか  
の詳しい事は、降り立ってから伝えるところでしょうかの  
神の言葉と同時に突然丸型の映像が映った映写が現れた。

この映写に飛び込めば、その世界に行けるのだ。  
(分かった、それでは、世界の意思。行ってまいります!!)  
そして、俺は何もない空間に出されている映像に飛び込んだ。

## 第1話「全ての始まり」（後書き）

再びTRです。

第1話になりましたが、いかがでしたでしょうか？

今回は、主人公と神のやり取りが主でした。

次回はとうとう海鳴市に降り立ちます。

なのは達が登場するのは……まだまだ先です。

それではこれで失礼します。

## 第2話「降り立った場所にて」(前書き)

どうも、TRです。

数日間間が空きましたが、第2話これより始まります。

それでは、駄文ですがお楽しみください。

## 第2話「降り立った場所にて」

俺は立っていた。

場所は公園。

それしか分らない。

時間は分らないが今は夜である。

とりあえず状況は把握できた。

(それで、神よ。俺はどこに向かえばいい)

『今から伝える位置にお主の拠点を用意した。好きに使うが良い。

そこに着いたらまた声を掛けてくれ』

(了解)

俺は神と一通り今後の方針を聞いた。

その次の瞬間、俺の脳内に拠点でもある家の位置が現れた。

「では行きますか」

そして俺は歩きながらその場所に向かうのだった。

「ここが今日から俺が暮らす家か」

俺は拠点の前に辿り着いたのだが、それは疑うことなく一軒家だった。

(ま、どうやってここを用意したのかを考えても、キリがないからな。入るか)

俺はドアを普通にあげると、家の中に入った。

「はあ、広いな」

それが家に入った俺の第一声だった。

とりあえず、ドアを閉め鍵を閉める。

(それで、拠点についてが)

『そうか……お主に今回の報酬を前払いで送った。お主から見て右手前のドアの部屋に入ってくれ』

俺は、神に言われたとおり、に玄関の右手前に合ったドアを開けて中に入った。

どうやら様子から言っていてここはリビングだろう。

「暗いな、電気は……これか」

俺は手探りで明かりのボタンらしき物を見つけると、明かりを付けた。

その瞬間俺の目に飛び込んできたのは、想像を絶する部屋の装飾だった。

テレビとちゃぶ台があり、白を基調としたソファが置かれていた。さらに反対には台所と食事室が一緒になっているのか、テーブルがあり、椅子が6つあった。

「よくこれだけ揃えられるよな、ほんとに」

俺はあまりの完璧さにいろんな意味で茫然とすると、テーブルの上に置かれている物に気付いた。

（これが、神の言っていた報酬か？）

それは綺麗に揃えられて置かれていた。

『そうじゃ。説明するぞ。まず一番左に置かれている物じゃが、それは通帳だ。とりあえず満額支給しておるから、必要な時に使っといい』

「えっと、0が15個もあるな……おい」

俺は通帳の金額をみると顔をひきつらせていた。

『次がその隣にある物だ。それがお主の相棒となる”デバイス”と言う物じゃ名前がないから、付けてやるとよい』

「これが、そうか」

俺は通帳の隣に置かれていたプレスレットを手にした。

「名前か、そうだな……ヴェネゼイラでいいのか？」

俺は思いついた名前を口にした。

『初めまして、マスター”ヴェネゼイラ”確かに頂きました。私はマスターを何とお呼びすればよろしいでしょうか？』

「え？えっと……」

ヴェネゼイラの問いかけに俺は悩んだ。

俺に名前は無い。

いつも“意思”と言うコードネームで呼ばれているからだ。

『そして最後がお主の身分を証明する物じゃ。一応名前もこちらで勝手に決めた』

「えっと、俺の名前は鈴木隆介か、年齢は9歳なのが気になるが…

…まあ、良いか」

そして、俺はやっと自分の名前を得たのだ。

「それじゃ、ヴェネゼイラ。俺の事は隆介と呼んでくれ。それと敬語は結構だ。普通に話してくれ」

『分かりました。以後マスターの事は隆介さんと呼ばせてもらいます』

『それでは、わしはここで失礼するぞ。後は着実に任務をこなさない。健闘を祈る』

その言葉を最後に、神の声は聞こえなくなった。

『隆介さん、近くで、矛盾因子を確認しました』

「何!？」

あの後、俺は知識だけで作った料理を食べて、食器などを片づけていると、ヴェネゼイラからそんな言葉が聞こえた。

その前に、矛盾因子について少しばかり解説をしましょう。

矛盾因子とは、簡単に言えばこの世界にとってあってはならない存在の塊の事だ。

原因としては、時の気まぐれなのだが俺は、この因子を取り除く必要がある。

「よし、行くか。ヴェネゼイラ、ナビゲートとサポートよろしく!」

『分かりました!』

そして俺は戸締りをする、矛盾因子の確認地点に向かった。

そして、俺がやってきたのは俺が降り立った公園だった。

「ここが、その因子の確認地点か……ヴェネゼイラ、結界を展開だ」  
『分かりました。封鎖結界……展開!!』

俺がヴェネゼイラに伝えると、俺の辺り一帯の雰囲気が変わった。

さっきまでのどかさそうな雰囲気はなりを潜め、今はピリツとした緊張感が漂っていた。

『来ます!!』

ヴェネゼイラの言葉と同時に、俺の目の前に黒い塊が落ちてきた。

「グオオオオオオ!!」

その塊は、いつしかオオカミのような姿をすると、雄叫びを上げた。今の落ちてきたけど、地面が抉れた。

「ヴェネゼイラ、セット、アップ!!」

俺は、バックステップで怪物と距離を取りながら、その言葉を紡いだ。

次の瞬間には、俺の服装は、赤と白の縞模様のジャケットとジーパンから、黒く錬金術師を想像させるバリアジャケットになった。

そして俺の左手にあるのは、長剣になっているヴェネゼイラだった。

「とりあえず、斬り裂くぞ!!」

『はい!!俊足!!』

ヴェネゼイラの補助のおかげで、俺の動きは素早くなり、風と等しい速さになった。

「行くぞ!!六砲楯!!」

俺は長剣で怪物を切り刻む。

「グオオオオ!!」

そして、地面に着地すると俺は特殊能力を行使した。

「鷹よ、怪物を喰らえ!!」

俺は左腕から鷹のシルエツトを具現化すると、それを怪物に向けて解き放った。

鷹は怪物の肉体を貫くと、俺の元に戻ってきて消えた。だが、それと同時に俺の体に光が宿った。

これが、俺の特殊能力の”蒐集”だ。

相手を喰らう事で、相手の力もしくはは能力を得る事が出来る物だ。

「これがとどめだ！！ヴェネゼイラ、砲撃スタンバイ」

『了解！！モードチェンジ』

俺の言葉に反応して、ヴェネゼイラが杖の形に変形した。

「この世から消える！！終焉のレクリエム！！！」

俺の言葉が合図になり、特大砲撃魔法が怪物に浴びせられる。

「グオオオオオオ！！！」

怪物は断末魔を上げながら、真つ二つになり、消滅した。

「ふう……ヴェネゼイラお疲れ様。元に戻っても良いぞ」

『はい』

俺の言葉でヴェネゼイラは元のブレスレットに戻った。

それと同時に俺の服も戻ったが……。

「これが、世界の欠片か……」

『そうですね。これで100個目です』

俺は怪物がいた所に落ちていた、ダイヤモンドのような欠片を拾いながら言った。

世界の欠片とは、世界の矛盾を生み出す原因となった因子の事だ。

もちろん、これを使って攻撃をする事が出来る。

まあそれはのちほどという事で。

「こんな所見られたらまずいし……帰るか」

俺は結界を解除しながら言った。

俺の視線の先には抉れた地面に、斬り裂かれた大木があった。

まさにひどい物だった。

そして、俺は自分の家に戻る事にした。

こうしてこの世界に降り立った初日は終わるのだった。



## 第2話「降り立った場所にて」（後書き）

どうも、TRです。

第2話になりましたが、いかがでしたでしょうか？

今回は、ちよっとバトル部分が簡単になってしまったので、次からは改善しようと思います。

突然ですが、神の名前を募集したいと思います。

もしいい名前がありましたら、是非教えてください。

出ないようでしたら、今までのようにしたいと思います。

皆さんの感想、評価をお待ち（むしろ、随時募集中です）しています。

それでは、また次回お会いしましょう。

## 主人公の設定（前書き）

TRです。

少々間が空きましたが、今回は、主人公のスキルなどの設定を紹介したいと思います。

## 主人公の設定

名前：鈴木隆介

年齢：9歳

所持デバイス：ヴェネゼイラ

世界の意思であり、世界の矛盾や理不尽な元を取り除く事が役目。

「ステータス」

魔力：SS+

攻撃威力：A\SSS+

防御威力：C\AAA+

身体能力：SSS+

能力面

攻撃方式：剣状の『ヴェネゼイラ』を利用して相手を切り刻んだり、砲撃モードに出砲撃をぶち込む。

防御方式：俊足による回避が主。ただし、後ほど紹介する特殊能力や魔力結界によって直撃してもダメージはほぼ入らない。

戦法：計画

その他：特殊能力として、“蒐集”がある。

これはシルエット状にした己の分身で敵に攻撃する事が必要条件。

相手に攻撃出来れば、相手が所持する能力や力を習得できる。

習得攻撃は次の通り。

ソニックアタック

「ステータス」

威力：A A A

速さ：A A

追尾性：G

リカバリー（技を使用した後に発生する硬直時間の長さ）：G

解説：第3話に登場した怪物から習得した技。

高速で相手に体当たりをし、その衝撃波で相手にダメージを与える。

ただし、一直線なために相手が避けるだけで攻撃から逃れられる。

そのために、高速で動く敵には不向き。

終焉のレクリエム

「ステータス」

威力：S S +

速さ：A +

追尾性：G

リカバリー：C

解説：隆介が最初から持っている技。

高濃度の魔力で相手を叩き落とす。

威力が高いのだが、やはり追尾性には難がある。

リカバリー速度は他の砲撃魔法と比べるとやや早い分類。

機動力に長けさらに、空中飛行が出来る相手だった場合は、距離を取るか、放出準備を先にする必要がある。

（主人公についての総合解説）

世界の意思と言う存在の隆介は、能力面を見て貰っても分かるように、反則とも言える力を秘めている。

それが蒐集であり、これを行えば、相手の技などを習得し、自分の物にする事が出来る。

他にも特殊能力があり、”リンクアタック”と言う物もある。

これは、ある人物との信頼関係が成立しているときのみ有効で、その人物の攻撃威力が倍になる。

ちなみにこの時隆介は、その人物の攻撃特製の反対の攻撃をする。

例えば、相手が砲撃主体だった場合は敵に与えたダメージの半分を利用して、体力や魔力の回復をする。

ちなみに、世界の欠片についても解説をしますと、矛盾因子の塊である怪物を倒した時に出る、宝石のような物の事で、これを利用して不可能を可能にしたり、攻撃に利用したりする事が出来る。

ただし、一つ一つのエネルギーが膨大なため、ロストロギアと間違えられる可能性あり。

## 主人公の設定（後書き）

ということでした、主人公の紹介は終わりとなりました。

少々グダグダ感が出てしまいましたが、主人公について少しでも伝わったら幸いです。

そして、いよいよ次回から魔王……失礼しました。

あの人物が登場します。

皆さんの感想を随時お待ちしております。

それでは、これで失礼します。

### 第3話「変わり果てた日常」(前書き)

どうも、TRです。

紹介に引き続いている、連続投稿になります。

ちなみに、前回募集しました、神の名前についてですが、空牙刹那様の案『ノヴァ』に決定いたしました。

空牙刹那様にはこの場を借りて、もう一度お礼を申し上げます。

それでは、ご覧ください。

### 第3話「変わり果てた日常」

「……………」

俺は、今初めて周りの視線が気になった。  
なぜなら……………」。

(なんで、俺が小学校に……………)

それは今から数時間前にさかのぼる。

「あれ？なんだこの手紙は」

朝起きた俺は、朝食の支度をしようとして台所に行くと、そこには手紙が置かれていた。

「なになに……………」 『編入試験合格通知書』!？」

俺はその文面を読み進めて行った。

そして、一発で理解した。

「あの野郎!!」

俺は怒りのあまりに、手に握っていたコーヒークップを粉砕した。  
さらに、玄関には制服までが置かれていた。

そして今に至る。

(……………さっさと行こう!!)

俺はそう決意すると、職員室に向けて早足で歩いた。

そして、俺は『私立聖祥大附属小学校』の門をくぐったのだった。

「今日から、皆のお友達になる子を紹介しますね」



そして、俺は先生の言葉を聞くと教室の扉を開けた。  
俺は黒板に自分の名前を書くと、クラスメイトとなる人たちの方を  
見た。

「初めまして、鈴木隆介です。家の事情で転校してきました。これ  
からもよろしくお願いします」

俺は、そう言つとお辞儀をした。

最初はまばらだった拍手が、まるで大波のように響いた。

「それじゃ、隆介君は高町さんの隣の席ね」

「はい」

そして、俺は栗色の髪をした少女の隣の席に座った。

「私、高町なのはつて言うの。よろしくね、鈴木君」

「改めて、鈴木隆介です。こちらこそよろしくね（ニコ）それと姓  
じゃなくても良いよ。まどろっこしいと思うから？」

俺は、知識として得た事の一つを実行した。

『誰に対しても笑顔を振りまこう』

「……………！う、うん。それじゃあ、私の事も……………その……………なのはで、  
良いよ／＼／」

「うん、分かった。それじゃあ、なのはこれからもよろしくという  
事で」

（何でこの子は顔を赤くしているんだ？）

俺は、それが全く分からなかった。

まいった。

本当に参った。

なぜ参っているかつて？

それは……………。

「ねえねえ、あなたのお父さんってどんな人？」

今俺に浴びせられる大量の質問だったりもする。

そもそも、小学校に行くなんてことは俺の予想外の事だ。理由なんて考えているはずがない。

そう言う事で、答えるのに手間取っていたのだ。

「はいはい。彼困ってるじゃないの。一斉にじゃなくて、順番に聞きなさいよ」

その時、一人の少女……金髪の髪をした少女の言葉で、質問攻めから解放された。

「ありがとう。助かったよ」

「別に私は何もしてないわ。それよりも、私の名前はアリサ・バニングスよ。アリサでいいわ」

「私は月村すずかと言います。私もすずかでいいですよ」

俺を助けてくれた少女と、その横にいた青い髪をした少女が、俺にそう言った。

「アリサとすずかだね。俺は鈴木隆介。よろしくね、二人とも（ニコ）」

俺は再び二人に笑顔で、自己紹介した。

「それよりも、今お昼休みだけど、何処でお弁当を食べるのよ？」

「え？そう言えば決めてないや」

アリサの問いかけに、俺は苦笑いしながら答えた。

「だ、だったらしょうがないから、私達と一緒にお昼でも食べない？も、もちろんいやだったらいいのよ」

俺はにそう言うアリサの顔には『一緒に食べて欲しい』と書いてあるような気がした。

「ううん。そんなことないよ。喜んでお言葉に甘えさせて貰おうかな」

「じゃ、決定ね。すずか、なのは。行くわよ」

「にゃー！待ってよアリサちゃんー！！」

（あれ、なのはも一緒なのか）

俺はそう思いながらも、彼女達について行った。

「うわー隆介君のお弁当美味しそう」

「これってお母さんが作ってくれたんですか？」

そして、俺達は屋上で昼食になるはずだったが、弁当箱を開けると、3人が感心したように感想を言ってきた。

「あ、いや。俺って元々生まれたときから親がいないから、今は親せきの人に育てて貰ってるんだ」

俺は嘘半分、本当の事を半分話した。

俺には両親と一緒にいた記憶はない。

まあ、寂しさなんてものはなかったが。

「あ、ごめんね。変な事を聞いて」

「あゝそんなに悲しまなくても良いよ。気にしてないから」

「そうね………と言う事は、それ全部隆介の手作り？」

「そう言う事」

俺は空気を変えようとした、アリサの問いかけに乗った。

「へえ、それじゃあ私が一口………はむ。うん！！美味しい！！」

「ちよつとなのは！！何抜け駆けしてるのよ！！私も一口！！」

なのはが俺の弁当から唐揚げを一個食べると、アリサがなぜか叫んで、今度はウインナーを一個食べた。

「あゝずるいよ二人とも！！」

さらにすずかまで加わって、もはや混沌としていた。

俺の周りからは、男子学生の嫉妬の念が、じつとりと感じていた。

なんでこうなったのかがよく分からないが、こうして俺の小学校生活初日は終わったのだった。

### 第3話「変わり果てた日常」(後書き)

と言う事で、第3話になりましたが、いかがでしたでしょうか？

一体隆介は何人落とすのか？

あの笑顔は殺人級の威力があります。

皆さんからの感想などをお待ちしています。

それでは、今回はこれで失礼します。

## 第4話「対面」(前書き)

7月7日時点でPV1400達成しました。  
本当にありがとうございます。  
それでは、第4話をどうぞ

## 第4話「対面」

「……………」

俺は固まっていた。

いや、冷や汗をかいていた。

理由としては俺に殺気を送る“2名”の人物だが……。

それは今からほんの数十分前に遡る。

「隆介、ちよつと待ちなさい」

「え、何かな？アリサ」

授業も終わり、早く帰ろうとした俺に声を掛けたのは、他でもないアリサだった。

そしてアリサの横にはさすがとなのはがいた。

「隆介って、デザートとか苦手？」

「いや、そんなことはないけど……それがどうかしたのか？」

アリサの問いかけに、俺は聞かれるがまま答えた。

「ちよつと、付いてきなさい」

「どういう……ってち、ちよつと！ー！」

俺はもう何が何だか分からなかった。

と言うより、俺はアリサに引きづられながら、連れられて行った。

「それで、どうして俺が呼ばれているんだ？」

「実は、なのはちゃんのお父さんとお母さんが経営しているお店があるの。そこに向かっているんだよ」

俺の疑問にさすがが答えた。

ちなみになぜ俺まで連れて行かれるのかと言う疑問もあるのだが、俺は深く考えないようにした。

「ここが、そのお店よ」

しばらく歩くと、ある建物の前でアリサ達が止まった。

看板らしき物から察するに、このお店は喫茶店のようだった。

「それじゃ、入るわよ」

そして俺は半場強引に喫茶店『翠屋』に入ったのだった。

そして、今に至る。

現在殺気を飛ばしているのは、なのはの父親の土郎さんとお兄さんの恭也さんの二人だ。

その殺気はまるで、油断したら食い殺されそうなくらいの物だ。

「お兄ちゃん……ちょっと、向こうでお話ししようね」

「お、おいなのは!!」

あ、恭也さんの殺気に気付いたなのはが、恭也さんに負けないぐらいの形相で恭也さんを連れて行った。

……何気に一番恐ろしいのは、なのはじゃないのか？

一瞬そんな事を考えた。

「はいお待たせくショートケーキ三つね」

「……ありがとうございます」「」

とりあえず頼んだのが来た事だし、些細なことは考えないようにしよう!!

そう、今後ろで鳴り響いている、恭也さんの断末魔も考えないようにしよう。

「そつだ。隆介、明日暇？」

「まあ暇だけど」

突然アリサから聞かれたので、俺は驚きながらも答えた。

と言うより、俺の場合は突然用事が入ったりするからな……。

「だったら、明日なのは達と一緒にすずかの家でお茶会でもしよう

と思ってるんだけど、隆介も来る？」

「俺としては構わないけど、どうして転校してきたばかりの俺を？」  
俺は今まで感じていた疑問を口にした。

普通なら、転校したての人にはここまでしない……はず？

「そんなの決まってるじゃない。……だから」

「え？今何て言ったんだ？」

アリサの言葉の後半が聞き取れなかった俺は、もう一度聞き直す事にした。

「隆介君。あまり深く考えなくても良いと思うよ。だからね、お茶会に来ないかな？」

「ずずか俺に対して上目遣いで聞いて聞くる。」

「そして結果はと言えば……。」

「隆介君が行くんなら、私も行こうかな」  
行く事になりました。

「それじゃ、明日の朝ぐらいにこの近くのバス停に行けばなのは達と合流できるから、なのはと一緒に来てね」

「帰り際にそう言うと、アリサは帰って行った。」

「また明日ね。隆介君」

「ああ、また明日な」

そして、俺も帰路に就くのだった。

『隆介さん』

「どうした？ヴェネゼイラ」

夜、夕食を済ませて、皿洗いが終わったのと同時に、ヴェネゼイラが話しかけてきた。

『矛盾因子を確認しました』



「分かった。それじゃ、今すぐに向かうとしますか。ヴェネゼイラ、セットアップ!!」

『All right. set up!!』

そして、俺はバリアジャケットを身にまとうと、左手にある刀を背中中に装着すると、確認地点に向かった。

「ここがその確認地点か」

『何もありませんね』

そして俺達が辿り着いたのは、朝俺が通っていた小学校だった。

『隆介さん。後方から何者かが迫っています』

「敵か……」

俺は警戒しながら呟いた。

しかし、それはすぐに間違いだと思い付いた。

何せ、こっちに向かってきていたのは……

「り、隆介君!？」

今日知り合いになった、高町なのはだったからだった。

なのはSide

「なのは!!」

「うん!!」

夜、寝ようとしていた私でしたが、突然違和感に襲われました。

しかしそれはほんの一瞬だったのですが、これは今私に声を掛けたフレットのユーノ君の探し物の“ジュエルシード”が発動した証拠なのです。

「レイジングハート、セット、アップ!!」

『Standby really set up』

そして、私は急いで発動した場所に向かいました。

でもそこには誰かが立っていました。

「り、隆介君?」

その人に近づくとその人は、今日転校してきた隆介君でした。

なのはSide End

「なるほど、ジュエルシードと言う物が発動してこっちに来たのか」  
俺達はあの後、どうしてここにいたのかなどを説明しあつた。

とはいっても俺は、”変な気配を感じたから”としか言つてないが。

「あの、あなたは管理局の人ですか？」

「いや違うというより管理局って何だ……って！！イタチがしゃべつた!？」

イタチの問いかけに普通に答えた俺は、普通に驚いていた。

「イタチじゃないです！！フェレットです！！」

「えっとこの子はユーノ君って言つて、ジュエルシードと一緒に探しているの」

「ユーノ・スクライアです。ユーノと呼んでください」

「鈴木隆介だ。どつちで呼んでも構わない」

俺とユーノは名前を教え合つていた。

そんな時だつた。

『隆介さん!!』

「分かつてる!!」

ヴェネゼイラの声が聞こえた次の瞬間、上空から黒い塊が降つてきた。

それは昨日とは比べ物にならない大きさだつた。

「な、何これ!？」

「つち……中形か、厄介だな」

俺は舌打ちをした。

目の前の怪物からは、明らかに別の力も感じる。

どうやら、なのは達の言う“ジュエルシード”と言う物と結合してしまつたんだろう。

「なのは、よく聞いてくれ。実はな……ということなんだ」

俺は、緊急事態のため、なのはに要点だけを伝えた。

目の前の怪物には魔法攻撃などは一切聞かず、そしてジュエルシードと結合しているからだ。

「えっと、どうすればいいのかな？ユーノ君」

「ごめん、僕にも分からない」

俺の伝えた事に二人は戸惑っていたようだ。

「方法は、簡単だ。あいつから、ジュエルシードを分離させればいいんだ」

「そんな事が出来るんですか？」

俺の考えになのはが、疑問の声を口にした。

「まあ可能と言えは可能だな。俺はこの怪物に用がある。ジュエルシードに関しては、そっちで封印して貰っても構わない」

俺はそう言うと、背中に装着していた刀を構えた。

「では……行くぞ!!」

そして、俺は怪物に飛びかかった。

「斬り裂け!!」

俺は刀を振り上げ、怪物を切り裂こうとするが……。

「何!?!」

怪物は、今までの怪物よりも早く移動した。

と言う事は、こいつ機動力があるやつと言うことか。

「グオオオオオオ!!!!」

「鷹よ、怪物を喰らえ!!」

俺は、蒐集をする事にした。

そして俺の頭の中に、一つの技が加わった。

「行くぞ!!ソニックアタック・ブースト!!」

それは俺が昨日取得した技の強化版だった。

俺は、地面をけると、一気に怪物に向かった。

もちろん怪物も、避けようとするがそうは問屋が卸さない。

怪物が避けると、怪物を追うように進路を変更された。

そして……。

「グオオオオオオ!!?!」

俺の技が怪物に直撃し、怪物は吹っ飛ばされた。

それと同時に宝石の様な物が分離した。

(よし、ジュエルシードと怪物の結合が崩壊。あとは……)

俺は、ジュエルシードをなのは達に任せると、怪物に止めを刺した。

「なのは、大丈夫か？」

「きゅ」

その後、疲れ果てたなのはを担いで帰っているのだが、なのはは気絶していた。

なぜか顔が赤い。

「隆介君に抱っこされてる……きゅ」

(まあ、この様子だと大丈夫か)

俺はそう思うと、なのはを自宅に送り届けるのだった。

## 第4話「対面」(後書き)

ということでした、第4話になりましたが、いかがでしたか？  
今回習得した技の説明です。

ソニックアタック・ブースト

「ステータス」

威力：A A A

速さ：A

追尾性：A A A

リカバリー：D

解説：前回習得した技の強化版で、追尾能力が加わった。

これにより、機動力のある敵にも対応できるようになった。

それでは、次回もお楽しみに。

## 第5話「猫屋敷」(前書き)

どうも、TRです。

そして、何と今回でPV2500・ユニーク640を達成しました。  
本当にありがとうございます。

それでは、3日ぐらい日が空きましたが、第5話始まります。

## 第5話「猫屋敷」

日曜日。

それは誰しもが楽しみにしている、一週間で1度は必ず迎えられる日だ。

そんな休日に、俺達はバスに乗っていた。なぜかって？

理由は簡単だ。

ずずかの上目遣い攻撃に負けて、俺となのはそして、恭也さんと一緒にずずかの家の行く事になったからだ。

道中、背中からとてつもない殺気を受け続けていたが……それをしり目に俺となのは、色々とお話をした。

だが、それは誰にも聞かれない話だが……。  
『それで、そうして隆介君はあそこにいたの？』

『俺はこの世にあつてはならない存在の塊である、あの化け物を始末するためにここに来たんだ』

俺はなのはに念話で、昨日の事を説明していた。

『それだったら、私も手伝うー！』

『僕も手伝いますよ』

なのはとユーノ（昨日なのはと一緒にいたフレット）は俺にそう言ってくれた。

二人が助けてくれるのは非常にありがたい……だが。

『そう言ってくれるのは嬉しいんだけど、あの化け物には魔法が一切効かないんだ。だから、物理攻撃……しかも剣で切り裂いたりしないとダメージが入らないんだ。だからたぶん二人が手伝っても逆にやりづらくなると思う』

俺の言葉になのはが悲しそうな顔をする。

……心なしか、俺に対する殺気も強くなる。

『でも、助けが欲しくなったら、その時は手を貸してくれる？』

『もちろんなの!!』

彼女の答えで話は終わり、俺は流れゆく景色を見ていた。

「おはよう、なのはちゃん、隆介君」

「おはようアリサちゃん、すずかちゃん」

「おはよう二人とも」

すずかの家のメイドさんでもあるノエルさんに案内されて、俺達はすずかたちの所にいた。

俺となのははとりあえず挨拶をすると、適当に座る事にした。

恭也さん？

恭也さんは恋人（なのはから聞いた）でもあるすずかのお姉さんの忍さんと一緒にどこかに行った。

「今日は誘ってくれてありがとうな」

「ううん隆介君だったらいつでも大歓迎だよ」

俺のお礼の言葉にすずかは笑顔でそう言った。

なんだか、俺に対する2つの殺気が気になる。

そんな時だった。

「キュー!!!!」

フレットの鳴き声を聞いたのは。

「ユーノ君!？」

なのはの視線の先を見ると、そこには子猫に追いかけられているユーノの姿があった。

と言うより、猫だらけの場所なのに外に出たらどうなるかくらいわかってるだろうに……。

「お待たせしました キュー!!!!」

悲劇と言うのは重なる物。

運悪く、ファリンさんが紅茶とケーキを持ってきてそしてこれまた運悪くユーノが彼女の足元をぐるぐると逃げ回った。

その結果ファリンさんも一緒に回る事になり……

「きゅう」

目を回して倒れそうになった。



……つて、おい!?

今ここで倒れたらこの後に起こる事は、目に見えてる。

「危ない!!」

なのは達がフアリンさんを支えようとする前に、俺は俊足で彼女が倒れないように支えた。

間一髪だ。

「あのく出来れば早く回復して貰いたいんですが……」

「り、隆介さん。ごめんなさい!!」

この時、とある場所で……

「あ、またやつてる」

「あの子にも困った物です」

頭を抱えている人物と、声の方向を見ている人物がいたそう。

その後、俺達はテラスから庭の方に移った。

「それにしても、相変わらずずずずかんちは猫天国よね」

しばらくするとアリサは、周りを見てそう呟いた。

俺達の周りには右にも猫、左にも猫、後ろにも猫これじゃ猫天国と言っより猫屋敷だな。

「うん。でも里親が決まっている子もいるから、もうすぐお別れしないと行けない子もいるんだけどね」

人と同じく猫との出会いも別れを繰り返すってか？

（果たして、この猫達はすずかの事をどう思ってるんだろうな？）

俺は膝に乗っている猫をなでながら考えていた。

（感謝しているのだろうか？それとも迷惑だと思っているのか）

前者だったら、すずかも喜ぶが後者だったら……

(考えすぎだよな)

俺はそう自己完結する事にした。

そんな時だった。

「……!!」

『隆介さん。ジュエルシードの初期覚醒を確認しました』

俺となのは同じタイミングで、何かを感じ取った。

それが、ヴェネゼイラの報告を聞いて初めて何なのかが分かった。

『ユーノ、なのは。場所は向こうの森の方からだ』

俺はすぐに位置を特定すると、不自然にならないように顔を少しだけ動かして、森の方を示した。

『でも、ここにはアリサちゃん達が……』

確かにこの二人の前で魔法を使うことはできないだろう。

『だったら、僕があつ森に行くから、それをなのは達が追いかけてくるって言うのはどうかな?』

『うん。それが良いね』

『よく頭回るよな』

ユーノの提案に俺達は頷いた。

そして、俺となのは芝居は始まった。

「ユーノ君!？」

「あらら?どうしたのユーノ君」

まずはユーノが勢いよく走りだす。

「分からない。でも何かを見つけたのかもしれないから、追いかけてくる!」

「私達も一緒に行こうか?」

そして、自然とこの場から切り抜ける様な雰囲気させる。

アリサの言葉も予想済み。

「いや。俺が行こう。もしものときには男手が必要だろ?」

決まった俺の言葉。

これで俺の理由に文句を付けられないだろう。

「隆介君」

いや、なのはぼつつとしてる場合じゃないから!!

「……………」

だから、二人は無言で殺気を放つのはやめて!!

そんなこんなで、俺達は何とか森の方に入って行った。

「とりあえず、そんなに広くは出来ないけれど、封鎖結界を!!」

「封時結界?」

ユーノの言葉の意味が分からないのか、なのはがオウム返しで言った。

「封時結界って言うのは、簡単に言ってしまえば、時間の流れを遅くして誰も入れないようにする結界ってこと」

俺は、なのはに簡単に背う名すると、気を引き締めた。

そして、ついに俺達の前に“それ”は現れた。

「にゃ〜ん」

とても大きな、巨大な猫が…………。

## 第5話「猫屋敷」(後書き)

ということでした、第5話になりました。

今回もまた、感想(または一言)や評価などをお待ちしています。

そしていよいよ次回はあの人が登場します。

それでは、これで失礼します。

## 第6話「金色と矛盾」(前書き)

かなり間が空きまして申し訳ありません。

最近かなり忙しいので、執筆する暇がありませんでした。

それでは、第6話になります

## 第6話「金色と矛盾」

「あ、あ、あれは……」

「たぶんあの猫の大きくなりたいたいという思いが、正しくかなえられ  
たんじゃないかな」

早速だが、俺達は目の前の光景に固まっていた。

それはユーノも一緒だったようだ。

理由は、目の前にいる巨大な猫だった。

しかし、それって正しいのか？

と言うより、あれじゃ怪物だろ！？

「攻撃性はないようだが、このままにするのもどうかと思うが……」

「そうだよ、さすがにあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃう  
し……」

そりゃ当然だ。

「それじゃ、ササツと封印を……レイジングハート」

なのはがそう言って、赤い宝石を取り出した瞬間だった。

「にゃーん!？」

突然上空から金色の光が、猫に向かって放たれた。

「すごいなのは。取りだしただけで攻撃か」

「ち、違うよ!？」

「いや、分かってるから」

俺の言葉になのはが慌てたように言ってくるが、そもそもそんなこ  
とは分かっている。

魔法光は変えられない。

この定義から考えられることは

### 第3者の魔法

俺は、魔法の放出元をたどった。

そこにいたのは、黒いマントを纏った金髪の少女だった。

「バルディッシュ、フォトンランサー連撃」

『フォトンランサーフルファイヤー』  
バルディッシュと呼ばれたデバイスから、再び魔法弾が放たれようとする。

「させるか！！ヴェネゼイラ！！」

『分かりました！！絶対防御……展開します』

俺がヴェネゼイラにそう言つと、猫を中心に絶対に貫く事が出来な  
い不可視の壁が形成された。

その壁に少女が放つた魔法弾を、全て防いだ。

「魔法の光……そんな」

「レイジングハート、お願い！！」

『スタンバイレディ、セットアップ』

突然の事に驚いているユーノ、そしてなのははレイジングハートを  
起動させた。

『フライヤーフィン』

なのはは杖状になったレイジングハートを片手に猫に向かって走  
ると、デバイスが新たに魔法を詠唱した。なのはが空を飛んだことか  
ら、あれは浮遊魔法か……。

『ワイドエリアプロテクション』

そして猫の背中に降り立つと、猫を守る様に防御魔法を展開した。

その直後に魔法弾が数発、防御魔法に直撃した。

「魔導師？」

少女はと言つと、防がれた事に気付いたのかさらに魔法弾を放つ。

しかし、そこで予期せぬことが起きた。

『隆介さん、矛盾因子の反応を確認しました』

「なに？」

ヴェネゼイラからの言葉に、俺は驚きを隠せなかった。

突然だが、矛盾因子と言うのは黒い化け物の事だ。

そしてそれが発生する原因は、俺が持っている突如発生する膨大な  
エネルギーを秘める『世界の欠片』だ。

そしてそれにはいくつかの段階があり、まずは潜伏しエネルギーを

集めそして発動（具現化）するのだ。

今はまだ潜伏状態だ。

「探し出すのは困難だな」

『そうなりますね。しかし探さないわけにはいかないのでしょうか？』  
俺の言葉を聞いたヴェネゼイラが言うが、その通りだ。

あれを放置しておいたら、大変な事になる。

ましてや前のジュエルシードのように結合でもされたら……。

俺はヴェネゼイラにある提案をすることにした。

（なあヴェネゼイラ。サーチ魔法で探し出せるか？）

>理論上では可能ですが、行使中は無防備になります。なのはさんの手助けはできなくなりますか……<

俺の提案にヴェネゼイラが答えた。

サーチ魔法はかなりの集中力を使うため、周りに配慮する暇がない。今なのはは少女と向かい合っている。

彼女を助けたい、だけど……

（俺は世界の意思だ。なのはもそうだが、俺はこの世界を守る義務がある。だから、やる）

>分かりました。それでは、サーチ魔法開始します！！<

ヴェネゼイラの言葉と同時に、俺は目を閉じてひたすら集中した。頭の中にいくつもの景色が見えるが、結局は空振りに終わった。

「やっぱり駄目か」

『そうですね……っ！？隆介さん、なのはさんが！！』

俺はその声であたりを見回した。

そしてそこには、意識を失って倒れているなのはの姿があった。

「なのは……！」

俺は急いで駆け寄った。

「怪我はしていないから大丈夫だとは思っただけど」

「仕方ない……ヒヤリングー！」

俺はユーノの言葉を聞き、なのはに回復魔法を掛ける。

さすがは意思の力だ。



見る見るうちに怪我が治って行く。

「これで一安心……っ!？」

気を抜いた瞬間、俺は違和感を感じた。

この感じ、まさか!？」

> 隆介さん、矛盾因子が発生しました。規模は……大型!？」

(何だと!?)

ヴェネゼイラからの情報に、俺は愕然とした。

「隆介? どうしたの?」

「悪い、なのはのこと頼んだ!！」

俺はそう言つと、空を飛んだ。

「あ、ち、ちよつと!？」

後ろからユーノの慌てたような声が聞こえるが、それを気にせずにただひたすらに、矛盾因子の元に向かった。

???? Side

「いや、確保できてよかったね、フェイト」

「うん。これで母さんも喜んでくれるかな」

私 フェイト・テスタロツサ は、目的のジュエルシードを手に入れた拠点地に向かい空を飛んで向かっている所でした。

「あのオニババのためにそこまでしなくても」

私の横を飛んでいる使い魔のアルフはそう言うけど、あの人は私の母親だから……。

「バルディツシュ?」

そんな時でした。

バルディツシュの様子がおかしくなつたのです。

「ち、ちよつとフェイト!？」何かどんだん大きくなつて

アルフの声が聞こえた時にはもう遅かったのです。

バルディッシュユだったそれは今や巨大な怪物になっていました。

「グオオオオオオオオオオ!!!」

「ひっ!?!」

私は怪物のうめき声に怯えてしまいました。

そして、その怪物は私に向かってフォトンランサーを放ってききました。

明らかにあれは、直撃すれば無事では済まないと分かりました。

(な、何?どうなってるの?)

私には目の前で起きている事が分からなくなりました。

そして、気付いた時には、魔法弾は目の前に迫ってきていました。

「フエイト !!!!!!!」

アルフの叫び声が聞こえました。

(ごめんね、アルフ)

私はもう駄目だと思いました。

「させるか————!!!!!!」

でもそんな時、私の前に割って入る人が見えました。

「え?」

私は何があつたのかが分かりませんでした。

魔法弾は確かに少年にあたったはず。

なのに、少年は全くの無傷なのです。

「大丈夫?怪我はない?」

「は、はい」

そして少年は振り返ると、私に聞いてきました。

「そうか、間に合ってよかった」

私の言葉に安心したように少年は笑顔で言いました。

私は顔が熱くなるのを感じていました。

そして、少年は怪物と向き合いました。

??? Side End

「ヴェネゼイラ、矛盾因子は？」

『マスターから見て正面に確認しました』

しばらく飛んでいると、矛盾因子の姿を確認できた。

さらに最悪な事に、矛盾因子が少女に向かって魔法弾を放とうとしていた。

「フェイト　！！！！」

オレンジ色の毛をした犬？が叫んだ。

フェイトと呼ばれた少女は、もう駄目だと思ったのか、目を閉じていた。

「させるかーーーー！！！！！！」

俺は叫びながら矛盾因子と、少女の間に割って入った。

次の瞬間には、魔法弾が俺に直撃するが、さつき掛けておいた絶対防御によって防がれた。

「え？」

「大丈夫？怪我はない？」

何が起ったのかが理解できていない少女に、俺は聞いた。

「は、はい」

「そうか、間に合ってよかった」

俺はほっと胸を撫で下ろした。

しかし、目の前の少女が顔を赤くしているのはなぜだろうか？

と言うより、この少女さつきなのはと対偶していた奴じゃないか。俺は怪物の方を見た。

（規模は大型か）

俺はそれを見てどうした物かと考えを巡らす。

「ヴェネゼイラ、あいつ何と結合してやる」

『おそらくですが、ジュエルシード3つとインテリジェントデバイスです』

「何！？」

ヴェネゼイラの答えに俺は驚きを隠せなかった。

そして俺はすぐに想像ができた。

つまり、あいつが取りこんだデバイスは……

「一つ聞くが、あいつは君の……確かバルディッシュだったか？を取り込んだか？」

「は、はい。いきなりバルディッシュが黒い光を放って、気付いたら」

俺の問いかけに少女が顔を伏せながら答えた。

そりゃ自分の相棒とも言える存在が取り込まれたら、ショックだろう。

「ちょっと待ちな」

少女のそばにいたオレンジ色の毛をした犬が俺に聞いてくる。

「何だ？」

「どうしたあんたが、フェイトのデバイスの名前を知っているんだい？」

俺はその問いかけに答えた。

「細かい話はあとだ。それよりも、フェイト」

「は、はい！？」

名前で呼ばれたためか、フェイトの顔が赤くなった。

だって、それしか名前知らないし。

「名前で呼ばれるのは嫌か？」

「い、いえ。そんな事はありません」

「まあ、話を戻すが、今あいつはフェイトのデバイスを取り込んでいる。つまり、あんたが使う攻撃をそのままする事になる」

俺はフェイトに簡単に情報を伝えた。

「さて、そこで3つの方法がある。まず一つが、あいつを真っ二つに切る事。ただしそんな事をすればジュエルシールドやデバイスも真っ二つになるだろうな」

「そ、それだけは駄目！！」

俺の提案にフェイトが必死に反対してきた。

これは俺も反対だ。

作業自体は一番簡単だが、後の影響を考えるとこれは却下になる。

「二つ目が、あいつを結合崩壊させる事。そうすればジュエルシードとデバイスは無事に取り戻す事が出来る。ただ、それが出来ればの話だが」

「どういう事ですか？」

「フェイトは機動重視？それともダメージ重視？」

俺は分からなそうな表情をして、問いかけてくるフェイトに聞いた。

「えっと機動重視です」

「だとすると難しいな。あいつはお前の能力をコピーしたような存在だからな」

俺はフェイトの答えを聞くと二つ目の案を却下した。

結合崩壊を起こすには、結合部分にダメージを与えて切り離せばいいだけなので、比較的に簡単だ。

しかし、相手に素早く移動されたらそれも難しくなる。

そもそもフェイトのデバイスを取り込んでいる時点で、彼女の魔法を全て使えるようになっていている状態だ。

こうなったら最後の方法しかない。

「最後に、フェイトと連携してあいつを叩き潰すことだが。これには二つの問題がある」

「問題……ですか？」

「まず最初の問題が、あいつには魔法攻撃は通じない所だ」

理由は分からないが、あいつは普通の魔法攻撃が全く通じない。通じるのは俺のような神族の魔法だけだ。

「つまり、フェイトがいくら頑張った所で、あいつにはダメージは入らない。」

「そんな……」

「そこで俺の能力を使うという訳だ」

俺は落ち込んでいるフェイトに明るく告げた。

フェイトの魔法を通じさせる方法が一つだけある。

「俺には『リンクアタック』という特殊攻撃がある」

「リンク……アタック？」

俺の言葉にフェイトは分からなそうに、首をひねっている。

「リンクアタックと言うのはな、いわゆる合体攻撃のような物だ。相手に向けて大ダメージを与えるような魔法を叩きこむ事が出来るのだが、これを使うには俺とフェイトとの信頼関係が必要になる。今の俺達にはあるか？」

俺の言葉にフェイトは何も言わなくなった。

今の俺達って初対面の様な物だし、敵同士だ。

信頼関係が生まれているとは到底考えつかない。

「でも、試す価値はある。と言う事でお手を拝借」

「きゃ!？」

俺はそう言つとフェイトの手を取った。

別に疾しい事はない。

俺はフェイトの手へと力を送り込む。

「私の体が……光った」

「嘘だろ？」

俺は驚いた様子のフェイトをしり目に、目の前の事実には愕然としていた。

「あんだ、一体フェイトに何をしたんだ？」

すると、オレンジ色の毛をした犬が、俺を睨みながら問い詰めてきた。

「俺がやったのは適性検査で、信頼関係が結ばれているかを調べたんだが、今の様子から見るに結ばれているようだ」

初対面の人を信用するというのは、少し信じられないが、これで何とかなりそうだ。

「それじゃ、フェイト。リンクアタックのやり方を説明するぞ」

そして俺はフェイトに、リンクアタックのやり方を説明する事にした。

「リンクアタックのやり方は、それぞれのデバイスを重ねるか、もしくは手を重ねること出来る」

「手を…… / / /」

いや、だからそこで顔を赤くしないでくれ。

どう対応すればいいかが分からなくなるから！！

「とにかく、俺が一通り、奴にダメージを入れるから止めで使っぞ。良いか？」

「分かった」

俺はフェイトの答えを聞き、怪物に向けて攻撃を始めた。

「ソニックアタック・ブースト！！」

俺は機動重視の敵に対応した、体当たりを仕掛けた。

俺の体はまるで矢のように、怪物に向かって飛んでいく。

「グオオオオオオオオオオ！！？」

怪物に直撃し、奴はひるんでいた。

俺はその隙を逃さなかった。

「鷹よ、獲物を喰らえ！！」

俺はすぐに蒐集する事にした。

鷹が俺の体に戻った瞬間、俺には新たな力が宿ったのを感じた。

「ヴェネゼイラ、遠距離スタンバイ！！」

『了解！！モードチェンジ』

俺の指示を聞き、ヴェネゼイラの姿が、見る見るうちに変わって行く。

それは砲撃モードのときの杖と同じ青色に先端には銀色の宝石が取り付けられている物だったが、先端の宝石部分の下には翼が生えていた。

（なるほど、これならある意味しっくりくるな）

俺は考えるのを辞めると、入ってきた情報をもとに技を繰り出す。

「アークセイバー！！！！」

それはまるでブーメランのごとく、相手に向けて飛んで行った。

「わ、私の技があ！？」

何か後ろで声があったが気にしない。

「グオオオオ……グオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

アークセイバーに直撃した怪物は、雄叫びをあげ俺達に魔法弾を放

つ。

「させない！！全ての根源を覆しその神門は、秩序の楯となり……絶対防御！！」

俺のが展開した防御魔法に、魔法弾が防がれた。

「フェイト！！行くぞ！！」

「はい！！」

そして俺は左手を上空に上げ、フェイトが右手で俺の手に重ねた。

「フォトンランサー！！ファイヤー！！」

フェイトから魔法弾が放たれる。

しかし、あれにはダメージがない。

だからこそ……。

「ジャツジメント……ブレイカ……！！！！」

俺は特大砲撃魔法の一つを放った。

そしてフェイトの金色の魔法弾に、俺の銀色の砲撃魔法が怪物を貫いた。

気づけば、怪物の姿はなくデバイスと3つのジュエルシードそして3つの世界の欠片が浮かんでいた。

「俺はジュエルシードには興味がないから。俺はあれだけをいただくとする」

そう言うと、俺は世界の欠片を瓶に詰めた。

「あの、あなたは何者ですか？」

「すまないが、それには答えられない。」

「だったらあたしからも良いかい？」

「ええ、どうぞ……えっと」

俺はオレンジ色の毛をした犬と呼んでいいのかに迷った。

「あ、あたしはアルフ。そしてこの子が……」

「フェイト・テストロッサです」

「アルフだな。俺の名前は鈴木隆介だ。呼び方は任せる」

俺達は互いに名前を告げた。

「それで、アルフ。聞きたい事って何だ？」



「っと、そうだった。あんたの目的って一体何だ？」

「それか……俺の目的は、この世界すべてに存在する、矛盾因子を失くしていくことだ」

アルフの問いかけに俺はそう答えた。

完全になくすことは無理でも、倒していくことはできる。

「それってどういう 悪いけど、なのは達が待ってるから俺はこれで」

俺は話からそんな表情をするアルフにそう告げると、その場を離れた。

「全く、あんたがっついて行ってどうしてこうなるのよ?」

「隆介君、後で道場に来い」

すずかの家に戻った俺は、途中でなのはと逸れたという事にした。

それを聞いた時、すずかとアリサは、呆れたような表情で俺を見ていた。

ちなみに恭也さんからは殺気が贈られる事になった。

なんでだ!?

こうして、俺とフェイトのエンカウントは幕を閉じた。

## 第6話「金色と矛盾」(後書き)

ということでした、第6話になりましたが、いかがでしたでしょうか？

次回は温泉に行こうかそれとも恭也との戦闘フラグを立てようかと悩んでいます。

それ以前に次回はいつ執筆できるかも疑問です。

それでは、これにて失礼します。

## 第7話「武道と魔法」

「さあ、隆介。準備は良いか？」

「いつでも……」

早速だが、俺は今命の危機にある。

これは大げさではない。

なぜなら今目の前にいる人は……。

なのはのお兄さんの恭也さんだからだ。

そんな俺達が今からやろうとしているのは、模擬戦だった。

経緯を簡単に説明すると、こっちに戻ると、恭也さんは戻る前に言

っていた通りに俺を道場へと強引に連れて行ったのだ。

そして俺は手に木刀を持っている。

本当なら魔法で応戦したいのだが、家族には伝えていないというな

のはの念話で、それは出来なかったのだ。

「では、いざ参る……！」

そして、俺と恭也さんの死闘が始まった。

「は……！」

恭也さんの持つ木刀で俺を貫こうとするが、俺はそれを軽いステッ

プで避ける。

「てりゃ……！」

俺は隙の出来た恭也さんに向けて、木刀を振り下ろした。

しかし、それは空振りに終わった。

「消えた……！」

そう、消えたのだ。

辺りを見回すが、恭也さんの姿がない。

しかし、俺は気配を探った。

「………そこか……！」

俺は背後をむくと、俺は今まさに振り下ろされようとした木刀を防いだ。

「何!？」

恭也さんは防がれた事に驚いているようだった。

「お返しだ!!」

「……つち!!」

俺の突きを恭也さんはバックステップでよけると、恭也さんの気配が変わったような気がした。

まるで、武士のような殺気に満ちた物に。

(すっかりしろ。落ちつけ)

俺と言えばその殺気に当てられた為に体が、まるで石のように動かなくなった。

体中から冷や汗が沸き出ているのが分かった。

「これでおしまいだ」

恭也さんはそう言うと一緒に距離を詰めて、木刀を振った。

無意識だった。

ただそれしか言うことはない。

「なに!？」

俺は恭也さんの背後に一瞬で回り込み、木刀を恭也さんに向けて降りおろした。

道場内に倒れる音が聞こえた。

気づけば、俺は恭也さんを倒していた。

「大丈夫? 恭也」

「大丈夫だった? 隆介君」

倒れ伏した恭也さんを心配そうに介抱するメガネを掛けた女性 美由紀さん の姿があったのだが、俺の方はと言えば、なのはが心配そうに介抱していた。

実の兄が倒れているのに心配しないんだな……。

そんなこんなで、俺と恭也さんの模擬戦は終わった。

ただ、是非今度お手合わせ願いと恭也さんに言われた時は、全力で断った。

「ふう、温泉か」

夜、一人寂しく夕食を食べながら、なのは達との会話を思い出した。

『温泉ですか？』

『うん。来週の連休にねずずかちゃんの家族と、アリサちゃんと私達で行く予定なの。だから隆介君もどうかかな？』

なのはの御両親が経営している喫茶店『翠屋』で、一息ついていた時のことだった。

なのはから来週に迎える連休で、高町家と、月村家そしてアリサと言う大人数で温泉に行くとのことだった。

『いや、家族での旅行何だから俺は良いよ』

家族での旅行に他人である俺が、立ち入ってはいけない。

そんな考えで俺は断ったのだが……。

『良いじゃないか。俺達も大賛成だよ』

そんな中俺を追い詰めたのは、なのはの父親の土郎さんだった。

結局あれよこれよという間に、俺の参加は決まったのだった。

「ヴェネゼイラはどう思う？」

『そうですね〜温泉も良いじゃないですか』

「そうか？」

ヴェネゼイラの答えに俺は疑問形で返した。

『そうですね！！美容ですよ！！美容！！』

「い、いやそこを熱く言われても……」

俺はヴェネゼイラの雰囲気を押されていた。

「まあ、今日は矛盾因子もないようだし、寝ようか」

『そうですね』

そして、俺は今日は寝ることにした。

とてつもないが疲れた。

「おやすみ、ヴェネゼイラ」

「お休みなさい。隆介さん」

俺は一人でベッドに横になると、眠りについた。

「ああ。いつか肉体を持って隆介さんと一緒に寝たいです」  
ヴェネゼイラのそんな恐ろしい、願いの言葉を聞きながら。

## 第7話「武道と魔法」（後書き）

と言う訳でして、皆さんお久しぶりです。

結局恭也との戦闘フラグを立てたという落ちですが、御神流とかはあまり知らないので、ちょっと変だったかもしれない。

皆さんの感想を、お待ちしております。

そして次回はいよいよ、温泉になります。

それでは、また次回にお会いしましょう。

第8話「海鳴温泉で……」(前書き)

どうも、TRです。

皆さんお久しぶりです。

5日間の間が空きましたが、第8話これよりスタートです。



## 第8話「海鳴温泉で……」

「うわ〜」

俺達は連休を利用して、高町家と月村家そしてアリサという団体で、近くにある海鳴温泉に向かっていた。

だが……

「なんで、俺がここに」

「男のくせにぶつぶつ言うんじゃないの!?!」

「私の隣……いやなの?」

「い、いや……嫌じゃない」

俺はなのはの上目遣い+泣き落として落ちた。

俺の右隣にはなのは、左隣りにはすずかとアリサがいた。

一部では八 何とかと言われそんな状態だ。

こうして俺達は旅行先へと向かった。

「ここが海鳴温泉か……」

> 良い場所ですね<

俺は目的地に到着すると、景色を眺めていた。

「あ、恭也さん荷物運び手伝います」

「良いって……あんたもなのは達と一緒に、自然を堪能してこい」

恭也さんはそう言うと、荷物を持って中に入って行った。

(……まあ良いか)

俺はお言葉に甘えて、辺りの散策を始めた。

「あれ、隆介君」

「お、なのはか」

森のような場所に入ると、そこにいたのはなのはだった。

「隆介君も、お散歩？」

「ん？まあそんな所だ」

（よかった……この間の事を引きづっていなくて）

元気そうなのはの様子に俺は一安心をした。

いきなり自分よりの強敵が現れたんだ、少しぐらいは落ち込んでいるかと心配していたが、どうやら思いすぎだったみたいだ。

「存分に楽しもうな、なのは」

「うん！！」

だからこそ俺はそう言った。

「そう言えば隆介君、温泉にはいつごろ入ったんだい？」

「えつと今から3年くらい前ですね」

そして今は恭也さんと土郎さんに誘われて、温泉に入っていた。

「隆介、助けて！！」

「ん？どうした？ユーノ」

そんな中思念通話で、ユーノからのSOSが入ってきた。

「なのは達に連れられて女湯にいるんだよ！！なんとかしてよ！！」

（あゝ通りで見かけないわけだ）

俺は一人納得していた。

「無理！！」

「そんなこと言わないでさ」

そんな事を言われてもな……

「俺が女湯に入ることはできないだろ！！」

「だったら、念話でなのはを説得して！！」

俺はユーノの言葉に渋々と、なのはに念話をつなげた。

『なのは、聞こえるか?』

『あれ、隆介君?どうしたの?』

『ユーノが男湯に入りたいつて言ってるんだけど』

俺はなのはに、事情を説明した。

『だったら、隆介君が私達と……その入ってくれるなら』

『ユーノが入りたいだって!!』

『ち、ちよつと!?!?』

すまないユーノ!!

でもそうしないと俺の精神が持たないんだ!!

『残念だけど、そうするね』

なのははそう言うのと念話を切った。

『と言う訳でユーノ。温泉から出てきた暁には淫獣もしくは変態の

称号を与えてあげる』

『そんなのはいらさないから!!』

俺はそれから何度も続くユーノのSOSを無視した。

『も、もう……駄目』

その言葉を最後に、ユーノからの念話が途切れた。

(ユーノ、お前のことは多分忘れないぞ)

そして俺は温泉を楽しむのであった。

3人称Side

「きゅー!!!」

「ほら、ユーノ暴れない」

ここは女湯。

なのは達に連れてこられたユーノは、アリサによって洗われていた。

「それにしても、あとちよつと早ければ隆介と一緒に入れたのにな

」

実はアリサ達は、恐ろしい計画を立てていたのだ。

それが隆介を気絶させて、女湯に無理やり連れて行くという物であったが、隆介が恭也と早くに温泉に入ってしまった事で失敗に終わ

った。

「こうなったら、夜寝ているときにでも……」

アリサの不気味な笑みを含めた笑顔はまるで、悪魔のような物だった。

「誰？今悪魔って言ったのは？恐れ多くも、この天使のアリサにそんな事を言う奴には、後でぶん殴ってやるんだから！！」

「あ、アリサちゃん！？どうしたの？いきなり」

アリサの殺気にすずか達も半場引いていた。

「ヒ！？」

「恭也、感じたか？」

「ああ、父さん」

一方男湯では、突然隆介は背筋を凍らせ、恭也と士郎は辺りを見回していた。

「あの殺気……ただ者ではなかった」

「ああ、もしもの時に持ってきていた刀を後で用意しておこう」  
士郎と恭也はそう呟くと互いに頷いていた。

（いや、そもそもそんな物騒な物を旅行に持ってくるなよ！？）

隆介の言うとおりである。

ちなみに今の殺気は、アリサからのだったりもする。

こうして、楽しい（？）温泉の時間は幕を閉じた。

3人称Side End

「ふう、いい湯だった」

俺は温泉からあがると、旅館の中を歩いていた。  
そんな時だった。

「 をアレしちゃってるのは」

「ん？つて、あいつは！！」

俺は聞こえてきた声の方を見た。

そこにはオレンジ色の髪をした女性がいた。

（あれって間違いなく、フェイトの使い魔のアルフだよな？）

「あんま賢そうでも強そうでもないしただのがきんちよに見えるんだけどなあ」

そしてアルフはなのはに近寄ると、そんな事を言っていた。

「……………おい」

さすがに我慢の限界が来たので、俺はそいつに声を掛けた。

「あ、あんたは！？」

驚くアルフをよそに俺は、アルフとなのはの間に庇うように立つ。

「今は寛いでるんだ。水を指すのであれば退け」

「あははははは！！！！」

俺は突然笑い始めたそいつに、ちよつとだけ引いた。

「ごめんごめん人違いだったかな？知ってる子によく似てたからさあ」

（んなわけあるか）

俺はアルフの言葉に心の中でそう突っ込んだ。

「あ……………何だ、そうだったんですか」

なのははアルフの言葉を聞くと、安どの表情を浮かべた。

そしてアルフはユーノの頭を撫でた。

『今のところは挨拶だけね』

「……………」

アルフからの念話に、なのはとユーノが驚きながら女性を見た。

『忠告しとくよ、子供は子供らしくおうちで遊んでなさいよね。おいたが過ぎるとガブっで行くわよ』

「……………」

アルフの念話になのはの表情が曇る。

それを見た俺はアルフだけに聞こえるよう、念話を飛ばした。

『だったら俺からも忠告しておこう……………あんまし調子に乗ると、て

めえらの腕をへし折るぞ」

『……………!!』

俺の言葉にアルフが立ち止まるが、歩いて行った。

その後、いきり立つアリサを止めるのに一苦労したのは言うまでもない。

「そうだ、隆介君も一緒に卓球しない？」

「卓球か……………そうだなやろうか」

すずかの言葉に俺が答えると、アリサを含めて全員が喜んだ。

「それじゃ、卓球がある場所まで行こうか」

そして俺達は遊戯室に向かった。

『ヴェネゼイラ』

>はい、隆介さん。分かっています<

そんな中、俺は念話でヴェネゼイラに話しかけた。

『そうか。だったら傍受と割り込みを初めて』

>分かりました<

すると、頭の中に念話が入ってきた。

『ちよっと見てきたよ、例の白い子』

『そう。どうだった？』

俺は割り込まずにそのまま話を聞いた。

『うーん。まあどうってことはないよ、フェイトの敵じゃないよ』

『そう』

(その通りだな)

俺は向こうに聞かれないように思っていた。

今のなのはの実力じゃ、いくら戦っても勝つことはできない。

『でも、ちよっと問題がね……………』

『どうしたの？』

俺は念話にさらに耳を傾けた。

もしかしたらここから何か、重要な話が聞けるかもしれないからだ。

『隆介の奴が来てるんだ』

『隆介君が!?!』

アルフの言葉にフェイトが動揺していた。

『あいつ言ってたんだ……「あんまし調子に乗ると、てめえらの腕をへし折る」って』

『っ!?!?』

『あいつは強いよ、だってこの間はフェイトの技を……』

俺は頃合いかと思い、割り込みを掛ける事にした。

『あゝ、相談中に悪いな二人とも』

『この声は!?!?』

『隆介君!?!?』

俺の介入に驚く二人。

『俺はね借りとかってすぐに返して貰う方なんだよな。だからこそ返して貰うぞ』

『ちよつと待って!! 借りって何のこと?』

俺の言葉に聞いてきたフェイトに俺は答えた。

『ここは温泉。俺達がせつかく寛いでいるのに水を差した事だ。その罰として……』

『ジュエルシードが!!』

『何だって!?!?』

俺はヴェネゼイラに頼んで、バルディツシュに格納されているジュエルシードから1個だけ奪った。

『ジュエルシードをいただく。取り返して欲しければ俺を倒すのだな。まあ俺を倒す事が出来る自信と、命を捨てる覚悟があればの話だけだな』

『それってどういう とりあえずはこっちの用件は終わりだ。いくから共に戦った戦友でもな、敵であるのなら容赦はしない ま、待て!?!?』

俺はアルフの言葉を遮って言うと、念話を切った。

「隆介!! そこで何やってんのよ!! さっさとこっちに来なさい!」

「はいはい」

俺はアリサの怒鳴り声に答えるかのように遊戯室に入った。

「……………」

「……………」

「……………」

さて、もう卓球台も出して、卓球をする準備もできたんだが、一つだけ問題が発生した。

それが今の3人のにらみ合いだ。

この理由はほんの30秒前にさかのぼる。

「隆介君、一緒に卓球をやるう」

「隆介君私とペアになってくれますか？」

「し、しょうがないから私がペアになってあげるわ」

見事に3人から卓球のペアになるようにお願いをされて、今に至る。

「だったら、くじとかで決めれば？」

「そうよ！！それよ！！」

俺が軽はずみで言った言葉にアリサは、そう叫ぶとあみだくじを書き始めた。

どうやらこれで決めるらしい。

その結果……………」

「頑張ろうね！！隆介君！！」

「ああ」

俺のペアになのはが、そしてすずかとアリサのペアになった。

「むくなのはちゃん、羨ましいな」

「むつき〜こうなったら私達が勝ってチェンジにさせてやるんだから！！！！」

そして始まった、卓球大会だったが……………結果は。



「そ、そんな……この私が3連敗するなんて」

「なのはちゃん、運動が苦手だから駄目だと思ったのに……」  
「にゃー!!それはどういう意味なの!?!」

俺となのはペアの3連勝になった。

「それはともかく、そっちも強かったぜ?」

「ありがと。でもそう言う隆介君達の方だつて」

確かに、俺達が強かったのは、コンビネーション力だった。

試合の最中俺はなのはに、どう動けばいいかの指示を出していたのだ。

そうじゃないと絶対に負けるからだ。

あの二人、異様になのはを責めてきていたからな

「こうなったら、もうひと試合よ!?!」

そしてもうひと試合をやったのだが、この勝負で俺達が負ける事になった。

「えへへ//隆介君よろしくね」

その結果俺のペアがなのはから、すずかに変わった。

「すずかちゃん……」

「裏切ったわね~!!」

「何を言ってるのかな?これは早い者勝ちだよ?」

なのはとアリサのジト目にすずかは、サラッとんでもない事を言った。

「良いわ。だったら今度は私が勝つてやるんだから!?!」

そして再び始まった卓球の勝負だが、結局この後4回戦やったが、負けることはなかった。

そんな楽しい休日を楽しんでいた。

……そう、この時まで。

この楽しさを全て消すような事態がこの後起きるとも知らずに、俺達は楽しんでいた。

第8話「海鳴温泉で……」(後書き)

と言う訳でして、第8話になりました。

次回はほぼ原作通りになります。

ちなみに隆介の能力のネタ元ですが、夜天の書に蒐集した技が使えるようになる部分と、矛盾因子は、ゴッ イーターになります。

感想や一言は随時募集中です。

それではこれにて失礼します。

第9話「越えられない壁」(前書き)

みなさん、お久しぶりです。

かなり間が空いてしまい申し訳ございません。

それでは第9話を、お楽しみください。

## 第9話「越えられない壁」

### 3人称Side

なのはやまずか、アリサそして隆介が眠っているであろう部屋から、  
すずか専属メイドのファリンが姿を現した。

「あら、ファリンちゃん。子供たちもう寝ちゃった？」

ファリンになのはの母親の桃子はそう聞いた。

「はい桃子さん。もうぐっすり」

そう言っているとファリンは襖を少し開け、二人はそつと中の様子を見た。

「あれ、隆介君の姿がないわね」

中を見た桃子が、不思議そうに呟いた。

ちなみに寝ている場所は左側から、アリサになのは、そして隆介で  
一番右がすずかとなっている。

「はい。さつき散歩に行つてくると言つて外に出て行きました」

「そう。ありがとね、ファリンちゃん」

「いえいえ、好きでやっている事ですから」

二人は近くにいた土郎達と楽しげに話し始めた。

### 3人称Side End

(ここで合ってるか?)

>はい。こちらの方からマークしている人物の生命波動を感知して  
います<

夜、俺は旅館から散歩と言う理由で出ると、フェイトの元に向かっ  
ていた。

魔力の方は隠蔽されているようだが、幸いリンクアタック時に習得したその人物が生存時に刻む生命波動のデータがあったのでそれを利用しているのだ。

(にしても、寝る順番まで騒ぎになるとは……)

俺はさっきの光景を思い出して、ため息をついていた。

誰の横で俺は寝るのかという話になり、なのは達が大騒ぎしだしたまあなのはだけは騒いでいなかったが。

何せなのはは真ん中、例えば俺がアリサの横で寝ても、すずかの横で寝てもなのはの隣は変わらないから、余裕の表情だったんだろう。

そうでなければ、俺が一番端で寝ると言った時に、大反対はしなはずだしな。

結局すずかが勝って、すずかとなのはの横で寝る事になった。

「……この感じ……ジュエルシードか!？」

俺は一瞬感じた波動を感知すると急いでその場所に向かった。

「うっは、すごいねこりゃ。これがロストログアのパワーってやつ?」

「随分不完全で、不安定な状態だけどね」

「どうやらジュエルシードを追いかけたら、一緒に探していたフェイトの姿もあった。」

「中々派手だな」

「……っ!? あんたは!!」

俺の存在に気付いたアルフが、俺を警戒した様子で見る。

(まあ、そりゃ当然か)

ジュエルシードを強奪したんだからな。

「ちよっと最終警告をしに来た。二人とも分かっているようだし」

「最終警告……だど？」

「あんまり調子に乗っていると、今度は本当に動けなくする」  
俺の言葉に二人が息をのむ。

「それだけだ。ジュエルシード、とつとと封印しろ。俺はそれに関して興味ないから」

俺はそう言うつと二人に背を向けた。

> 隆介さん。ジュエルシード封印を確認しました。それとなのはさんの反応も完治しました。こちらに向かって来ています<

俺はヴェネゼイラからの報告を聞くと、近くの木の子に飛び移った。  
(様子でも見させてもらいますか)

俺はフェイト達と対面しているのはを見ることにした。  
何か言っているようだが、ここからじゃ何も聞こえない。

(お、ユーノとアルフが消えた。恐らくユーノが強制転移魔法でも行使したんだらうけど)

俺は目の前で消えた二人を見ながらそんな事を考えていたが、声が聞こえないから内容が全く分かんない。

「……君は使い魔ってやつじゃないよ。私の大切な友達」  
「……っ」

突然二人の声が聞こえるようになった。  
恐らくヴェネゼイラのおかげだろう。

「……で、どうするの？」  
「話し合いで、何とか出来るってこと、ない？」

フェイトの問いかけになのはが答えた。

「私はロストログアの欠片を……ジュエルシードを集めないといけない。そしてあなた達も同じ目的なら……私達はジュエルシードを掛けて戦う、敵同士ってことになる」

「だから！！そう言う事を決めつけないために、話し合いつて大事なんだと思う」

フェイトの言葉になのはがそう返す。

(話し合いでは解決しきれないことだって……あるんだよ、なのは)

なのはの言葉に俺は、心の中でそう思っていた。

逆を言えば話し合いで解決した事の方が、奇跡なのだ。

「話し合うだけじゃ……言葉だけじゃきつと何も変わらない……伝わらない!!」

「……っ!？」

フェイトがデバイスを構えた。

次の瞬間には、なのはの後ろに回り込んでいた。

(やっぱりフェイトは高速機動か)

それは今のフェイトの動きを見れば分かる。

さて、なのはの後ろに回り込んだフェイトは、デバイスをなのはに向けて振りかざす。

『Flire Fin』

フェイトの一撃をかわしたなのはは上空へと退避する。

「でもだからって……」

「掛けて、それぞれのジュエルシードを一つずつ」

『Photon Lancer . get set』

「……っ!？」

「うわゝやるな」

俺は先制攻撃を仕掛けたフェイトの攻撃を見てそう呟いた。

「さて、俺は……先取り!!」

俺はこの先に起こる事を視るため、予知見とも呼ばれる技を利用した。

これは俺のような世界の意思であれば、誰でもできる能力だ。

とは言っても視れるのは、ほんの30秒先までだが

(……なるほど、それじゃ俺は)

俺は視た結果を踏まえて、次の行動を起こす準備をした。

『Thunder Smasher』

フェイトによって形成された魔法陣から、金色の魔法砲が放たれる。

『Divine Buster』

対するなのも負けてはいない。

なのはの放った魔法砲とフェイトの魔法砲がぶつかり合い、均衡を保つ。

「レイジングハート、お願い!!!」

『All right』

そしてなのはの言葉により、さらに魔力量が膨れ上がりなのはの魔法砲が、フェイトの魔法砲を突き抜けた。

なのはの魔法砲によつて、フェイトの姿は視認できなくなったが、あいつは絶対にこれぐらいじゃ負けないだろう。

魔法に初めて触れた初心者が、数年は魔法に触れているフェイトを相手にするのは無理があつた。

『scythe slash』

「……!!!」

上空から高速で迫るフェイトに、なのはは対処が出来ない。

そして、フェイトのデバイスから金色の刃が出現し、それをなのはに向けて思いつきり振りかざす。

「絶対の防御壁!!!」

俺は前もつて準備しておいた防御魔法を、なのはに掛けた。

とはいつても、体との距離は10cmだから、負けたのが理解できるとは思つが。

『Pull out』

「レイジングハート!!!何を?」

ジュエルシードを排出したレイジングハートに、なのはがそう言う。

「きつと主人思いの良い子なんだ」

「あつ!!!」

ジュエルシードを取ったフェイトは地上に降り立つと、その場を去ろうとする。

「待つて!!!」

しかしなのははそれを引き止めた。

「出来るなら、私たちの前にもう現れないで。もし次があつたら…」

…今度は止められないかもしれない」



フエイトはそれだけを言うと、今度こそ本当に去って行った。  
なのは、それを茫然と見ていた。

「……なのは」

「隆介君……」

俺はそんななのはの横に立つと、そつと呼び掛けた。

「なのはは、なのはの思った通りにやればいいと思う。だから、もし泣きたいのなら、今のうちに泣いておけばいい」

「隆……介君……うわあああああああ!!!」

俺の言葉になのはを抱きついて泣き出した。

俺は、そんななのはを優しく抱き返すことしか出来なかった。

(これでいつも通りのなのはに戻ればいいんだけどな……)

俺はそう考えたが、すぐにふっ切った。

「おい、フエイト。聞こえるか？」

「何？隆介君」

俺はそんな中、フエイトに念話を飛ばした。

「もし俺のジュエルシードを取り返したいのなら、俺と1対1で決闘をして勝つことだ。取り返したいときには、念話で俺を呼べばすぐに行く」

「……分かった」

俺の言葉にフエイトはそう答えると、念話が切れた。

(なんで、こんな事になったんだろうな?)

俺は今だ泣き続けるなのはを見ながらそう思った。

俺達はただ休みたかったはずなのに……。

俺は何もできないことへの無力感を感じていた。

## 第9話「越えられない壁」(後書き)

と言う訳で出して、今回は原作と同じ展開になりました。

フェイトVS隆介のフラグが妙にたったような……

もしかしたら次回は原作から大きく外れるかもしれませんが。  
それでは、最後に、皆さんからの一言などを待っています。

それではこれにて失礼します。

## 第10話「劣化」(前書き)

1週間も間が空いてしまい、申し訳ありません。  
第10話、これより始まります。

トッシ　さま、感想ありがとうございます。

## 第10話「劣化」

旅行の日から、変わった。

その変わったのは、俺の日常でもなく、俺の周りにいるなのは達との関係でもなく。

そう、変わったのはなのは“自身”だった。

「いい加減にしなさいよ!!」

「……………っ!!」

突然教室中に響いた音に俺は飛び起きた。

「この間から何話しても上の空でぼうつとして!!」

次に俺に聞こえてきたのは、アリサの怒鳴り声だった。

と言うより、少しだけ状況が読めた。

なのはあの日以来、上の空で俺達の話すら聞いていない。

アリサの言うとおりだった。

「あ……………う、ごめんね、アリサちゃん」

「ごめんじゃない!! あたし達と話してるのがそんなに退屈なら、ずっと一人でぼうつとしてなさいよ!! 行くよ、すずか!!」

なのはにそう言うと、アリサはスタスタと教室を出て行った。

「それと、隆介。あんたも来なさい!!」

と思っただら強制連行させられた。

そして、向かったのは屋上。

今いるのは俺とアリサとすずかの3人だ。

「何の用?俺を呼び出したりして」

「あんた、なのはがああなった理由、知ってるわよね?」

俺の疑問にアリサが問い詰めてきた。

「知らないと言えば嘘になる。でも、俺の口からは言う事は出来ない」

「どうしてよ!!」

俺の言葉を聞いたアリサが怒鳴ってくる。

ものすごく逃げたくなるような気持を必死に抑える。

「二人は、道具を使わずに、空を飛ぶ事が出来るか？物を浮かせる事が出来る？」

「な、何よいきなり」

「つまり、人には出来ることと出来ない事がある。今の俺達に出来るのは、下手に刺激を与えるのではなく、ただ見守る事じゃないのか？」

俺は、まじめな表情をして二人に言った。

「そんなの分かっているわよ。でも力になれなくても少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない!!」

「.....」

俺はアリサの言葉に、何も言えなくなった。

「私も、アリサちゃんと同じ思いだよ」

「そう.....二人は本当に優しいな。でも、俺の一存で言う訳にはいかないんだ。だから、俺達に出来るのは、なのはが話してくれるまで待つ事しかない」

俺はそう言うことしかできなかった。

（なあ、なのは）

俺は心の中で話しかけた。

それは念話ではないので、全く意味のない物だった。

（一番無力感を感じているのはなのはかもしれないけど、俺も感じてるんだ）

何かしてあげたいのに、したら世界を狂わせるという理由だけで。

「それにしても、隆介ここのところ授業以外では寝てばかりいるけど、どうしたのよ？」

「ああ、ちょっと最近寝てなくてな」

俺はアリサの疑問にそう答えた。

「そう。でも気をつけなさいよ」

「そうだよ、病気になったら元も子もないよ」

二人が俺をいたわってくれるが、俺の理由は嘘だ。

眠くなるのは、力の連続使用に伴う体の劣化だ。

俺のような、世界の意思は具現化しているだけでも、体が少しずつ衰えていくのだ。

ここ最近はかなり意思の力を使用した。

そのせいで体が劣化しているのだ。

ちなみに、今日の時点でヴェネゼイラから聞いた劣化率は55%。

つまり、力の半分以上が失われている事になる。

こうなってはもしものときには、なにも対処が出来ない。

これの対処法は三つ。

まず一つが思念体に戻る……つまり、世界の原点に戻る事だ。

これが最も有効な物だ。

思念体に戻れば、3日ぐらいで完全に回復する。

ただ、この間はこの世界にいる事は出来ないため、心配を掛ける事になる。

次が睡眠をとる。

これなら周りに迷惑をかけずに何とかできる。

しかし、これはただ劣化を遅らせるだけであって、微力ながら劣化は進んでいる。

それに今の俺は1日の9割を睡眠にあてている。

最後が契約をする事だ。

俺がこう言った世界で長期、もしくは一生具現化する場合は契約をするのが一番だ。

ただ、契約すると俺の体の劣化が進まなくなるようになるが契約者

……つまり主にはかなりの負担を掛ける。

契約者が魔法使いなら、魔力を人なら体力を消費するからだ。

とは言っても消費するのは主が寝ているときで、量も魔力で10万ほどなので、それほど多くはないがやはり負担は大きい。それに俺は人を犠牲にしてまで、具現化しようとは思わない。とはいっても、もう限界が近い。だから、こそ俺はこの日決心したのだ。世界の原点に戻るといふ決心を。

劣化が早まった理由はたった一つ。旅行の翌日のあれだ。

「それで、やっぱり強奪する気か？」

「……負けません」

俺達は人気のない山の上空で、デバイスを構え合っていた。本当に念話で呼び出された時は、驚いた物だ。

そして、最初に動いたのはフェイトだった。

「フォトランサー!!!」

俺に向けて、金色の魔法弾が放たれる。

「存在変更」

俺はたった一言を呟く。

そして、魔法弾は、全て俺の体をすり抜けた。

「な!?!」

「申し訳ないが、魔法攻撃や物理攻撃全てが通じないようにした」  
「だったら!!!アークセイバー!!!」

フェイトは、俺に向けて光刃を放つ。

「俊足!!!」

俺は動作速度を上げると、一気にフェイトとの距離を詰めた。

「封じる!!!」

「!?……ッ!!」

驚いていたフェイトだったが、何かを呟いたのを見逃さなかった。

『隆介さん!!後ろから魔法弾が!!』

「っち!!」

どうやら俺をすり抜けた魔法弾を残していたらしい。

俺に向かって、3発の魔法弾が高速に迫る。

さらに、反対からはアークセイバー。

「絶対の防御壁!!」

仕方がないので、俺は絶対に破れない壁を形成。

おかげで危機は脱したが、体が無視魔ばれる感じが一気に襲った。

「っく、これでけりをつける!!ソニックアタック・ブースト!!」

俺は習得した技を行使し、フェイトに突っ込む。

その途中、俺に魔法弾を放ったりするが、俺がこの技を使っている間、全ての魔法を防ぐ効果を付けてあるので、全くの無駄だ。

『Defensor』

フェイトのデバイスがそう発したと思うと、バリアが現れ、俺と防御魔法が拮抗する。

貫通力に自身のあるこの技、そう簡単に……

「防がれてたまるか!!!!!!」

「……っ!!」

俺の言葉と共にフェイトの防御魔法を貫いた。

そして、なのはにしたのと同じようにヴェネゼイラを首筋に突き付けた。

「……負けた……ね」

「ああ」

悲しげに呟くフェイトに俺はただそれだけ呟いた。

「それじゃ、帰る前にほら!!」

「え?」

俺は帰り際にフェイトに奪ったジュエルシードを渡した。

「なんで?私負けたんだよ?」



「だから言っただろ？別に俺はこれには興味はないって。それじゃあな」

俺はそれだけ告げると、振り返らずにその場を去った。

『ただ単に、エネルギーが小さいのを嫌っただけですよね？』

「言っつな。ものすごく切なくなる」

ヴェネゼイラの言葉に、俺は苦笑いを浮かべる。

ジュエルシードの力は、世界の欠片よりも小さい。

世界の欠片1個あたりに、ジュエルシードの3個分にあたる。

こうして、俺とフェイトの戦いは幕を閉じた。

俺は、夕方に、家に戻ると世界の欠片だけを持って、世界の原点に戻る準備をしていた。

「よし、では戻りますか」

『隆介さん。ごゆっくり』

ヴェネゼイラの言葉に苦笑いを浮かべながらも、俺は原点に帰って行った。

（まあ、そう簡単にトラブルは起こらないよな）

しかし、俺は知らなかった。

この夜にあんな事が起きて、再び戻る事になるとは……。

## 第10話「劣化」（後書き）

と言うことでして、第10話になりました。

バトル部分がかなり簡単になってしまいました。

ここから物語に少しでも補正しないと、この後の展開でバランスが崩れますので、次回は補正と言う事で、ほぼ原作通りになります。

最後に、皆様からの一言、評価などをお待ちしております。  
それでは、これにて失礼します。

## 第11話「すれ違う思い」

3人称Side

海鳴市内のとあるビルの屋上にフェイトと狼姿のアルフがいた。

「大体このあたりだと思っただけ、大まかな位置しか分からないんだ」

「あー、確かにこれだけごみごみしてたら探し出すのは一苦労だね」  
アルフの言葉を聞きながら、フェイトはデバイスを構える。

「ちよつと乱暴だけど、周辺に魔力流を打ちこんで強制発動させるよ」

「ああ、待った。それはあたしがやるよ」

フェイトの言葉を聞いたアルフはフェイトにそう言う。

「大丈夫？ 結構疲れるよ」

「このあたしを一体誰の使い魔だと？」

心配するフェイトの言葉に、アルフは自信満々に答える。

そんなアルフにフェイトは一瞬笑うと、すぐにいつもの表情に戻す。

「じゃ、お願い」

「そんじゃ！」

フェイトの許可を取ったアルフは、魔力流を打ちこみ始めた。

.....

「こんな街中で強制発動！？ 封時結界、間に合え！！」

一方ジュエルシードを探しに町を歩いていたなのは達も、すぐにそれに気づき、ユーノによって封時結界が張られる。

「レイジングハート、お願い！」

そしてユーノとはやや離れた場所にいたなのはは、デバイスを起動させ、バリアジャケットの姿に変わった。

一方、フェイト達の方は.....

「見つけた」

魔力流に反応して一筋の光を発するのを見たフェイトが、そう言う

と、アルフは下の状況を見る。

「けど、あっちも近くにいるみたいだね」  
アルフの言葉にフェイトも地面を見ると、封時結界が張られているのが見えた。

「早く片付けよう。バルデイツシュ！」

『sealing form set up』

フェイトは封印の準備を始めた。

一方なのはと言えば、発動したジュエルシードが発する光を見ていた。

『なのは、発動したジュエルシードは見える？』

『うん。すぐ近くだよ』

『あの子たちも近くにいるんだ。あの子たちよりも先に封印して！』  
『分かった』

なのはは念話でユーノと話すと、シーリングモードに切り替える。そして、フェイトとなのはの放った光がジュエルシードにあたり、均衡状態になる。

「リリカル、マジカル！」

「ジュエルシード、シリアルXIV（19）」

「封、印！！」

そして、二人同時に封印されたジュエルシードは活動を止め、輝いている状態で上空を浮かんでいた。

3人称Side End

「ふう……」

俺は世界の原点に戻ると、ゆっくりとしていた。

「お疲れ様だ、意思よ……いや、隆介と言ったほうがよいか？」

俺の横に若い紳士な感じを醸し出す男が声を掛けながら座る。

「ノヴァで作った名前だし、もうその名前にも慣れたからな」  
俺は男……ノヴァに皮肉をこめて言っただけだ。

ちなみに、ここでは思念体だが普通に肉体を形成する事が出来る。だが、その状態では劣化は起こらずに、ゆっくりではあるが、復元する事が出来る。

「まあ、そうだな。あと、今向こうの世界で起きている事件だが、基本的には干渉はしないと言う方向で、結論が出ているから、そのつもりで。さて肉体状態を解いて、ゆっくり休むとよい」

「了解。それじゃ休ませて貰おう」

ノヴァの話聞いた俺はそう言っと、肉体状態を解除した。

「何かあったらまた起こそう」

そんなノヴァの言葉を最後に聞いて眠りに就いた。

(まあ、そんなに問題なんて起こらないだろうけどな)  
俺はそう考えていた。

### 3人称Slide

無事、ジュエルシールドの活動を止めることができたのだが……。  
なのはは、その後に来たフェイトとの交戦となった。

「……っ！」

『flash move』

なのはの背後に回ったフェイトだが、なのはもフェイトの背後に回り込む。

『divine shooter』

『defenser』

なのはから放たれたディバインシューターは、バルディッシュによ

って防がれた。

「フェイトちゃん!!」

「……っ!?!」

名前を呼ばれたフェイトが驚いた表情をして、なのはを見た。

「話し合うだけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって言ったけど、だけど話をしないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!」

なのはの語りかけにフェイトは顔を伏せる。

「私は……」

「フェイト、答えなくていい!!」

フェイトが答えようとするのをアルフが止めた。

「優しくしてくれる人の所でぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンちよになんか、何も教えなくて良い!」

「……っ」

アルフの言葉になのはが悲しげな表情を浮かべる。

「あたし達の最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ!」

アルフの言葉を聞いたフェイトは、なのはの言葉を聞くのを止め、ジュエルシードに向けて飛んで行った。

そして、続くようになのはもジュエルシードに向かって行った。

カチン!!

二人の持つデバイスがジュエルシードにあたった瞬間、まるで時が止まったような錯覚に陥る。

しかし、それもデバイスにひびが入る音でそれはなくなった。

そして……。

ジュエルシードから発せられた衝撃波によって、二人は遠くに飛ばされた。

さらに白い光は膨れ上がるり、危険を察知したフェイトとなのはは上空に避難する。

次の瞬間、膨れ上がった光は爆発し、上空に一筋の光を放つ。

しかし、それもすぐに上空に消えた。

「大丈夫？戻って、バルディッシュ」

フェイトはひびが入っているバルディッシュに、そう言う。

『Yes, sir』

フェイトの言葉を聞いたバルディッシュが待機状態になる。

それを確認したフェイトは、目の前に浮かび上がるジュエルシードを見た。

さっきの衝撃で再び活動を始めようとしていた。

そして、何を思ったのか、フェイトはジュエルシードに向け飛んで行った。

「フェイト！」

何をやるうとしているのかが分かったのか、アルフが呼び掛けるが、フェイトはそれを聞かずにジュエルシードに手を伸ばした。

そして、フェイトはジュエルシードを握りしめた。

ジュエルシードの光がフェイトの手から漏れる。

「フェイト！駄目だ！危ない」

アルフの制止も聞かずにフェイトは地面に座り込むと、地面に金色の魔法陣を展開する。

（止まれ！止まれ、止まれ！）

フェイトは心の中で、そう念じジュエルシードを止めようとする。

「止まれ……止まれ。止まれ！」

やがてジュエルシードは完全に止まり、地面に展開されていた金色の魔法陣も消えた。

しかし、その代償はあまりにも高すぎた。

フェイトは、止めた際の疲れからか、立ち上がるも、よろけ始めた。

「フェイト！」

アルフは叫びながら人型に戻ると、倒れたフェイトを支えた。

そして、アルフはなのは達を睨むと、そのまま飛んで行った。

## 第11話「すれ違う思い」（後書き）

どうも、TRです。

今回は、3人称Sideがメインでしたが、次回から物語は急展開を迎える……のかは疑問ですが、ついに黒幕が登場します。

やはり、私としましてはハッピーエンドを目標にしています。それではこれにて失礼します。

一言や感想などをお待ちしております



**第12話「時の庭園に降り立ちし意思」(前書き)**

9日間も更新できずに申し訳ありませんでした。

ようやく第12話が完成しました。

今回は、ものすごくご都合主義です。

それでは、第12話、始まります。

## 第12話「時の庭園に降り立ちし意思」

「な、なんだ!？」

休み始めてすぐに、突然の揺れが俺を襲った。

辺りで、悲鳴が聞こえるあたり、どうやらこの世界自体が揺れているようだ。

(まさか世界単位の攻撃!?)

俺はすぐに肉体状態になった。

「隆介、大変だ」

「ノヴァ、これは一体……」

「ああ、隆介が持ってきたジュエルシードとやらが原因の次元震が発生した」

慌てたようにノヴァは原因を伝えた。

「異例ではあるが、評議会より隆介の具現化が許可された。すぐに現地に向かい、事態を收拾せよ」

「はッ!」

そしてノヴァからの指令に俺は敬礼をする事で答えた。

余談だが、俺が世界に降り立つ事を具現化といい、それをするには評議会の承認がいる。

まあ、俺の場合は世界の意思としての役目を全うするのならば、自由に行き来してもよいと言う決まりになっているのだが、一応は念のためと言う事で、緊急時以外は評議会に通して貰っている。

まあ、これも主を見つければ主の許可が出るだけで大概の事は承認されるらしいが。

まあ、それは置いておき、俺は再び具現化した。

「で、ここはどこ？」

俺が降り立ったのは少し前に見たアールピ。何とかというゲームに登場しそうなお城のような場所だった。

『隆介よ、そこはおそらく敵陣の本拠地だ。ヴェネゼイラを招集した方がよいな。健闘を祈る』

（おいおい、何でいきなり本拠地に……まあ収拾するにはもってこいだけど）「ヴェネゼイラ！！」

『8時間ぶりですね、隆介さん』

「まあな」

ヴェネゼイラの言葉に、苦笑いを浮かべながら答えた。

「じゃ、大ボスの場所まで案内してくれるかい？」

『分かりました。マスターから見て正面に反応があります』

俺は大ボスと言う名の黒幕に向かって、歩いて行った。

「あなたかしら？人の家に踏み込んだのは」

そこにいたのは、王座に座った女性だった。

「初めまして、俺は鈴木隆介と言います。あなたは？」

「あなたに答える必要はないわ」

女性は俺にそう言うのとデバイスを向けてきた。

まあ、答えてくれなくても、俺の気持ち次第で、分かるんだけどな。そう思うのと同時に、俺の脳裏に情報が入ってくる。

プレシア・テストロッサ

ミッドチルダでは優秀な研究者でもあり、偉大な魔導師あった。

専門は次元航行エネルギーの開発。

それが俺が得た情報だった。

そしてもう一点、恐らくはこれに触れたら攻撃が来るのが必至な物もある。

「そう、ではプレシア・テストロッサ。あなたにいくつか質問だ」

「何故、私の名を？」

「まず一つ目、あなたの娘フェイトの事だが……」

俺がそう言いかけた時、プレシアの表情が変わった。

「あの子が娘？笑わせないで。あれは出来損ないのお人形よ」

「……そうか、ヒュードラ使用による次元航行エネルギー開発での事故で、死なせてしまったアリシア・テストロツサのクローンと言  
う訳か」

「なんで、あなたがそれを!？」

俺に慌てた様子で、聞いてくるが、俺自身も怒りが抑えられなかつた。

「突然だが、天界法第2条の説明をする」

「な、何よ天界法って!！」

大魔導師だからかなりの威厳があると思うが、それは俺の前では皆無だ。

そして、俺は天界法について説明を述べた。

天界法第2条

時空間に影響を与え、さらにその影響が展開に到達した場合、神族の者の監視下に入り場合によっては抹消をも許される。

これが天界法第2条だ。

簡単に言えば、天界と世界の原点に影響をもたらす存在は、消しても良いと言う物だ。

「以上より、こちらの条件を飲まない場合は法にのっとり、あなたを抹殺します」

「……」

俺から放たれる威圧感で、プレシアはただ黙って聞いていた。

「条件は、一つ。フェイトを実の娘と認め家族として生きる事」

「あんな、お人形……娘じゃないわ!!」

「そうか？それがあなたの本心ですか？」

俺はプレシアに疑問を投げかけた。

いつもなら、すぐにこう言う人物は抹殺していたのだが、今回はやはりそれとは違うような気がした。

「……………」

「時間を上げます。ですから考えてください。答えによっては、あなたの娘……アリシア・テストロツサを蘇らせる事が出来るかも知れません」

だから、俺は譲歩とも思える言葉を口にした。

「ほ、本当なの!？」

「はい。それには少しばかり上と交渉がいりますが」

(ノヴァ、蘇生の許可申請……頼める?代償は世界の欠片)

『ああ、一応やってみるが、隆介の申請なら大丈夫だろう』

俺はプレシアと話しながら、ノヴァに申請の手続きをして貰う。

「アリシアが……目覚める。アリシアが」

プレシアは実の娘が目覚める事に、喜んでいた。

「でも、あなたは一体何者？」

「ええ、私は……どうやらフェイトが来たようですね。話は後になります。私は隠れていますので、フェイトが帰りましたら、また話をしましょう」

「ええ、分かったわ」

俺はフェイトの魔力を感知すると、プレシアに告げて、フェイト達に見つからないように隠れた。

その後は入ってきたフェイトに、プレシアは冷酷な感じで接している声を、俺は物陰から聞いていた。

(まだ、娘として見てやる事は出来ないのか)

俺は内心、落ち込んでいた。

「そう、世界の意味……ね」

「はい。それが俺の正体です。この世界を安定にさせる事が、俺の役割です」

フェイトが帰った後、俺は正体を話していた。

本来は、正体を話す事は禁止されているのだが、今回はかりはしようがない。

「それでは、私はそろそろ帰ります。先ほどの質問の答え……楽しんでますよ」

俺はプレシアにそう言うと、王座を後にした。

『隆介さん、なのはさんとフェイトさんが第3者の魔導師と接触しています!!』

「なに!？」

王座を出て少しした時に掛けられたヴェネセイラの言葉に、俺は驚きを隠せなかった。

第3者の魔導師と言う事は、敵の可能性もある。

警戒の必要があるのは明確だった。

「ヴェネセイラ、すぐになのは達がいる場所に飛ぶぞ!!」

『分かりました、隆介さん。緊急転送ですので、出口が安定しません……覚悟してくださいね』

「……分かった」

ヴェネセイラの言葉に俺は内心冷や汗をかきながら、俺達はフェイト達がいる場所に転送するのだった。

この後、俺が大きな組織と出会う事も知らずに……

## 第12話「時の庭園に降り立ちし意思」（後書き）

と言う訳で、第12話になりましたが、いかがでしたでしょうか？  
次回からは、ついにあの組織が登場します。

さて、今後どうなるやら……。  
毎回ですが、感想または一言、評価をお待ちしております。

それでは、これにて失礼します。

第13話「3人目の魔導師」(前書き)

今回は、あのKYを叩きのめします。

半分冗談で、半分本気です。



### 第13話「3人目の魔導師」

#### 3人称Side

海を一望する事が出来る臨海公園で発動したジュエルシールドを、停止したフェイトとなのはは、お互いのデバイスを振りかぶっていた。

どうやら、ジュルシールドを掛けて戦っているみたいだが、振りかぶった瞬間、それを止めるように現れた人物がいた。

「ストップだ！」

突然現れた少年は、両手でデバイスを受け止める。

「ここでの戦闘行動は危険すぎる！」

「……っ」

その少年の突然の登場に、二人は驚きの表情を浮かべる。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせて貰おうか？」

「時空……管理局」

木の上に避難していたユーノが呟く。

「まずは二人とも、武器を引くんだ！」

クロノはそう言いながら、二人を地面に下ろす。

「このまま戦闘行為を続けるなら……うわ!？」

しかし、クロノはそれ以上言葉を続ける事が、出来なくなった。

なぜなら、突然やってきた人物がクロノを、とび蹴りするように現れたのだから……

3人称Side End

「ツと、何とか到着したな」

俺は地面に足がついている事を確認して、ほっと一安心した。

もしこれが上空や地中だったらと思うと身震いがした。

「り、隆介……君?」

「やあ、なのは1日ぶり」

俺はなののはに向けて片手を上げる事で答えた。

だが、何故か茫然と俺の事を見ている様子だった。

さらには隣にいるフェイトや、上空にいるアルフも。

（お、俺なんか変な事をしたか？）

俺は少しばかり混乱したが、すぐにそれを収める。

そっだ、ここにはもう一人の魔導師がいたんだ！！

「そう言えば、二人とも3人目の魔導師はどこだ？」

「隆介君の……後ろ」

「後ろ？」

俺はふと背後をしてみる。

なのはが僕の背後を指差すので振り返ると、そこには地べたに寝っ転がっている黒い服を着た少年がいた。

「……って、あんたそんな所で寝てたら風邪をひくよ？」

「寝たくて寝てるんじゃない！！君に蹴り飛ばされたんだ！！」

僕の言葉に少年は起き上がって文句を言った。

「あ、それは悪い」

（ヴェネゼイラ、これは一体どういう状態だ？）

【恐らくですが、ジュエルシードが発動して、それを封印してフェ

イトさんと戦おうとした時に、この少年が出てきたのでしょう】

(なるほど)

俺はヴェネゼイラの説明で、大かた自体の状況が読めた。

「フェイト!!」

考えにふけていたのが悪かったのか、フェイトが突然ジュエルシードに向けて飛んで行った。

しかし、そんな彼女に容赦なく少年の、青い魔法弾が放たれた。

(おいおい、しょっぱなから攻撃魔法科よ?)

俺は思わず、この少年の性格を疑った。

いくら止めようとしたからって、いきなり魔法攻撃はない。

しいて言えばバインドなどで拘束する。

そして命中したフェイトは、そのまま地面に落ちて行った。

このままだといけないと判断した俺は、彼女に反重力化の魔法を掛けてゆっくりと下した。

「逃げるよ、フェイト!!」

使い魔である獣姿のアルフが、フェイトを背中で受け止めると、そ

う言って空に飛び立とうとした。

「逃がさない!!」

しかし少年は再び魔力を溜める。

(今度は砲撃)

俺はもう我慢が出来なくなったので、少年の背後に息を殺して移動する。

「たあ!!」

「のわ!？」

俺がやったのは足刈りだ。

少年はもちろんバランスを崩して、そのまま倒れ込んだ。

それと同時に魔法も解除され、フェイト達は多重転送で逃げて行った。

「くら、離せ!!」

「あ、ごめん。体が重くて動けないや」

俺はそう言いながら、少年を抑えつけていた。

空気を読まない様な外道には、半殺しにするのがいいんだが……まあ俺は慈悲深いから、これで許してやるか。

(俺って、優しい)

【隆介さん。それって優しいのでしょうか？】

ヴェネゼイラの突っ込みはスルだ。

3人称Side

「戦闘行為は停止。搜索者の片方は逃走」

時空管理局の次元航行船『アースラ』のブリッジで、男性局員がその報告する。

モニターには隆介によって抑えつけられているクロノと、どうしたらいいかとあたふたしているなのは、なのはの肩に乗っているユーン、そして笑顔でクロノを抑えつけている隆介の姿が、映し出されていた。

「追跡は？」

緑色の髪をした女性……リンディ・ハラオウン艦長が隊員に尋ねた。

「多重転移で逃走してます。追いきれませぬ」

「そう……」

隊員からの情報にリンディは残念そうに返すと、椅子に座った。

(それにしても、あの子……まさか)

リンディの視線は笑顔でクロノを抑えつけている隆介に、向けられていた。

3人称 Side End

少年を抑えつけていると、突然何もない所に緑色の髪をした女性が映し出された。

「クロノ、お疲れ様」

俺は、すぐに少年から離れた。

「すみません艦長。片方を逃がしてしまいました」

クロノと呼ばれた少年は俺に方を睨みつけてくるが、俺はそれを軽く流した。

「うーん……まあ大丈夫よ。それでね、ちょっとお話を聞きたいからその子たちをアースラ まで案内してくれるかしら？」

「了解です。すぐに向かいます」

クロノはそう言うと、映像が閉じられた。

こうして、俺達は次元航行船『アースラ』へと向かう事になった。



第13話「3人目の魔導師」(後書き)

お久しぶりです。

と言う訳で、KYを叩き潰す(?)編でした。

今回は、隆介の交渉術編になりそうです。

それでは、次回もお楽しみに。

## 第14話「偽り」(前書き)

約1カ月間も更新が遅れてしまい申し訳ありませんm( )m  
ようやくですが、第14話の公開となります。

交渉と言えるかは甚だ疑問ですが、ご覧ください。

## 第14話「偽り」

俺達が最初に見たのは、少々薄暗い場所だった。

どうやら、ここがアースラ なのだろう

『ユーノ君……ユーノ君？ここは一体』

『時空管理局の時空航行船の中だね』

クロノの後ろを歩いていると、彼女達の念話が聞こえてきた。

なんで俺にも聞こえるのかがいささか疑問だが。

『えっと、簡単に言うといくつもある次元世界を、自由に行き来するための船』

『あ、あんま簡単じゃないかも……』

『えっとね……なのは達が暮らしている世界の他にもいくつもの世界があつて、この世界もその一つで、その狭間を渡るのがこの船で、全ての世界に干渉し合う事件を管理してるのが彼ら、時空管理局なの』

『そうなんだ……』

二人の念話が一通り済み、俺達は大きなドアを潜った。

「ああ、いつまでもその格好と言うのも窮屈だろう……バリアジャ

ケットとデバイスは解除しても平気だよ」

それと同時にクロノはこっちに振り向くと、俺達に向けてそう告げた。

「あ、そうですね。……それじゃあ」

なのはが、そう言うのと同時に彼女の体が光に包まれると、小学校の制服の服装で、デバイスのレイジングハートは赤いルビーのビームのようなものに変わった。

「君も、元の姿に戻っても良いんじゃないか？」

「あ、そう言えばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」

ユーノがそう言うのと同時に、ユーノの体が光始めフェレットから少年の姿になった。

「なのはにこの姿を見せるのは、久しぶりになるのかな？」

一方、なのははと言えば……。

「……………ふえ……………!!!!!!」

悲鳴を上げた。

しかもかなりうるさい……。

「な、なのは？」

「ユーノ君で、ユーノ君って……あの、その、なに……え、だ、だ  
って……嘘。ふえええ!!!」

よく分からないが、なのはが混乱しているのだけは分かった。

「君達の間で何か見解の相違でも？」

「え、えつと……な、なのは。僕達が最初に出会った時って、確か  
この姿じゃ？」

「ち、違う違うー!さ、最初からフェレットだったよ」

なのはの慌てた声に、ユーノが目を瞑って考え始めた。

「あー!」「ごめんごめん、この姿を見せてなかった」

「だよね、そつだよね、びっくりした」

「君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせているので、出来れば  
早めに話を聞きたいのだが」

「あ、はい」

「すみません」

クロノの一声で、どうやら混乱は収まったらしい。

「それでは、こちらへ」

クロノはそう言うと、再び歩き出した。

どうでもいいが、俺の存在が忘れられているような気がするの、俺の気のせいなのだろうか？

「艦長、来て貰いました」

そしてたどり着いた扉が開くと、そこにいたのは……。

部屋の棚に飾られた盆栽に、お茶受けなどまるで日本の文化の集合体のような部屋に、正座をしていた艦長……リンディ・ハラオウンだった。

「お疲れ様。まあ二人とも、どうぞどうぞ、楽にして」

ちなみにものすごい笑顔だ。

「ぶっぞ」

なのは達は用意された布団に座った。

俺は座らずに壁に寄り掛かって、話の様子を見る事にした。

そして、二人は事の経緯を話し始めた。

事の始まりは少年……ユーノ・スクライアたちが発掘した魔導具……ジュエルシードだった。

それを搬送中になんだかの原因で航空船が壊れ、ジュエルシードは散らばってしまった。

「なるほど、そうですね。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったのですね」

リンディさんは、ユーノの話を聞くとそう言った。

「それで、僕が回収しよう」と

リンディさんの言葉にユーノは申し訳なさそうに言った。

「立派だわ」

リンディさんの彼を誉める言葉の次に掛けられたクロノの言葉に俺は、怒りを覚える事になった。

「だけど、同時に無謀でもある!！」

確かに単独で行った彼の行動は、非常に無謀だ。

しかるべき機関に依頼するのがもっともな策だ。

だが、その行動をしたユーノの気持ちと理由を知らない者に、その事を言う権利は無い。

「あの、ロストロギアって?」

そんな中、なのはが分からなかったのか、疑問を投げかけた。

「色々な世界で造られた技術の塊のようなものだ」

俺は、リンディさん達が答える前にそう答えた。

俺の頭の中には、そう言った情報も入っているのだ。

その場にいる全員が驚いたような顔でこっちを見ていたが、気にせず続けた。

「分かりやすく言えば、世界ごとに色々な技術がある。それは科学技術でもあるし魔法の技術でもある。しかしその技術の大半は制御しきれずに、自らの世界を滅ぼす理由となってしまうた。そして滅んでもなお残った技術の総称が……」

「ロストロギア……ですか？」

俺の説明を聞いたのはが、俺の言葉に付け加えた。

「世界どこか次元さえも滅ぼす危険性がある、危険な技術」

「しかるべき手続きを以て、しかるべき場所に保管されなければならぬ品物」

俺の説明に二人が補足するように言った。

「複数個集まって発動させたときの影響は計り知れない」

「聞いた事あります……旧暦の462年、次元断層が起こった時の事」

「ああ。あれはひどい物だった」



ユーノの言葉にクロノが頷いた

「隣接する並行世界がいくつも崩壊した、歴史に残る悲劇。繰り返しちゃいけないわ」

（あの事件か）

それは天界でも言い伝えられている最悪な事件だ。

あの時も、今回と同じ理不尽な要素だった。

それは、時のきまぐれとも呼ばれている。

あの時も俺と同じように世界の意思が修正を始め、被害は出ないはずだった。

しかし、次元断層が発生してしまった。

その原因は、俺の先代の世界の意思の修正が、遅れた事が原因だった。

時のきまぐれは”暴走”へと変化し、どうしようもないレベルまで高まってしまった。

そして断層が発生したのだ。

世界の終わりを覚悟したらしいが、先代の世界の意思の的確な判断で最小限の被害で食い止める事が出来た。

しかし、それでも多大な被害が出てしまい、世界の意思はその責任

を取ると言う意味で、数十年後に自らを消滅させた。

とても悲しい事件だった。

だからこそ俺は出来る限り守っていくという、目標を立てたのだ。

(おっと、話は聞かないとな)

俺は考え事を止めると、話に耳を傾けた。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収は時空管理局が、全権を持ちます」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも、そんな」

「次元干渉に関わることだ。民間人に介入して貰うレベルの話じゃない」

なのはの言葉を遮る様にクロノが言った。

確かに、彼の言う事はごもつともだが。

「でも……！」

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて二人で話し合って、それから改めてお話をしまちよつと待て 何でしょうか？」

俺はリンディさんの言葉に、軽く怒りをにじませながら止めた。

「民家人に介入して貰うレベルではないのに、なぜ話し合いを続ける？」

「そ、それは……」

俺の問いかけにリンディさんはたじろぐ。

「なのははとても優しくいい子だ。あんたはその性格に託けて言ってるんじゃないのか？目的は……彼女をここの組織の人に引き込む……あたりかな」

俺はリンディさんの目論見を推測した。

「しかも、向こうから協力させて欲しいって言われれば、そっちが適当に条件を出して、優位な立ち位置で協力させることだってできる。俺の推測に反論は？」

「……………」

「り、隆介君？」

俺の言葉に、リンディさんは何も答えない。

なのはが驚いた様子でこっちを見る。

俺は申し訳ないが、なのはを無視する事にした。

ただでさえ、矛盾が出そうなこの状態で、この人は平然と矛盾を生み出したのだ。

それは矛盾をなくすために奔走している俺を、あざ笑う行為なのだ。

「認めないのなら、もっと言ってやろうか？あんた達が感づいたのは、次元震が発生した日……その時にはすでに動ける状態であったが、その時にものすごい魔力を持つ魔法使いの存在を見つけた。だからこそなのは達に恩を売り付けるようにわざと 分かりました。認めます！！」

俺の推測はほぼ凶星だったようだ。

でなきゃあんなにも慌てるはずがない。

「私達は今慢性的な人数不足なんです。どうか、私達に力を貸してください」

「か、艦長！？」

リンディさんは騙した理由を言うと、深々と頭を下げた。

それに対しクロノは慌てるが、関係ない。

「あ、あの。私達も協力させてください！！」

なのは達がそう言った事で、ひとまずは協力体制は整った。

「さて、君には逃亡幫助と公務執行妨害の容疑がある。申し開きはあるか？」

「そうだな……それらの罪だが全てはそっちの落ち度であると言わ  
していただく。なあ？クロノ執務官？」

クロノの言葉に俺はそう言ってやった。

「な、何！？」

クロノは俺の言葉に茫然としていた。

「まず逃亡幫助についてだが、これは公務執行妨害にも言えるが周  
囲への配慮不足だ。つまり、あんたの力の無さだ」

「なんだと！！」

「止めなさい、クロノ執務官。それで、彼の配慮不足とは？」

クロノが俺の言葉にくっついてかかるが、リンディさんがそれを止め俺  
に聞いてくる。

「まず逃亡幫助については、犯人が抵抗したために攻撃した。確か  
にそれは適切な判断だった。なら！！ただ、その後に逃亡させな  
いようにと砲撃を放とうとしただろ？」

「ああ、それがいけないとも言つのか！？」

だが、クロノは気づいていない。

使う魔法が違っているとつ事。

「その通りだ。あの場面では砲撃ではなく、バインドを使用するのが妥当だ。それでも抵抗するのなら砲撃やら攻撃もやむを得ないが、それをしないでいきなり砲撃は不当だ。だからこそ俺はあんたを足刈りして動けないようにしたんだ」

「……………」

俺の指摘にクロノは、ただ黙って聞いていた。

「公務執行妨害についてもそうだ。常に周囲への警戒を怠らない。現場ではいつ何があるかは分からないんだ。だからこそ常に警戒しないといけない。あの時魔力反応に気を配っていたら、避けるなり、警戒するなりできたはずだ」

「だからと言って君の罪はなくなるらない」

俺にクロノはそう言うが、俺だって犯罪者になる気はない。

「そうかもしれないが、逆を言えばあんたの配慮と力量不足と言うのもなくなるらない。言っておくが、裁判とかでも同じ事……いやもっと酷評すると思うよ。そうなたらあんたの今後の出世は無くなるな」

「なんだと!?!」

俺の言葉にクロノが殴りかかろうとしてきた。

「……………」

「止めなさい、クロノ!?!」

リンディさんは俺の表情から何かを感じ取ったのか、クロノを制止するが、もうすでに遅かった。

ズガアアアン！！

「かは！！！」

クロノが僕の目の前に迫った時、俺はクロノの手を掴むと容赦なく後ろの壁に叩きつけるように放り投げた。

「り、隆介君！？」

そして俺はクロノに剣状のヴェネゼイラを突き付けた。

「欠点をも認めようとしなない餓鬼が、いっちょ前にええな！！認めもせず他人に罪をかぶせるなど言語道断だ！！！」

俺はそう言つと悔しそうな顔をしているクロノから、視線を外した。

「さて、どうする、リンディ・ハラオウン。逃亡幫助と公務執行妨害に傷害罪も付けるか？」

「……………いえ。こちらにも多少の落ち度があったのは事実です。なので、今回に関しては不問に付します」

「ありがたいお言葉、感謝します」

とりあえずはお礼を言っておく事にした。

慢心は心に隙を生む それは俺が一番伝えたいことだった。

「では、私はなのはさんの御両親に、説明をしに伺いましょう」

こうして俺となのはとユーノの3人は、アースラへの民間協力者として迎えられる事になった。



## 第14話「偽り」(後書き)

ふたたびTRです。

今回はいかがでしたでしょうか？

ちよつと原作の設定にアレンジを加えました。

次回は、どうしようかとちよつと悩んでいます。

それでは、次回もお楽しみに。

では、今回はこれにて失礼します。

## 第15話「破滅の前兆」

「と言う訳で……本日0時を以て本艦全クルーの任務をロストロギア……ジュエルシードの搜索と回収に変更されます」

アースラの会議室に集められた全クルー達にリンディさんが任務変更を告げる。

「また本件には特例として、ロストロギアの発見者でもあり結界魔導師でもあるこちら」

「はい。ユーノスクライアです」

ユーノが緊張しながら名前を言った。

「それと彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

「た、高町なのはです」

二人共に言えるが、テンパリ過ぎだ。

「それと、協力者でもある魔導師の」

「鈴木隆介です」

俺は3人とは対照的に、冷静に名前を言った。

「以上三名が臨時局員として、事態の解決にあたってくれます」

「」「よろしくお願いします」「」

こうして、俺達は管理局の協力者になる事になった。

「……で、これがターゲットか」

少しすると、ジュエルシードが発見され俺となのはにユーノの三人で封印に向かった。

今日の前にいるのは、火の鳥だった。

「俺が奴を弱らせる、ユーノがあいつを捕縛する。それでなのはが封印……これでいいか？」

「ああ」

「うん」

俺の提案に二人が頷いたのを確認すると、ヴェネゼイラを構えた。

「それじゃ、行くぞ!!」

そして俺は奴に飛びかかった。

「喰らえ……一刀両断!!」

「ギヤアアアア!!」

俺の放った一撃が、火の鳥を切り裂く。

もちろんだが、非殺傷設定なので傷つけては無いが、飛行能力を下げる事は出来た。

「捕まえた、なのは！」

「うん！」

そして完全に弱った所を、ユーノの拘束魔法によって捕らえ、なのはが封印を始める。

『Sealing mode, setup』

レイジングハートから光の帯が、火の鳥に向けて放たれる

『Stand by, ready』

「リリカル・マジカル……ジュエルシードシリアル8。封印！」

『Sealing!』

そして、火の鳥からジュエルシードが現れた。

『Receipt number eight』

レイジングハートにジュエルシードが格納されて、本格的に封印された。

「ちょっと待て」

「なんだ？」

任務を終え通路を歩いていた俺を、クロノが止めた。

「さっきの魔法は一体何だ？」

「……剣を使った剣術……それだけだが？」

クロノの言葉に俺は本当の事を答えた。

あれは、剣状のヴェネゼイラに魔力を付加させただけなのだ。

「分からないな、君は」

「知りたいのであれば己で調べる。いつも相手が話すと思ったたら大間違いだ」

クロノの言葉を、俺はそう切り捨てた。

「だったら、一つだけいいか？」

「……この間踏みつぶした借りがあったな。それを返す意味で答えよう」

クロノの質問に俺は皮肉をこめて言った。

と言うより、あれはこの執務官殿の完全な力不足だから、俺が気にする事ではないんだが、後が怖いから貸しはなくしておいた方がいいと思ったからだ。

「さっきの任務で、高町なのはの魔力値は平均124万、それに対

して君は129」

クロノの魔力値の言葉に俺は、驚きが半分安心が半分だった。

どうやって調べたという驚きと、ちゃんと抑えられていた事に対する安心の二つだ。

「君の魔力値は、明らかに少なすぎる。これについて答えて貰いたい」

「そうだな……もしかしたら俺はそれしか出せないかもしれないし、出していないだけかもしれない」

クロノの問いかけに俺は惚ける事で答えた。

と言うよりも答えるわけないだろ。

「……そうか。時間を取らせて済まなかった」

「気にすんな」

そして俺はクロノと別れた。

【隆介さん、魔力の節約制限を掛けておいたのが、幸いでしたね】

（ああ、サンキューな）

ヴェネゼイラからの念話に、俺はお礼を言った。

こう言った場所で、一番気をつけなければいけないのは、如何に能力データを隠すかだ。

自分の能力や使える技を見せるのは、戦略を立てられやすくなる。

そんなため、自分の技は出来るだけ温存しておく。

俺にとって、切り札は相手の魔法を蒐集する能力と、規格外の戦闘能力だ

これらは特に嚴重に使わなければいけない。

(まあ、これらが知られてもそう簡単には負けはしないがな)

「さて、この後はどうし

俺がそこまで言い欠けた時だった。

突然、アースラ 中にアラートが鳴り響いた。

『エマージェンシー！捜査区域の海上にて、大型の魔力反応感知』

「まさか！！」

俺は嫌な予感を浮かべ、ブリッジの方へと走って行った。

「一体何があつたんだ!!」

「もうひと組の探索者が、海鳴市海上で大型魔法を行使、ジュエルシードの発動を確認しました!!」

俺がブリッジに到着すると同時に、クロノの声が聞こえた。

僕はモニターを見ると、そこには6つの竜巻が出来ていた。

映像を見るに、すぐに行った方がいい。

俺は、彼らが出動命令を出すと思っていた。

そう、この時までには……。

「何とも呆れた無茶をする子だわ!」

「無謀ですね。間違いなく自滅します。あれは個人の出せる魔力の限界を越えている」

リンディとクロノはモニターを見ながらそう言っている。

「フェイトちゃん!」

そんな中、なのはが慌てた様子でブリッジに入ってきた。

「あの、私急いで現場に!」

「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する」



俺はクロノの言葉に耳を疑った。

こいつ今何を言った？

「仮に自滅しなかったとしても、弱った所を叩けばいい」

「でも！」

クロノの冷たい言葉に、なのはが反論する。

何を言ってるんだ、こいつは？

自滅する？

だからそれを待ってればいい？

こいつら、本当に正義の味方か？

(やはり管理局は、偽善者の集まりだったか)

俺は管理局に対し、そう認識した。

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

そしてクロノは局員に指示を飛ばした。

(もしかしたら、リンディ提督が出動を命令するかも)

俺は絶対にあり得ない仮定をしていた。

「私達は常に最善の選択をしなければいけないわ。辛いけど、これが現実」

しかし、リンディ提督から来た言葉は、クロノと全く同じ物だった。

【行って】

そんな時、ユーノの念話が聞こえた。

だから、こっちにも聞こえるようにしなくていいって!!

【なのは、行って！僕がゲートを開くからなのはあの子を】

【でもユーノ君、私があのこと……フェイトちゃんと話をしたいのはユーノ君とは……】

ユーノの念話になのはは念話でそう言った。

【関係ないかもしれない。だけど僕は、なのはが困ってるんなら力になりたい。なのはが僕にそうしてくれたみたいに】

次の瞬間、ゲートが光始めた。

「君は！」

クロノが素早く気づき、制止をしようとするが、すでに遅い。

「ごめんなさい、高町なのは指示を無視して勝手な行動をとります！」

「ユーノ、お前も早く!!」

「う、うん!!」

なのはの言葉を聞きながらも、手を広げるユーノをゲートに向かわせた。

「あの子の結界内へ、転送」

ユーノが印を切るのと同時に、なのはとユーノは転送した。

「なんて事をするんだ!!」

「お前ら　!?!」

俺に文句を言ってきたクロノを怒鳴ろうと思った瞬間だった。

モニターに映ってはいけない何か、映ったような気がしたのだ。

「リンディさん、フェイトの映像を出して!!」

「わ、分かったわ!!」

俺の剣幕に押されたリンディさんがフェイトの写っている映像に切り替えた。

「……………!!?!?!?!」

俺はそれを見た瞬間、顔が青ざめるのを感じた。

「あれがどうしたんだ！隆介ー！！」

クロノが何かを言っているが、俺にはそれを答える余裕はなかった。

その映像に映っていたのは……。

ほんの小さな白銀の光だった。

それは俺にとって……いやこの世界にとって危機的状態でもあった。

誰も気づいていなかった。

それは当然だろう、視認ではジュエルシードの光でごまかされているのだから。

「破滅の前兆サインオブリン……」

俺は、すぐにフェイトのいる場所に転送した。

（頼むから、間に合ってくれー！！）

俺の願いと共に。

3人称 S i d e

「行くよ、レイジングハート。風は空に、星は天に。輝く光はこの腕に。不屈の心はこの胸に！レイジングハート！セーット・アー

「ツプ！」

ユーノの転送魔法によって上空に飛ばされたなのは、レイジングハートを起動させる。

『Stand by・ready』

「フェイトの…邪魔はするな！」

なのはが来た事が分かったアルフは、邪魔をしに来たと考えなのはに向かって飛んで行こうとする。

「違う！僕達は君たちと戦いに来たわけじゃない」

だが、それはユーノの防御魔法によって防がれた。

その間にも、なのは達にはクロノからの念話が来ていたが、なのはは謝罪をするだけだった。

「フェイトちゃん！手伝って、ジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートから光の帯が伸び、バルディッシュへと向かう。

『Power charge』

魔力が補充され、バルディッシュから光の刃が現れた。

『Supplying complete』

「二人できっちり半分」

フェイトはなのはの行動に、固まっていた。

「つく！」

ジュエルシードの動きをチェーンバインドで止めていたユーノだが、その力に振りほどかれそうになっていた。

しかし、アルフがバインドでそれを防いだ。

「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる！だから今のうち！ふたりでせーの、で一気に封印！」

『Shooting mode』

なのはの言葉に、レイジングハートがシューティングモードに変更する。

『Sealing form, setup』

「バルディッシュ？」

突然シーリングフォームに変えたバルディッシュにフェイトが驚く。

彼女達の目線の先にはジュエルシードが起こした竜巻しか映っていなかったが、そこから少しだけ離れた場所にある白銀の光には、二人は気づいていなかった。

それはゆっくりと…されど膨大なエネルギーが集束し始めていた。

今ここに、タイムリミットが刻まれ始めた。

世界の破滅まで、あと10分……

## 第15話「破滅の前兆」(後書き)

1週間ぶりのTRです。

とりあえず、説明されていない部分は次回の方で説明されると思いますので、ご了承ください。

恐らく、これを読んでも何がどう危険なのかはよく分からないと思いますですが……

次回も楽しみにして頂ければ幸いです。

感想などをお待ちしています。

それでは、これにて失礼します。



## 第16話「破滅」(前書き)

今回は、ちょっと支離滅裂です。

正直自分で何を書いているのかが分からないほどです。

それはそれで問題ですが……。

出来れば、大目に見ていただければ幸いです。

それでは、どうぞご覧ください。

## 第16話「破滅」

3人称Side

「な、なんだ!？」

「戦闘区域近くに、強力な魔力反応です!!」

突然鳴り響くアラートに、アースラクルーが慌て始める。

「このままですと、次元断層が発生します!!」

その魔力反応こそが、隆介が見た物だった。

3人称Side End

海上に降り立った俺が見たのは、6つの竜巻となのは達の魔力光、そしてそこから少し離れた場所にある、白い光だった。

ジュエルシードの方は、なのは達に任せても良いだろう。

『隆介さん!やはり……』

「ああ、”世界”が出来てるな」

俺は白い光を見据えてそう呟く。

世界の欠片は一つだけでも、強力なエネルギーを持つ。

そのエネルギー量は、ジュエルシード10個分にあたる。

世界の欠片は矛盾因子から放出される。

しかし、時に矛盾因子からではなく、突然出現する事があるのだ。

そしてこれらがそ体で10個以上集まると、高濃度の魔力を放ちながら世界を形成するのだ。

ただそれには条件があり、濃度の高い魔力に当てられなければ、そう言った事は起こらないのだが今のこの状況だと、起きてもおかしくないだろう。

「とつとと済まさないとな」

世界が形成される事を危険視する理由は、世界が形成され始めるとそれは魔力を集束していく。

そしてそれが臨界点を越えた時、その世界は大爆発を起こすのだ。

その威力は、複数の世界を崩壊させるほどだ。

「ヴェネゼイラ、砲撃モードスタンバイ！」

『モードチェンジ』

ヴェネゼイラが砲台状になる。

「魔力チャージスタート」

『魔力をチャージします。チャージ完了まで、残り3分』

ヴェネゼイラに魔力が集まる。

（先代が世界の意思を止めたのもこれが原因……だからこそ、俺の手で撃ち落とす！！）

世界が形成された場合の対処法は、世界を破壊する事だ。

世界の矛盾の修正などをする俺には全くに合わない力だが、万が一の術だ。

『隆介さん、魔力チャージが完了しました。世界形成まであと1分です』

ヴェネゼイラからの情報に、俺は一息つく。

よく見れば、前方にある白い光には、恐ろしい位の魔力が集まっていた。

「世を総べし我が命ずる。存在してはいけない世界を滅ぼしたまえ！！貫け、ブレイクワールド！！」

その瞬間、ヴェネゼイラから膨大な魔力が、砲撃魔法となり放たれた。

砲撃魔法は、世界というよりは、異質世界と言った方がいいだろうに直撃して、そのまま轟音を立て崩壊した。

### 3人称Side

「強力な魔力反応、ロスト」

「な、なんという奴だ」

魔力反応が消えた事にクロノは茫然としていた。

茫然と言うよりは、恐怖というの也被まされてはいたが……。

そしてアースラクルーは、全員固まっている状態だった。

（やはり、彼は……）

そんな中、リンディだけが、隆介を真剣な眼差しで見ている。

それは、彼の存在に一つの確証を持ったからかもしれない。

そして、そんな状態だったからこそ、この後に発生する異常事態には気付けなかったのだろう。

突然、アースラ内にアラーム音が、鳴り響いた。

「次元干渉？別次元から本艦および、戦闘区域に向けて魔力攻撃来ます！あ！あと6秒！」

女性 エイミーからの情報にクロノが慌てて上を見る。

次の瞬間、雷がアースラに落ちた。

3人称Side End

「フェイトちゃん。友達に、なりたいんだ」

そして、なのはがフェイトにそう言った瞬間だった。

【隆介さん！別の次元から、魔力攻撃がきます！！攻撃まであと10秒！！】

「なに！？」

「ふえ！？ど、どうしたの隆介君？」

ヴェネゼイラからの情報に、俺は驚きの声を上げる。

「二人とも、絶対に俺のそばから離れるなよ！分かったな？」

「う、うん」

「は、はい！」

俺の言葉に二人とも素直に従った。

「絶対防御！！」

俺の詠唱と同時に、俺達のいる上空に透明だが強固な壁が形成された。

その次の瞬間だった。

「つく！？」

雷がこつちに向けて落ちた。

「母さん？」

フェイトが怯えたように上空を見る。

「す、すいっ」

あの雷の攻撃を防いでいる事に、なのはは感嘆の言葉を述べた。

『フェイト、アルフ！！すぐに3つジュエルシードを持って、離れろ！！』

『うん』

『了解！！』

俺の念話にアルフが人型になり、ジュエルシードを取ろうとするが……。

突然現れたクロノがそれを遮った。

「邪魔は……」

「っ!？」

突然の事に驚いたアルフだが、すぐに正気を取り戻した。

「するな!」

「うわ!」

アルフの攻撃により、クロノは海へと叩きつけられた。

「3つしかない!」

アルフがジュエルシードを取ろうとするも、そこには3つのジュエルシードしかなかった。

そしてアルフは飛ばしたクロノの方を見る。

クロノの手には3つのジュエルシードがあった。

「おいおい……」

俺は彼の手腕に驚いていた。



「うう……ああ……!!」

ジュエルシールドを3つしか手に入れられなかった悔しさか、クロノに対する怒りかは定かではないが、アルフは海に向けて魔法弾を放つ。

すると、水柱が上がりそれが収まった時には、そこにはフェイト達の姿は無かった。

### 3人称Slide

「機能回復まであと25秒!追いきれません!」

魔法攻撃を受けたアースラでは、少なくとも被害があった。

それは攻撃した場所への追跡が出来ないほどに……

「機能回復まで対魔力防御、次弾に備えて」

「はい……」

リンディの下した指示に隊員が答えた。

「それと……なのはさんと、ユーノ君、クロノを回収します」

リンディは静かにそう告げた。

3人称Side End

突然の事に、全員が茫然としていた。

(それが、答えなのか？プレシア・テストロッサ)

俺は心の中でそう呟く。

(もし本当にそれが答えのなら、俺は、あんたを徹底的に潰す)  
そんな想いを秘めながら、俺は空を見つめていた。

## 第16話「破滅」(後書き)

という訳でして、第16話となりましたがいかがでしたでしょうか？  
恐らくかなり読みにくかったかと思いますが。

その点に関しては、本当に申し訳ありません。

それでは、これにて失礼します。

感想をお待ちしています。

## 第17話「正義」

『3人とも、戻って頂戴』

「了解」

アースラからのリンディさんの言葉にクロノが答えた。

『で、なのはさんとユーノ君、浩介君には、私直々のお叱りタイムです』

（お叱り……ね）

正直俺は、しかられるような事をした覚えはない。

そんなことを思いながら、俺達はアースラに戻った。

そして連れてこられたのは、前に来た細長いデスクがある会議室だった。

しかも、入るとリンディさんが怒っている様子で座っていた。

「指示やルールは個人のみならず集団を守るためのルールです」

そして始まったのは、リンディさんの説教だった。

「勝手な判断や行動が、あなただけでなく周囲の人達を危険に巻き込んだかもしれないと言う事、それは分かりますね？」

「はい……」

リンディさんの言葉になのはとユーノは返事をするが、俺は目閉じてそれを聞いているだけだった。

いや、我慢していると云った方がいいかもしれない。

「本来なら、厳罰に処す所ですが 黙れ っ!？」

俺はとうとう我慢できずに、リンディさんの言葉を遮って低い声で言い放った。

本当に我慢の限界だ。

「確かに指示を無視するのはいけない事だろう。だが、あんたらに俺達を責める事は出来るのか？」

「あなた達は私達の指示を無視したんですよ？」

俺の言葉にリンディさんがそう返してくる。

「あなた達の指示は、死にかけている患者を見殺しにしると言っているのと同じようなもんだ。そんな指示を聞けるわけがないだろ！」

「……………」

俺の言葉に、リンディさんは何も言わない。

「そんだけ管理局と言つのは腐つてんのかよ！！貴様らに正義を名乗る筋合いはねえ！！」

「なんだと！」

俺の怒鳴り声に、壁に寄り掛かって傍観していたクロノが、こつちに向けて歩いてくる。

「楽しかっただろうよ、彼女が落ちるのを見て」

俺はそれを無視して言葉を続けた。

「そ、そんな事は……！」

「だったら、あんな指示は出さないよな？」

俺の言葉に答えるリンディさんに、俺は冷たくそう言い放つ。

「しかも、さっきだって管理局が手を出したのは最後の方……ジュエルシードに至ってはクロノが持っている」

俺はそう言ってクロノを睨みつける。

睨みつけられたクロノは一步下がった。

「まあ、あの状況下でジュエルシードを手にする事が出来た手腕は、称賛するに値するが」

呆れたように俺はそう言い放つ。

「さてそんな卑怯で腐って、血も涙もない横どりやろっこの管理局は僕達にどのような罰を下すんだ？」

俺は皮肉たっぷりの言葉を告げた。

「それにもし俺がこのまま何もしていなければ、世界は終わってしまいました。あなた方はそれはもう分かっているはずですが？」

俺の言葉にリンディさんとクロノの方が震えた。

「一つ聞かせてちょうだい。あれは一体何だったのかしら？」

リンディさんの問いかけに俺は、説明を始めた。

「あれは、とある高エネルギー結晶体が複数個で、一斉に発動した事による世界の形成です」

「「な!?!」」

俺の言葉にクロノ達が驚きの声を上げる。

「この”世界”というのはかなり性質が悪く、エネルギーを集めると、爆発を起こすんです」

「爆発が起これるとどうなるのかしら？」

「……そっちの世界で言う、次元断層が発生します。爆発から10

分で、なのは達の世界は消滅し、30分で半分の世界が消滅し、1時間で全世界が消滅します」

「何と言う恐ろしい……」

「そんなわけで、もしあなた達の指示を俺達が破っていなかったら、どうなっていたかは分かりますよね？」

「……………」

俺の言葉に二人は何も答えられなかった。

「それよりも、その高エネルギーの結晶体はどうなったんだ？」

「それでしたら、俺がこうして保管していますが」

俺はクロノの問いかけに答えながら、少し大きめの瓶を取り出して、デスクに置いた。

「この名前は『世界の欠片』といいます。この欠片一つには計り知れないエネルギーが濃縮されており、例えるとジュエルシード10個分になります」

「10個分!？」

リンディさん達が俺の言葉に、驚きの声を上げる。

「……………隆介、それを渡して貰おうか？」

「別に構わないけど」



俺はそう答えると、クロノの手に世界の欠片を乗せた。

「ぐはぁ!?!」

その瞬間、クロノは見えない力によって壁に弾き飛ばされた。

「い、一体何が……」

「あゝ、一応言っておくが今は俺じゃないぞ」

誤解されそうだったので一応説明しておくことにした。

「これは限られた者しか触れる事が出来ない物で、触るとクロノのように弾き飛ばされるんだ」

「そ、それを…早く言え」

壁の方に倒れているクロノが、力なく俺に抗議してくる。

「言ったって信じないだろ?これが複数集まるととてつもない反発力を発生するから、触らない方がいいかもな。まあ、悪用は出来ないから、安心して良いんだろっし」

「そのとてつもない反発力ってどうなるのかな?」

「えっと、この瓶にあるのが150個だから、地球を39周する威力かな」

なのはの質問の答えにその場にいた全員が言葉を失っていた。

「ま、まあとりあえず今回の事は不問とします」

(不問か……まあいいか)

一番早く復帰したリンディさんが最後にそう言つと、今回の話は終わりとなった。

そして、その後プレシア・テストロッサについての詳細を話し終えると、俺達は一時海鳴市に戻る事になった。

## 第17話「正義」（後書き）

ご無沙汰しています。

第17話はいかがでしたでしょうか？

まずは更新が遅れて申し訳ありません。

次回は再びの日常……だと思えます。

皆さんからの感想（ご質問も歓迎します）や評価をお待ちしています。

それでは、これにて失礼します。

## 第18話「偽りの日常」(前書き)

本当にすみません!!

色々な用事が重なり、1カ月もかかってしまいました。

そしてPVが20000アクセス、ユーニークも4000人を突破しました。

本当にありがとうございます。

それでは、第18話、お楽しみください。

## 第18話「偽りの日常」

「この家に帰るのも、久しぶりだな」

『そうですね』

一時帰宅が許可され、俺は自宅でのんびりと休むことにした。

「さて、夕飯でも作りましょうかね」

メニューを考えながら、俺は必要な材料を買いに行くのだった。

翌日、俺達は小学校の屋上にいた。

「なのはちゃん！……良かった、元気で」

すずかは久しぶりに親友に会えた事が嬉しいのがか、手を取って喜んでいた。

「うん、ありがとう、すずかちゃん。……アリサちゃんも心配かけてごめんね」

「まあよかったわ、元気で」

そっぽを向いて話すアリサを見て、なのは達は静かに笑っていた。

「全く素直じゃないよな」

「う、うるさいわね！それにしても元気そうじゃない」

俺の突っ込みに怒鳴ってくるが、突然安心したように言ってきた。

「は？」

「突然体調不良とかで休むんだから……その、心配したじゃない」

アリサの言葉でなのはは思いだしたようだった。

「えっと、悪かった」

俺はなぜか三人に謝る事になった。

そして、俺達は教室へと向かった。

そして、今俺達はアリサの家に行った。

その理由は、アリサが機能拾ったという、怪我をしたオレンジ色の毛をした大型犬を見に行くためだ。

まあ、誰かは簡単に想像はついたが。

【やっぱり、アルフさん】

【あんだ達か？】

なのはの念話の呼びかけに、アルフが弱々しく答えた。

俺となのは、アリサにすずかの4人で、アルフの様子を見ていた。

【その怪我どうしたんですか？それに……フェイトちゃんは？】

なのはの問いかけにアルフは背を向けた。

「あららら……元氣無くなっちゃった。どうした？大丈夫？」

「傷が痛むのかも。そっとしておいてあげようか？」

「うん」

アリサとすずかの二人がいい具合に、勘違いしていた。

「ユーノ！こら、危ないぞ」

「大丈夫だよ、ユーノ君は」

突然飛び出したユーノにその声を掛けるが、なのはがそう言った。

【なのは、彼女からは僕が話を聞いておくから、なのははアリサちゃん達を】

【う、うん】

ユーノの念話になのが答えた。

それを聞いた俺は、ちょっとだけ酷だが、魔法を使う事にした。

（人よ。我に従え）

それは一種の催眠魔法だった。

「それじゃ。中でお茶でも飲まない？」

「うん」

「そうだね」

俺の催眠魔法によって言わせたアリサの言葉で、俺達は屋敷の中へと向かう。

そして、アリサ達だけ先に部屋に入らせて、俺となのはは屋上で、アルフの話聞いていた。

「一体どうしたの？君達の間で何が？」

「あんたがここにいるってことは、管理局の連中も見てるんだろうね？」

アルフがユーノにそう言った。

「うん」



「時空管理局クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ、正直に話してくれれば悪い様にはしない。君の事も、君の主、フェイト・テスタロッサの事も」

クロノの念話も聞こえてきた。

「話すよ…全部。だけど約束して…フェイトを助けるって。あの子は悪くないんだよ…」

「約束する。エイミー記録を」

「してるよ」

アルフの言葉にクロノはそう答えた。

そしてアルフから、今回の真実が話された。

【なのは…聞いたかい？】

【うん。全部聞いた…】

アルフが話し終わると、クロノが確認の声を掛けた。

【君の話と現場の状況、そして彼女使い魔のアルフの証言と現状を見るに…この話に嘘や矛盾はないみたいだ】

クロノが話を聞いた結果を話す。

【どうなるのかな？】

【プレシア・テストロッサを捕縛する。アースラを攻撃しただけでも逮捕の理由には、おつりがくるからね。だから僕は艦長の命があり次第、任務をプレシアの逮捕に移行する事になる】

そりゃ当然だろうな。

俺はクロノの言葉を聞いて、内心でそう思いつつも耳を傾けた。

【君はどうする、高町なのは？】

【私はフェイトちゃんを助きたい。アルフさんの思いと…それから、私の意思。フェイトちゃんの悲しい顔をは、私もなんだか悲しいのだから助きたいの……悲しいことから】

クロノの問いかけになのはが答えた。

それはその場の思いつきで言ったような言葉ではなく、しっかりと  
した意思が感じられた。

【それに友達になりたいって伝えた……その返事を聞いてないしね  
！】

【分かった。こちらとしても君の魔力を使わせてもらえるのはあり  
がたい。フェイト・テストロッサについてはなのはに任せる】

なのはの行動をクロノが許可するのはちょっと予想外だったが、こ  
れで後はなのは次第という事になった。

【それでいいか？】

【うん……】

クロノの確認になのはが頷いた。

【なのは……だったね。頼めた義理じゃないけど、だけど……お願い。フェイトを助けて……あの子……今ほんとに1人ぼっちなんだよ】

【うん大丈夫。任せて】

そして、なのははアリサ達がいる部屋のドアを開けた。

【予定通り、アースラへの帰還は明日の朝。それまでの間に君がフェイトと遭遇した場合は】

【うん、大丈夫】

クロノの最終確認の言葉になのはが答えると、それ以後念話はされなかった。

【アルフ、俺も聞きたい事があるんだけど、良いか？】

【隆介……うん、いいよ】

俺はアルフにだけ聞こえるように、秘匿回線を利用して念話で話しかけた。

【プレシアは昨日も、フェイトを傷つけたか？】

【……ああ】

【そうか……ありがとう】

俺はそう言つと、念話を切った。

それが本当に、あなたの答えなのか？

俺の問いかけに答える者は、誰もいなかった。

そして翌朝の午前6時。

俺となのは、ユーノにアルフは海が見える公園に立っていた。

「ここならいいよね？出てきて……フェイトちゃん」

そしてなのははそう呼び掛ける。

俺は辺りにフェイトの魔力反応を、確認していた。

つまりは、どこかにフェイトがいると言う事だ。

そして俺達が辺りを見回していた時だった。

『Scythe form』

バルディッシュの声と共にフェイトは電灯の上に現れた。

「フェイト……もう止めよう。あんな女の言うこと、聞いちゃだめだよ。フェイト……このまんまじゃ、不幸になるばかりじゃないか……だから、フェイト！」

「だけど……それでも私はあの人の娘だから……」

アルフの言葉にもフェイトは首を横に振って、答えるだけだった。

「ただ捨てればいいってわけじゃ、ないよね？逃げればいいってものじゃもつと無い。きつかけはきつとジュエルシード。だから賭けよう、お互いが持っている全てのジュエルシードを！」

『P u t t o u t 』

『P u t t o u t 』

なのはの言葉で、お互いの今まで封印してきたジュエルシードが排出された。

「それからだよ……全部それから……」

なのはの言葉にフェイトは茫然としていた。

「私たちの全ては、まだ始まってもない。だから本当の自分を始める為に。始めよう……最初で最後の本気の勝負！」

そして、二人の最終決戦は幕を開けた。

## 第18話「偽りの日常」(後書き)

1カ月かけてこの程度かという、突っ込みは無しでお願いします。  
次回は、二人の決選という訳ですが、一応言いますが、隆介はこの  
決戦では干渉させません。  
やはり、見どころの一つですから。

それでは、これにて失礼します。

## 第19話「海上の決戦」

『Photon Lancer』

フェイトが魔法弾を用意する。

『Divine Shooter』

それを見たなのはも続くように魔法弾を生成した。

「ファイヤ！」

「シユート！」

そして、お互いが魔法弾を放った。

なのはは魔法弾を器用に避け、フェイトは防御魔法で防いだ。

「っ!？」

しかし、次の光景を見たフェイトは驚きの表情をした。

なぜなら、なのはは次弾を用意していたからだ。

「シユート！」

そして再び魔法弾を放つ。

『Scythe Form』

フェイトはデバイスを鎌状にすると、迫ってくる魔法弾を次々と切り裂いて行く。

そして、鎌を思いつきりなのはに向けて振り下ろす。

『Round Shield』

しかし、なのはも負けてはいない。

防御魔法を張ると、生き残っていた魔法弾をフェイトの背後に奇襲させる。

だが、魔法弾に気付いたフェイトは防御魔法を展開して、魔法だを受け止めた。

しかし、その隙になのは達の姿は何処にもなかった。

フェイトは辺りを見回す。

『Flash Move』

「せえええい！」

「！ー！」

フェイトが上空を見ると、そこにはデバイスを振りかざすなのはの姿があった。

そして、フェイトはデバイスでその一撃を受け止めた。



その次の瞬間、辺りに爆音と閃光が襲った。

『Scythe Slash』

しかし、その隙に後ろに回り込んだフェイトはなのはに向けて鎌を振り下ろす。

「はぁ！」

だが、その一撃はなのはをかすめただけだった。

そして、なのはが態勢を立て直そうとした時だった。

「!？」

そこにはフェイトの魔法弾があった。

『Fire』

そして、魔法弾が放たれた。

なのはは防御魔法を展開して耐え凌いだ。

「っ……はぁ」

「はぁ……はぁ」

二人は一旦距離を取った。

そんな中、フェイトは焦りを感じていた。

最初は魔力が高ただけの素人だった。

しかし、今はフェイトと戦えるくらいに強くて速い。

(布石の置き方とかも良いな)

そんな中、戦いの光景を見ていた俺も同じく考えていた。

相手が避けた事を考えての魔法弾の設置は、俺も驚いていた。

(なのはも、魔法弾を使った奇襲が、出来るようになったか)

俺は二人の戦いを見て、考えを巡らせる。

一方フェイトは、本気を出すことを決めたのか、大型の魔法陣を展開する。

そして、なのはの周りには魔法陣がいくつも現れては消え、現れては消えを繰り返していた。

『Phalanx Shift』

デバイスの声と同時に、大量の魔法弾が現れる。

「あっ！」

それを見たなのはも身構える。

だが、突然現れた魔法陣によってなのはは両手を拘束された。

【まずい！フェイト本気だ！】

【なのは！今サポートを！】

「…………縛れ」

「「な！？」」

なのはを助けようとしたユーノとアルフを、俺は拘束した。

「これは二人の戦いだ。部外者である俺達が出したら不公平だろ？」

「ありがとう、隆介君！！」

なのはは俺にお礼を言った。

「それに、なのはは負けないさ」

それは俺の勘という名の直感だった。

「…………アルカス、クルタス、エイギアス…………煌めきたる天神よ。今導きのもと、撃ちかかれ。バルエル、ザルエル、ブラウゼル」

呪文が紡がれるたびに、魔法弾の纏う雷が一層強くなる。

「フォトンランサー…………パランスシフト！」

そして、呪文が完成したのか、右手を上空に振り上げる。

「撃ち砕け！ファイヤ！」

そして、その手をなのはの方向に振り下ろすのと同時に、浮かび上がった魔法弾が全てなのはに向けて放たれた。

「なのは！」

「フェイト！」

拘束されながらも、ユーノとアルフが声を上げた。

なのはのいた所には、爆煙によって何も見えない状態だった。

フェイトは残った魔法弾を集めて、次弾を用意する。

そして、爆煙が晴れてそこにいたのは無傷のなのはだった。

だが、体中に雷を帯電しているのは、先ほどの威力を表しているのだろう。

「いった……撃ち終わるとバインドつても解けちゃうんだね。今度は、こっちの……」

『Divine……』

レイジングハートから、魔力球が現れた。

「番だよ！」

『……Buster』

そして、魔法砲を放った。

「うああー!!」

フェイトはその手にある魔法弾を放つが、なのはの魔法砲では、それは何の意味もなかった。

そして、フェイトは防御魔法を展開する。

何とか防いだものの、その余波によって手袋やバリアジャケットが千切られた。

息を切らしているフェイトが見たのは、光の輝きだった。

「受けてみて、デイバインバスターのバリエーション！」

『Starlight Breaker』

次の瞬間、散ったはずの魔力が周囲から次々に収束していく。

それを見たフェイトは、すぐに放射線状から抜け出そうとする。

「ツ!? バインド!?!」

「これが、私の全力全開！」

そして、なのははデバイスをフェイトの負に向ける。

「スターライト……ブレイカ　！！」

そして、膨大な魔法砲が放たれた。

「な、何つつう馬鹿魔力だ！？」

「うわー、フェイトちゃん生きてるかな？」

それを見たクロノは驚きながら、エイミィはフェイトの心配をしていた。

（あれは、魔法と言うより核爆弾だろ）

俺はその光景を見ながらそう思っていた。

「はあ……はあ……あ」

あれだけの魔力を放てばさすがのなのも、疲労感を感じる。

しかし、力なく海に向かって落ちていくフェイトの姿を見て、すぐに後を追うとしたが、それは俺が掛けた浮遊魔法で意味を失くした。

「っ……」

「あ。気付いた、フェイトちゃん？」

すぐさま抱きかかえたのは、目を開けるフェイトを見てそう言った。

「ごめんね……大丈夫？」

「うん……」

なのはの言葉にフェイトは頷いて答えた。

「私の……勝ち、だよな？」

「そう……みたいだね……」

『P u t o u t』

フェイトの呟きに答えてか、バルディッシュがジュエルシードを排出した。

「飛べる？」

なのはの問いかけに、フェイトはなのはから離れる事で答えた。

「よし、なのは。ジュエルシードを確保して、それから彼女を……」

「いや、来た!!」

なのは達に指示を送るクロノだが、エイミーの言葉が響いた。

それを具現化するように、はるか上空で雷電が現れた。

「っ!?!二人とも、僕の後ろへ!!」

「う、うん！」

なのは達は俺の言う通りに、後ろの方に避難した。

「絶対防御！！」

俺はそれを確認した後に、目の前に透明な障壁を張り巡らせた。

絶対防御……それはその名の通りにどのような魔法攻撃でも、防げる魔法だ。

ただ魔力の消費量が激しい為に、あまり多用は出来ないが、こつこつた場面では、使い所がある魔法なのだ。

「はあ……はあ……何とか防ぎきったな」

【クロノ？場所は特定できたか？】

俺は息を切らしながらも、クロノに念話で聞いた。

【ああ、すでに武装隊員が突入している】

【分かった。こっちも一旦アースラに戻る】

俺は念話を終えると、背後にいる二人の方を見た。

「二人とも、怪我はないか？」

「大丈夫」



「うん」

二人の答えを聞いた俺はほっと一安心すると、アルフ達を呼びアースラへと転送した。

## 第19話「海上の決戦」(後書き)

ご無沙汰しておりますTRです。

いよいよ物語もクライマックスといった所ですが、果たして次回は  
どうしようかと悩んでいます。

次回がいつ更新できるかは分かりませんが、次回も楽しみにして頂  
ければ幸いです。

それでは、これにて失礼します。

## 第20話「突き付けられし真実」

「お疲れ様」

アースラ　へと戻った俺達に、リンディさんが労いの言葉を掛ける。

モニターにはプレシアの拠点地の映像が映し出されていて、状況の報告が入っていた。

「それから、フェイトさん。初めまして」

リンディさんがフェイトに声を掛けるが、フェイトはただ手元を見ているだけだった。

【母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女をどこか別の部屋に】

【は、はい】

「フェイトちゃん、よかつたら、私の部屋」

リンディさんの念話を受けたのはがフェイトに声を掛けるが、フェイトはモニターを見た。

モニターには武装隊員が玉座に侵入する場面が映し出されていた。

「プレシア・テストロツサ！時空管理法違反。および管理局監査への攻撃の容疑であなたを逮捕します」

「武装を解除して、こちらへ」

武装隊員達の言葉にも余裕の表情を浮かべているプレシアだが、隊員の数人が奥の部屋へと動いた。

僕はこの先に来るであろう展開を予想して、準備を進めた。

「これは……！」

そして隊員達はその部屋を見ると、驚きの声を上げた。

なぜなら、その部屋には……。

生命ポットに入れられたフェイトと瓜二つの少女……アリシアがいるのだから。

「うわぁ！」

そして、プレシアは隊員達を弾き飛ばした。

「私のアリシアに近寄らないで」

「撃て！」

隊員達は砲撃を放つが、実力の差が大きすぎて通じてすらいない。

「うるさいわ……」

「危ない！ 防いで！」

リンディさんの指示と同時に、プレシアから電撃が放れた。

「行けない！ 局員たちの送還を！」

目の前に倒れ伏す隊員達を見て、プレシアは不気味なように笑っていた。

「アリ……シア……？」

瓜二つの少女を見たフェイトは、その少女の名前を呟いた。

「もう駄目ね……時間がないわ。たった9個のロストログアでは、アルハザードに辿り着けるかは分からないけど……でも、もういいわ。終わりにする」

プレシアはそう言うとモニターがあるのかを知っているかのようにこつちを見た。

「この子を亡くしてからの暗鬱な時間を……この子の身代りの人形を娘扱いするのも。聞いていて？ あなたのことよ、フェイト」

「っ！！」

プレシアの言葉にフェイトが息を呑んだ。

「せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない、私のお人形」

「最初の事件の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テストロッ

サを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる……使い魔を超える……人造生命の生成」

エイミイさんが調べた情報を聞いた、なのは達が驚きの表情を浮かべた。

「そして死者甦生の秘術。フェイトって言う名前は当時行っていた計画に付けられた物なの」

「よく調べたわね。そうよ。そのとおり。だけどだめねちっともうまくいかなかった。作り物の命は、所詮作り物……失ったものの代わりにはならないわ」

エイミイさんの調べた情報にプレシアは、嘆くように口にした。

「アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままを言ったけど、私の言う事は穂等によく聞いてくれたわ」

「止めて……」

プレシアの言葉になのはが呟いた。

「アリシアはいつでも私に優しくかった……フェイト、やっぱりあなたは、アリシアの偽物よ。せっかくあげたアリシアの記憶も、あなたじゃだめだった」

「止めて……止めてよ！」

「アリシアを蘇らせるまでに私が慰みに使っただけのお人形。だからあなたはもういらないわ。どこへなりとも消えなさい！」

「お願い、もう止めて！」

なのはの言葉にも、プレシアはただ笑うだけだった。

「いいことを教えてあげるわ、フェイト。あなたを作り出したときからね、私はずっとあなたの事が……大嫌いだったのよ！」

「っ!!！」

プレシアの最後の言葉を聞いた瞬間、フェイトはその手からバルデツシユを落した。

そして、まるで彼女の心を表すかのように、砕けた。

「フェイトちゃん!?!」

「っっ」

俺は地面に倒れそうなフェイトを、慌てて片手で支える。

「屋敷内に魔力反応多数！」

女性の声が聞こえたかと思うと、アースラ内にアラームが鳴り響いた。

「庭園敷地内に魔力反応いずれもA+！」

「総数、およそ60……80、まだ増えています！」

そして局員たちから、絶望的な情報が伝えられる。

「私達の旅を邪魔されたくないのよ」

プレシアは生体ポットを地面から外すと、玉座へと移動した。

「私たちは旅立つの！忘れられた都……アルハザードへ！」

プレシアの手からジュエルシールドが9個放たれる。

(まさか……)

俺は嫌な予感がした。

いや、しなければおかしい。

「この力で旅立って、取り戻すのよ……全てを！」

そして、ジュエルシールドが9個発動した。

「次元振です…… 中規模以上！」

「振動防御、ディストーションシールドを！」

アラームに加えて今度は赤色灯が点滅を始めた。

(……………おかしい)

フェイトの絶望の淵に落ちた表情を見ている中、俺は心の中で疑問を感じていた。



今のプレシアの言葉に、何か引掛かったような気がしたのだ。

「とにかく、フェイトを医務室へ」

「う、うん!」

アルフがフェイトを抱きかかえると、俺達はブリッジを後にした。

「クロノ君!どこへ?」

その途中クロノに会った。

「現地へ向かう。元凶を叩かないと……」

「私も行く」

「俺もだ」

「もちろん、この僕もだ」

クロノの言葉にアルフとフェイト以外が全員行くと言った。

「分かった」

クロノはしばらく考えると、それを了承した。

「アルフは、フェイトについててあげて」

「う、うん」

「行こう！」

「うん！（ああ！）」

ユーノがアルフにそう言っつて、俺達は庭園に向かった。

【クロノ、なのはさん、ユーノ君、隆介君、私も現地に出ます。あなた達はプレシアテストタロツサの逮捕を！】

【【【了解】】】】

リンディさんの念話に、俺達は一斉に答えた。

そして、俺達は庭園へと向かうのだった。

## 第20話「突き付けられし真実」（後書き）

本当にすみませんでした！！

約1カ月も更新が出来ませんでした。ようやく最新話を投稿することが出来ました。

最近執筆する余裕が無い状態ですので、投稿するまで時間がかかってしまうのです。

しかし、ちゃんと投稿はしていきますので、長い目で見守っていただければ幸いです。

それでは、これにて失礼します。

第21話「決着を付ける為に」(前書き)

何とかぎりぎりで間に合いました……

これで今年は書き納めとなります。

それでは、どうぞ。

## 第21話「決着を付ける為に」

雷が鳴り響く場所に俺達はいた。

そこは、前に一度行った事のある、プレシアの拠点地だった。

そして俺達の前には大量の傭兵がいた。

まあ、あれに生命体反応がない限り、生命体ではないようだが。

「一杯いるね……」

「まだ入り口だ。なかにはもつというよ」

ユーノの言葉にクロノがそう答えた。

「クロノ君、この子たちって……」

「近くにいる物に攻撃をするただのロボットだよ」

「そっか。なら安心だ」

クロノの答えを聞いたなのはそう言うと、レイジングハートを構える。

しかし、それを片手で遮ったのはクロノだった。

「この程度の相手に、無駄弾は必要ないよ」

驚くのはをよそにクロノはデバイスを構えた。

「はあっ！」

『ステインガースナイプ』

クロノの持つデバイスからそんな声が聞こえたかと思うと、水色の魔法刃が放たれた。

「早い！」

なのはが驚いた様子で言う。

しかしその通りだ。

たった一撃で複数の傭兵を始末した。

「スナイプショット！」

さらにクロノの一言によって、上空に待機していた魔法は一つの線となり、傭兵を貫くと一気に爆発した。

そして、クロノの魔法を耐えきった斧を持った銀色の傭兵に向けて、クロノは飛んで行った。

傭兵の攻撃を巧みにかわし、傭兵の上に乗リデバイスを突き付ける。

『ブレイクインパルス』

次の瞬間、傭兵は爆発した。

(執務官と言われるだけはあるな)

俺は、クロノの実力を見てそう感心していた。

「ぼうつとしてないで！行くよ！！」

「「うん」」

その光景を見て茫然としていたのはとユーノにそう言っと、中に入ってしまった。

俺も黙って中に入っていく。

中は前来た時と同じだが、至る所に穴があいていた。

「その穴、黒い物がある場所には気を付けて」

「え！？」

穴を怯えた様子で見ていたなのはにクロノが忠告した。

「虚数空間。あらゆる魔法が全て発動しなくなる空間なんだ。飛行魔法もデリーとされる。もしも落ちたら……重力のそこまでまっさかさまだ……二度と上がってこれないよ」

「き、気を付ける」

クロノの説明を聞いたなのは、体中を強張らせて答えた。

(うつかり落ちないように気をつけないとな)

俺は内心ひやひやしながら、注意して走った。

そして、ドアをけり破るとそこには大量の傭兵が。

左側には上階に行く階段が見える。

「ここから二手に分かれる。君たちは最上階に行つて駆動炉の封印を」

「クロノ君は？」

その光景を見たクロノが、なのは達にそう指示を出した。

「プレシアの元に向かう。それが僕の仕事だからね」

「俺も行くぞ。プレシアには話したい事が山のようにある」

俺の言葉にクロノは無言で頷いた。

どうやら承諾してくれたようだ。

「今道を作るから、そしたら！」



「うん！」

クロノの言葉になのはは頷くとユーノの元に駆け寄る。

「ブレイズキャノン」

クロノのデバイスから放たれた魔法弾が、傭兵を破壊した。

「クロノ君、隆介君！気を付けて！」

自分よりも人の心配をするのはに、苦笑いを浮かべながら、俺達は見送った。

「さあ、クロノ。俺について行けるかな？」

「当たり前だ！！！」

俺は威勢のいいクロノの言葉を聞きつつ、プレシアの元へと足を進めた。

(きつちりと蹴りを付けさせて貰おうじゃないか……プレシア・テスタロッサよ)

そんな決意を胸に……。

第21話「決着を付ける為に」（後書き）

皆さんからの感想・評価をお待ちしております。

## 第22話「新たな”自分”の始まり」

### 3人称Side

アースラの医務室。

ブリッジで倒れたフェイトはそこにいた。

そこには目に輝きを失った状態のフェイトと、それを心配そうに見ているアルフの姿があった。

壁にあるモニターには庭園での様子が映し出されている。

「あの子たちが心配だから……あたしもちょっと手伝ってくるね」

モニターを見たアルフは、今だ目に輝きを失っているフェイトに語りかける。

「すぐ帰ってくるよ。そんで全部終わったら……ゆっくりでもいいから、あたしの好きな本当のフェイトに戻ってね。これからはフェイトの時間は、フェイトが自由に使っていいんだから」

アルフはフェイトにそう話すと、フェイトに背を向けて歩き出す。

そして、もう一度アルフは振り返り、フェイトを見るが、フェイトの目にはまだ輝きに戻っていなかった。

アルフはそれを見ると、医務室を後にした。

だが、アルフはフェイトの目に光が戻り始めているのに気づいていなかった。

フェイトは視線をモニターへと移す。

モニターには、クロノが魔法刃で傭兵を破壊している様子が、映し出されていた。

（母さんは、最後まで私に微笑んでくれなかった……私が生きていたいと思ったのは……母さんに認めて欲しかったからだ）

フェイトはそれを見ながら心の中でそう呟く。

（どんなに足りないと言われても……どんなにひどい事をされても……だけど、笑って欲しかった。あんなにはつきり捨てられた今でも、母さんにすがりついてる……）

そんな時、モニターにはなのは達の前に現れるアルフの姿が映った。

（アルフ……ずっとそばにいてくれたアルフ。言う事を聞かない私にきつと随分悲しんで……）

そしてフェイトの視線は、なのはへと向けられた。

（何度もぶつかった、真っ白な服の女の子……初めて私と対等に、まっすぐに向き合ってくれたあの子……何度も出会って戦って、何度も私の名前を呼んでくれた。何度も、何度も……）

フェイトは涙を流していた。

すると、フェイトは突然体を起こした。

（私が生きていたのは母さんに認めて貰いたいからだだった。それ以外に生きる意味なんかはないと思ってた。それが出来なきゃ、生きていけないと思ってた）

そんな時、彼女の脳裏に、なのはの言葉が呼び起こされた。

（捨てればいいってわけじゃない。逃げればいいってわけじゃもつとない）

フェイトは起き上がると、相棒でもあるバルディッシュを手にした。

（私の……私達の全ては、まだ……始まってもない）

バルディッシュを起動させるが、本体の方にはかなりのひびが入っていた。

「そうなのかな、バルディッシュ。私、まだ始まってもいなかったのかな？」

『 get set 』

フェイトの言葉にバルディッシュはそう答える。

フェイトの目から一粒の涙が流れる。

「そうだよ、バルディッシュもずっと私の側にいてくれたんだも

んね。お前も、このまま終わるのなんて嫌だよな」

『yes sir』

「うまくできるか分からないけど、一緒にがんばろう」

フェイトは目を瞑り、意識を集中すると、バルディッシュは光に包まれやがてひびが無くなった状態に回復した。

『recovery』

（私達の全ては、まだ始まってもない）

フェイトは、マントを着込み、バリアジャケットを着る。

「だから、本当の自分を始めるために……」

そのフェイトの目には堅い決意が感じられた。

そして、フェイトの足元に金色の魔法陣が展開される。

「今までの自分を終わらせよう」

（時の庭園内）

駆動炉へと向かったなのは達は、迫りくる傭兵達に苦戦していた。

「くそ！数が多い！」

傭兵を一体倒したアルフがそう愚痴をこぼす。

「だけならいいんだけど、この……」

なのはも魔法弾を放ちながら、そう呟く。

そして、なのは達のやや上の方には、クロノが倒した中型の傭兵や複数の傭兵がユーノのバインドによって拘束されていた。

「何とかしないと！」

だが次の瞬間、一つのチェーンが千切れ、中型の傭兵がなのはに向けて動き出す。

「なのは！」

なのはが気付いた時には、もう遅く傭兵は目の前にまで迫っていた。

なのはは目を閉じた次の瞬間だった。

『Thunder rage』

上空から金色の雷撃が放たれたのだ。

なのはは驚いたように上空を見る。

そこにいたのは、バルディッシュを傭兵に向けて構えるフェイトの姿だった。

『 get set 』

「サンダー……レイジ！」

そして、フェイトから放たれた雷撃は中型を破壊する。

「フェイト？」

突然の頂上に、アルフは驚いていた。

なのはと同じ高さまで降りたフェイトは、無言で見合っていた。

しかし、二人のそばにある壁を突き破って現れたのは、大型の傭兵だった。

さらには背中に砲台のような物を背負っているという、恐ろしさまでもを醸し出していた。

「大型だ……バリアが強い！」

「うん……それに背中の中」

なのはの言葉と同時に、魔力が集束する。

それは砲撃以外の何物でもなかった。

「だけど……2人でなら」



「うん、うんうん!」

フェイトの言葉に、なのはは嬉しそうに何度も頷く。

「いくよ、バルディッシュ」

『get set』

「こつちもだよ、レイジングハート」

『stand by ready』

フェイトに次いで、なのはも攻撃準備をする。

「サンダー……スマッシャー!」

「デイベインバスター!」

なのはとフェイトから放たれた魔法砲は傭兵はおろか、庭園の壁と吹き飛ばした。

「フェイトちゃん!」

なのはの呼びかけに、フェイトはなのはの方を見る。

「フェイト!フェイト!フェイト!」

そんな時、アルフが涙を流しながら、フェイトに抱きついた。

「アルフ……心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ……本当の私を」

それはフェイトの決心だった。

そして、全ての賽は投げられた。

3人称Side End

## 第22話「新たな”自分”の始まり」（後書き）

いつの間にか22話となっていました。

そろそろ無印編も佳境に入りました。

そして気づけばPVが3万を超えていました。

読んでくれる皆さんに感謝しています。

おかしな点などがありましたら、遠慮なくお知らせください。  
直せる限りの範囲内ですが、直していこうと思います。

それでは、これにて失礼します。

### 第23話「悲劇で終わらせたりなんかしない」

なのは達と別れてから、俺とクロノはプレシアの元に向かっていた。

その道中、傭兵が出てきたが俺はそれを瞬速で潰した。

「君のそれは本当に規格外だな」

「そう言うお前もだがな……まあ無傷なのと血を流しているのでは、差があるけど」

そんな僕を見ていたクロノが呆れたように言ってくるが、俺としてはこれでも抑えているくらいだ。

しかも、クロノはさっき傭兵で負った怪我のためか、頭から血を流していた。

【プレシアテストロッサ。終わりですよ。次元震は私が抑えています。駆動炉も次期封印、あなたの元にも執務官達が向かっています】

そんな時、リンディさんの念話が聞こえてきた。

【忘れられし都、アルハザード。そしてそこに眠る秘術は、存在するのかさえも不明なただの伝説です】

【違うわ。アルハザードへの道は次元の狭間にある。次元と空間が砕かれた時、その狭間に滑落していく輝き……道は確かにそこにあ

る】

リンディさんの念話にプレシアはそう答える。

僕はそれを黙って聞いていた。

【随分と分の悪い賭けだね。あなたはそこに行って一体何をするの？ 失った時間と、犯した過ちを取り戻すの？】

【そうよ。私は取り戻す。私とアリシアの過去と未来を】

リンディさんの問いかけに答えるプレシアの声を聞いた瞬間、目の前に扉が現れた。

「クロノ！ あれだ！！」

「ああ！！」

僕の言葉にクロノは答える。

それだけで何をするのかは簡単に理解出来た。

俺は誘導弾の発射準備をする。

放つのは威力重視型だ。

【取り戻すの……こんなはずじゃなかった……世界の全てを！】

プレシアの言葉が聞こえた瞬間、俺達はドアに向けて魔法弾を放った。

「世界はいつだって……こんなはずじゃないことばかりだよ！いつだって誰だってそうだ！こんなはずじゃない現実から逃げるか、立ち向かうかは個人の自由だ！！」

（良いこと言うね、執務官殿は）

クロノの言葉に俺は心の中で感心していた。

すると、上空からフェイトとアルフが下りてくるのが見えた。

「だけど自分の勝手な悲しみに、無関係な人間までも巻き込んで良い権利は……何処の誰にもありはしない！」

「……っゲホッゴホッ！！」

突然プレシアが口を押さえてせき込んだ。

（体の調子が悪いのか？）

俺はそれを見てそう感じた。

「母さん！」

「何をしに来たの？」

そんなプレシアを心配に思ったのか、駆け寄ろうとしたフェイトにプレシアは、冷たく言い放った。

「もうあなたに、用は無いわ」

「……あなたに言いたい事があつて来ました」

フェイトの言葉に、僕達はフェイトの次の言葉を待つ。

「私は……私は……アリシア・テストロツサではありません。あなたが作ったただの人形なのかもしれません」

フェイトの言葉にプレシアが、息を呑んだ。

「だけど、私は……フェイト・テストロツサはあなたに生み出して貰つて育てて貰つた。あなたの娘です!!」

「フフ……アハハハハハ!!」

フェイトの言葉にプレシアは不気味に笑い出した。

「だから何？今さらあなたを娘と思えと言つのか？」

「あなたが……それを望むなら」

プレシアの言い放つた言葉にも、フェイトはそう答えた。

その言葉だけでも、かなりの決意が伝わった。

「あなたが望むなら、私は世界中の誰からも、どんな出来事からもあなたを守る。私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから！」

「……くだらないわ」

フェイトの優しい言葉に返ってきたのは、プレシアからのそんな一言だった。

そしてプレシアは突然、地面に手を触れた。

そして、魔法陣が展開されると、地面から青い光があふれ出した。

「まずい！」

それはクロノの言葉と同時だった。

地面がいきなり揺れ始めたのだ。

それは、ここが崩れ始めているのだと言う事を理解するのはすぐだった。

【崩壊まで時間がないから、皆も早く脱出して！！】

女性の方がそう告げてくる。

（何かおかしい）

この人……プレシアに俺は違和感を抱いた。

何故だか、プレシアの言葉が本音だとは思えなかったのだ。

（だったら、聞いてみよう）

俺はそう決心すると、すぐに今の状況を打開しようとした。



この崩壊を抑えられれば……。

(抑える……？そつだー！)

俺は抑える方法を思いつき、それをすぐに実行に移した。

「我が、鈴木隆介の名の元に命ず。庭園よ、崩壊を止めよ！！」

俺の言葉は庭園に届き、崩壊を停止させた。

俺が持つ世界の意思の力を、少し利用したのだ。

「な！？」

「ゆ、揺れが……」

【庭園の崩壊……停止しました】

クロノの眩きに女性の念話からの情報が聞こえた。

どうやらうまく行ったようだ。

「お久しぶりですね？プレシア」

「隆介？」

「あ、あなたは！？世界の意思……！」

俺の存在に初めて気づいたのか、プレシアとフェイト達が驚いた様

子でこつちを見た。

プレシアは、俺の存在に……フェイトは俺の姿に驚いていたようだ。だって、今の俺の姿は……銀髪に白い羽根がある、世界の意思の姿なのだから

「「世界の意思!?!」」

何処からか、そんな声が聞こえたが、気にしない。

「庭園の崩壊は、俺が抑えた」

俺はプレシアにそう告げ、一歩前に出た。

「まったく、この姿で力をふるうのは久しぶりだ」

俺は軽く皮肉を言った。

「で……それがあなたの答えなのか?」

「……!! そ、それ……は」

俺の言葉にプレシアが言いよどむ。

「そ、そう……よ。こんな人形……いらないわ」

「ッ……!」

プレシアの言葉に、フェイトが息を呑む。

「残念ながら、俺にはそれが本心には聞こえないんですが」

「どついつ事だ？鈴木」

俺の言葉に、理解が出来なかったのかクロノが聞いてくる。

「だったら言っておけましようか？あなたの本心を」

俺はそれを無視して、プレシアに言い放った。

「……………」

「確かにあなたは最初はフェイトの事が憎かったでしょう。姿形はアリシアにそっくりなのに、中身は違っている…………その相違点に」

今だ何も語ろうとしないプレシアに変わって、俺は言葉を紡いだ。

「しかし、それも時が経つにつれて薄くなっていったはずだ。そしてあなたはフェイトの幸せを願った」

「え？」

「何!？」

俺の言葉にフェイトとクロノが、驚いた表情をして叫ぶ。

「だから、あなたはフェイトを突き放すことで、あえて悪役を演じた。フェイトが無罪になるために…………」

「……………母さん」

「……………つたく、俺も騙された物だ。ここまで全部プレシアの心情を読み説いた物だが、反論はありますか？」

俺はため息を吐きつつ、確認を取った。

「……………そうよ。フェイトは私の娘。だからよ……………だからフェイトには、幸せになって欲しい。これが酷い母親である私が出る償いよ」

そして、プレシアは真実を語った。

「母さん…！」

「フェイト……………ごめんね」

フェイトの声に、プレシアは涙ぐみながら謝る。

「それが俺の質問の答えであるなら……………あなたとの約束は守りましたよ」

「ありがとうございます……………世界の意思 隆介で良いです 隆介」

どうでもいいが、これだけでは俺は満足できない。

「あなたにも来てもらいますよ」

「それは出来ないわ。私がフェイトと一緒にいる権利なんて……………」

「そんな事はあなたが決める物ではありません。それに娘をまた悲しませる気ですか？」

「……………っ!」

俺の”また”と言う単語に、プレシアは肩を震わせた。

「あなたが嫌だと言っても、俺が無理やりにも連れて行きます」

「……………分かったわ」

何とかプレシアを連れて帰ることが出来たようだ。

【クロノ君大変!!庭園がまた崩壊し始めた!!】

「何だっつて!!!?鈴木!!」

「ああ、干渉はかなり力を使うから、さっき干渉を止めたんだ」

「それを早く言え!!とにかく脱出するぞ!!!!」

「は、はい!!」

その後合流したなのと共に、俺達は崩壊寸前の庭園から脱出したのだった。

**第23話「悲劇で終わらせたりなんかしない」(後書き)**

3週間も空いてしまい申し訳ありません。

今回は本当に難産でした。

次回も、いつ投稿できるかが不明ですが、よろしく願います。

それでは、これにて失礼します。

## 第24話 家族を取り戻すために（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

かなり遅れましたが、第24話になります。

ちなみに今回はあとがきのほうで趣旨を変えてみました。  
問題があるようでしたらやめます。

## 第24話 家族を取り戻すために

俺たちは何とか庭園から脱出することができ、今はリンディさんの前にいた。

「さて、プレシア女史とフェイトさんを護送室へ ちよっと待って ください なんてしょう？」

リンディさんの言葉にプレシアとフェイトの肩が震えるのを見た僕は、遮る様にして言った。

「その前に、彼女との約束を果たしても良いでしょうか？」

「約束？」

俺の言葉にリンディさんは首をかしげる。

「言いましたよね？プレシアの願いは家族3人で仲良く暮らすこと。俺はその約束を叶えてあげたいんです」

「……………分かりました」

「艦長!？」

リンディさんの言葉にクロノが驚いたような表情をして、リンディさんの方を見た。

まあ、当然だろうな。

「それでは、どこか広い部屋はありますか？」

「そうですね……………」

と言う事で連れてこられたのはアースラにある訓練場だった。



「……でしたら、ちょうどいいですね。では……」

俺はそこを見た感想を言うと上空に手を伸ばし、異空間へと接続する。

そして、俺が呼びよせたのは。

「な!?!」

「アリシアの……生体ポット」

そう、アリシアが入った生体ポットだった。

「一体いつの間に……」

「脱出する前にな」

俺は驚くクロノにそう言ってやった。

本当に一瞬だったからな。

「さてと……まずはアリシアを生体ポットから出して貰いたい。こ  
中でやったら窒息死する」

「分かったわ。それじゃ ちょっと待った!! なにかしら?」

俺の指示に生体ポットを、開けようとするプレシアを止めた。

「僕達は外に出ているから、アリシアを毛布で包んでくれ」

「……そうね。そうしましょう」

俺の言葉にプレシアは俺以外の男……クロノとユーノを睨むように見るとそう言った。

なぜなら、アリシアは裸なのだから。

「それじゃ、野郎ども二人は退出だ!!」

「野郎って呼ぶな!!」

なんだか喚く二人の首根っこを掴んで、訓練場の外へと連れて行っ  
た。

もちろん俺もだ。

そして、数分後、中にいる女性達の許可が出た所で、俺達は再び中  
に入った。

「プレシアはアリシアの隣へ」

「分かったわ」

俺の指示に従い、プレシアがアリシアの横に立った。

「それじゃ、始める」

俺は中にいたリンディさん達にそう告げると、毛布にくるまれたア  
リシアの前まで近づいた。

「……………」

そして自分の中にある力を意識する。

「……………!?!」

次の瞬間、俺の体中に力が、あふれ出た。

それと同時にリンディさん達が息を呑む声が聞こえた。

「世界よ、我が言葉を聞き入れたまえ。個を代償として、彼女たちの命を蘇生したまえ。我、世界の名のもとに命ずる」

「こ、これは！」

「す、すこい……」

その次の光景に全員が、感嘆の声を呟いた。

俺はどうなっているかは分からないが、この力は世界のかけらを代償にして行使する最強の干渉魔法だ。

やがて、俺の体に湧き上がっていた力が消えて行った。

それは、干渉魔法が完了したということの証拠だった。

「終わった」

「ど、どうなの？」

俺の言葉にプレシアが不安と希望を、混ぜたような表情で聞いて来た。

「う……うーん」

しかし、それは誰の物でもない少女の言葉によってすぐに答えが出た。

「アリシアー！」

「あれ？お母さん、なんでないてるの？」

目が覚めたアリシアをプレシアが、涙を流しながら抱きかかえた。

「うっん。悪い夢を見ていたのよ。そう……悪い夢を」

プレシアは涙をぬぐいながら、自分に言い聞かせるようにアリシア

に言った。

「????」

対するアリシアは何の事だかが、理解できていないようだった。

「お母さん。このお姉さん誰？」

「この娘は、フェイト。あなたの妹よ」  
「妹!？」

プレシアの言葉にアリシアはフェイトをじっと見つめる。

「……その、よろしくね、アリシア姉さん」

それにフェイトはたじろぎつつも、挨拶をした。

「わーい!! 私お姉ちゃん何だね!!」

「ええ、アリシアはフェイトのお姉ちゃんよ」

フェイトに抱きついて喜びを表しているアリシアに、プレシアは微笑みながら言った。

その頬笑みには犯罪者プレシアと言う言葉は当てはまらずに、母親その物だった。

「隆介、本当にありがとう」

「お兄ちゃん誰？」

プレシアの感謝の言葉に、初めて俺の事に気付いたのか、指を指して聞いて来た。

「このお兄ちゃんはね、私達の恩人なのよ。アリシア、ご挨拶をなさい」

「初めまして、お兄ちゃん！私はアリシア・テストロッサだよ。よろしくね！！」

母親であるプレシアの言葉に、アリシアは素直に頷くと、俺にそう自己紹介をした。

「うん、挨拶が出来るのはいい事だね。お兄ちゃんの名前は鈴木隆介。よろしくね、アリシアちゃん」

「うん！隆介お兄ちゃん！！」

さて、自己紹介は終えたのだが、そろそろ向こうとも話を付けた方がいいだろう。

「さて、そろそろいいか？」

「……………」

感動的な雰囲気をぶち壊すような形で、入ってきたのはクロノだ。

「な、なんだ？」

「お前は少し空気を読め」

俺達のじと目にクロノはたじろぐが、俺の言葉が全ての理由だろう。

「皆も頷くな！！」

今日は、クロノの叫び声が響いた。

くおまけく

「お母さん、隆介お兄ちゃん、フェイトちゃん」

「何かな？アリシア」

「何？アリシアちゃん」

「何かな？アリシア姉さん」

訓練場を後にして歩いている俺達に、アリシアが声を掛けた。

「あのお兄ちゃんは、なんで顔が赤いの？」

「「「……………アリシア（ちゃん・姉さん）は見ちゃだめ」「」」

アリシアの疑問に、俺達は声を揃えて言った。

「クロノ！！お前は頭の怪我を何とかしろ！！」

「あ……………忘れてた」

この時、この場にいる全員が、忘れるなぐ！！と言ったのは、間違いない。

## 第24話 家族を取り戻すために（後書き）

T「はい、皆さんお久しぶりです!!」

隆「ものすごく軽く言っているが、笑いごとじゃないだろ」

T「いや、予想外に遅れちゃったんだよね」

隆「他人事のように言っているようだが、それだといっしか見放されるぞ」

T「それが一番問題なんだよな……どうしても時間がかかってしまうものだし」

隆「作者も一応頑張ってるもん。一気に7作品の小説を執筆するっていうとんでもないことを」

T「でもやめる気はないけど」

隆「だったら、どうするんだ？」

T「どうするって、頑張るとしか言いようはないよ」

隆「……まあがんばれ」

T「さて、遅いけど、この新たな試み。会話形式はどうだったんだろうか？」

隆「作者的には変えたいんだよな。いままでの風貌を」

T「その通り!」

隆「まあ、こういつてるが、こういうのはダメだと思ったらすぐに連絡してくれればありがたい」

T「私が素早くやめます」

隆「少しは自分の意見を通せよ」

T「流されるままにともいうじゃないか」

隆「物はいいようだな。さて、次回予告でもしてお開きとしよう」

T「そうだな。次回はいよいよ無印編の最後を飾ります!!」

隆「それでは、次回も、お楽しみに」

## 第25話 そして事件は終わりを告げる（前書き）

一月も間が開いてしまい申し訳ありませんでした。

他作品を同時に執筆しているので、かなり間隔が長くなってしまいました。

それでは、かなりお待たせしましたが、第25話をどうぞ



## 第25話 そして事件は終わりを告げる

数日して、ようやく俺達はアースらから戻ってることが出来た。

「この家に帰るのも久しぶりだよな」

『はい、そうですね』

そして俺は久しぶりの我が家に、感慨深く呟いた。

「さて、まずはこの家の掃除に食材の購入、あとは報告書をまとめたりと……色々あるな」

『一つずつこなしていきましょう』

「そうだな」

俺はヴェネゼイラのもっともな意見に頷くと、朝食を作るのだった。

「掃除もよし、食材も買いそろえたつと」

時刻は午後2時。

掃除と食材の購入、さらにはノヴァへの報告書の提出を終わらせた俺は、確認するように言った。

「疲れたし、今日はもう寝よう」

そして俺は早めの睡眠をとるのであった。

明日からまた学校だし。

さて、そんなこんなで、数日たった。

「やはり、朝は納豆に限るな」

『隆介さん、時空管理局のクロノさんからビデオコールがあります』

朝食に舌鼓みを打っていると、ヴェネゼイラからそう伝えられた。

「何だよ。せっかく楽しい朝食の時間を楽しんでいるのに……あのKYめ。とりあえず繋いで」

『了解です』

愚痴をこぼしながらクリエイイトにそう指示を飛ばすと、目の前にモニターが現れクロノとエイミィさんが映し出された。

「何の用だ？KYと書いてクロノ」

『誰がKYだ！！フェイト・テスタロッサの事だ』

俺はクロノの言葉に今までのお茶らけた雰囲気から一変、真剣な表情に変えた。

『今日彼女達の身柄を本局へ送ることになる。プレシアは難しいが、フェイトは恐らく……いや確実に無罪になる』

『クロノ君、あれから必死に証拠集めをしていたもんね』

『エイミイ、それを繰り返すな』』

クロノとエイミイのやり取りを聞きながら、俺はクロノへ確認の言葉を掛ける。

「で、用件はそれだけか？」

『いや。フェイトとプレシアが君に会いたいそうさ。幸い本局への移動までに時間がある。高町なのはにも連絡したから、君も来たらどうだ？』

関係ない俺が行くのもなんだと思ったが、プレシアの様子も気になるので行く事にした。

「分かった、それで場所は？」

『ああ、海に面している公園のような場所にしようと思ってる』  
「了解」

そして、通話が切られた。

「さて、俺達もこれを食べたら、行きましようかね〜」

俺は、半ば早めに完食すると、臨海公園へと向かった。

「よっと」

「あ、隆介君！！」

空を飛んできた僕は、着地した時に掛けられたのがなのはの声だったりする。

「あんまり時間はないんだが、君達だけで話すと良い。僕達は向こうにいるから」

「ありがとう！」

「…ありがとう」

クロノの言葉に、なのはとフェイトがお礼を言った。

何と言うかフェイトは前よりも、明るくなったような気がする

「あれ、君もこっちに来なくてもよかったのに」

「いや、二人だけの話なのに、俺がいたらまずいだろ？」

俺の言葉にクロノが苦笑いを浮かべる。

「あ、そうだ。これジュエルシードだけど、必要なら使ってくれ」  
「……てつきり虚数空間に落ちたと思っていたのだが」

俺の贈り物に、クロノは驚いていた。

「隆介」

「隆介お兄ちゃんだ!!」

「のわ!?!」

女性の声と、子供の声が聞こえたかと思うと、突然体に重みを感じた。

「アリシア……いきなり乗っかってくるな」

とりあえず背中にいるであろうアリシアに、注意をしておく。

「アリシア!……ごめんなさいね。隆介」

「いや、別に迷惑だとは思ってないさ。ただ驚いただけ」

プレシアも、とげが無くなって優しい母親になったようだ。

「あなたのおかげで、私はアリシアとフェイトといる事が出来るわ。本当にありがとう」

「俺は俺のやりたい事をやっただけだ。お礼を言われる筋合いはないよ」

お礼を言ってくるプレシアに、俺はそう返した。

「わーい。隆介お兄ちゃんの頭の上は高い」

無邪気なアリシアの言葉に、皆が笑う。

「ッと、どうやら君を呼んでいるみたいだ」

クロノが向こうの様子を見ると、そう言ってきた。

クロノの視線を辿ると、なのは達がこっちに向かって手を振っていた。

「行つてくると良い」

「了解だ」

とりあえず頭の上にいるアリシアを下して、俺はフェイト達の元に向かった。

「あの、私と母さんの事……ありがとう」

「……俺が好きにやった事だから、お礼を言う必要はないぞ？」

フェイトから言われたのはお礼の言葉だった。

だが、俺のしたことは悪く言えば、ただのエゴだ。

「それで……ね、隆介」

すると突然フェイトは顔を赤くして、落ち着かない様子で話し始めた。

（一体なんだろう？）

「ちょっと目を閉じてくれるかな？」

「あ、ああ。こうか？」

俺はフェイトに言われるとおり、静かに目を閉じた。

「う、うん」

しかし一体何をする気だ？

「しばらく会えないんだし、いいよね？」

そんなフェイトの小さな声がしたかと思った瞬間だった。

「ん……」

「ああ~~~~~!!!!!!」

突然頬に柔らかい感触があったかと思うと、なのはの叫び声が聞こえた。

「……………」

「フェイトちゃん!! ずるだよ!!」

目を開ければそこには、さっきよりも顔を赤くしているフェイトと、フェイトに抗議をしているなのはの姿があった。

(まさか)

「ごめんねなのは。でも、しばらく会えなくなるから」  
「うう〜」

なのはただ唸っているだけだった。

「時間だ。そろそろいいか？」

そんな時にやってくるクロノ。

仕事なんだろうが、もう少し空気を読んでもらいたい。

「……うん」

「フェイトちゃん！」

なのはおもむらに、髪を結んでいたリボンをはずし始めた。

「思い出に出来るの、こんなしかないけど」

「それじゃ、私も」

リボンを差し出してきたなの刃と同じように、髪を結んでいたひもをほどくと、なのはに差し出した。

「ありがとう……なのは」

「うん……フェイトちゃん」

そして二人は、それを受け取った。

「それじゃ、お別れだ」

「プレシアさん……アリシアちゃん……アルフさん……クロノ君……」



…フェイトちゃん！」

3人の足元に魔法陣が展開され、なのはが名前を言って行く。  
そして、フェイトとアリシアが手を振るとなのはも手を振った。  
もちろん俺もだが。

そして、目を覆うような光と共に、3人は旅立った。  
俺達を心地よく、優しい風が包み込んでいた。

「なのは」

「……うん」

ユーノの呼びかけになのはが答えた。

こうして、俺達に降りかかった事件は幕を閉じた。

**第25話　そして事件は終わりを告げる（後書き）**

と言うわけで、無印編は完結となりました。  
今まで見てくれてありがとうございます。  
次回は幕間となります。

それでは、これにて失礼します。

第26話 花火は人気のないところでやりました(前書き)

引き続き第26話になります。

アンケートがありますので、詳しくはあとがきをご覧下さい。  
それでは、第26話をどうぞ

## 第26話 花火は人気のないところでやりましょう

【フェイトとアルフの記念日？】

すべての始まりはいつものように学校で授業を受けている時のこと。突然なのはから念話が入って来たのだ。

【うん。それでフェイトちゃんとアルフさんにお祝いをしたいの】

【なるほど……で、なんで俺にそれを言うんだ？】

なのはの意図は良く分かったが、それを伝える理由が見当たらない。

【うん……実はね】

そして俺はなのはから理由を聞いた。

【なるほどな……というよりあんな危険な奴を改良できるのか？】

【練習してきたから大丈夫だとは思っただけ……】

あー、そう言えばユーノとなのはって特訓してたよな。

【それならいいけど】

【ありがとう、隆介君！それじゃ】

その言葉を川切りに、念話が途切れた。  
そもそも今は授業中だろ。

(後で、説教だ)

俺は心の中で強く決めて授業の内容に耳を傾けるのであった。

3人称Side

ここは、アースラ。

フェイト達はそこで拘留されていた。

本部での事情聴取だが、アースラを経由しての移動となる。

「いらつしやい」

「うわあゝ。肉肉、肉肉!!」

「これはまた……随分豪華だな」

二人が休憩室に入ると、そこには豪華料理が並んでいた。

アルフは肉料理に、クロノは料理の豪華さに感心していた。

「エイミィ、どうしたの?」

「だって今日は二人の記念日でしょ? 契約記念日」

フェイトの疑問にエイミィが答えた。

「うん。そうだけど……」

「そう言う日は美味しい料理を食べて、皆でお話をする日でしょ」

「そうなの?」

エイミーの言葉にフェイトは首を傾げる。

「それにフェイトちゃんには最近、うちのクロノ君がお世話になってるし、感謝の気持ちを込めてね……ちょっとした物だけだね」

「ちよつとじゃない、かなりの量と豪華さだよ」

「えへへ、趣味入ってまーす」

フェイトの突っ込みにエイミーさんが笑いながら言う。

「まあまあせっかくだから、頂きましょう」

リンディはそう言いながらお皿を並べて行く。

「ほーら、座って」

「うん」

「アルフも」

フェイトとアルフはリンディとクロノによって座らせられた。

「あ、プレシア女史。ちよつど良い所に」

「これは一体何の騒ぎかしら？」

そんな中入って来たプレシアにリンディが話しかける。

「うわー、おいしそうな料理があるよー」

一緒にいたアリシアが目を輝かせていた。

「今日は二人の契約記念日なんですよ。そのお祝いです」

「そう……なら私も一緒に祝わせて貰おうかしら」

そう言つて、リンディ達の所に立つプレシアに、フェイトは嬉しそうだった。

ちなみにアリシアは、フェイト達の隣の椅子に座っていた。

「二人とも、記念日おめでとう」

「ケーキもあるよ」

「あの、その……う、嬉しい……です」

お祝いの言葉に顔を赤くさせるフェイト。

「誕生日じゃないんだけど、ケーキ用のキャンドルもあるよ。こつこ本立てて火を付けてつと」

「この習慣、なのはさん達の世界でも同じですつてね」

リンディがそう呟く。

確かに、なのは達の世界でも、誕生日ケーキはろうそくを立てる習慣がある。

「ケーキとろうそく……そうなんですか？」

「で、照明を少し落として」

エイミィが照明を落とすと、火のついたろうそくの輝きが辺りを照らす。

「うわぁ……きれい」

「うん」

フェイトの言葉にアルフが頷いた。

「はい、二人で吹き消して」  
「あ……う、その……えっと」

エイミーさんの促す言葉に、二人して照れていた。

「ほら」

「う、うん……じゃ、アルフ」

「うん、それじゃ……」

「「せーの」」

そしてフェイトとアルフによってろうそくの火が消された。

パチパチパチ

拍手の音が二人に送られた。

「あ……ありがとう、ありがとう!」

「もう、あんまりフェイトを照れさせないで……あたしもなんだか照れるんだから」

『あははは』

アルフの言葉にその場にいた全員が笑った、その時だった。

パチパチパチ

「え?」

そんな時、休憩室内に再び拍手が響き渡った。

『「じゃはは……フェイトちゃん、アルフさん。おめでとう!」』



『おめでとう、二人とも』  
「え……なのは？浩介？」

そして今まで何もなかった場所に現れた映像にはバリアジャケットを着たなのはと、黒いバリアジャケットに身を包んだ隆介さらになのはの方に乗っている動物形態のユーノが映っていた。

3人称Side End

「で、こんな山奥でやると言う事か」  
「うん。ここなら誰にも迷惑はかからないからね」

僕達は夜、裏山の方に集まっていた。

なのはとユーノは贈り物の準備を、俺は映像の接続を試みていた。

「それじゃ、二人ともつなげるぞ」  
「うん」  
「ほら」

映って来たのは火のついたろうそくを前に、顔を赤くしているフェイト達だった。

『う、うん……じゃ、アルフ』  
『うん、それじゃ……』  
『せーの』

そしてフェイトとアルフによってろうそくの火が消された。

パチパチパチ

拍手の音が二人に送られた。

『あ……ありがとう、ありがとう!!』

『もう、あんまりフェイトを照れさせないで……あたしもなんだか照れるんだから』

『あははは』

アルフの言葉にその場にいた全員が笑った。

パチパチパチ

『え?』

そんな時に、俺は拍手を送った。

なのは達も俺に続くように拍手を送る。

「にやはは……フェイトちゃん、アルフさん。おめでとう!」

「おめでとう、二人とも」

『え……なのは?隆介?』

突然の事にフェイトとアルフ、アリシアにプレシアさんが目を白黒させている。

「今日はそんな記念日だったんだね。私からもお祝い言わせて」

「僕からも」

『こ、これって、リアルタイム通信じゃ?』

『可愛い身内の特別な日だと、管理の注意力も散漫になるらしいわね』

フェイトの慌てたような言葉に、リンディさんがそう言ったが、もちろんこの人は最初から知っている。そもそも、これを許可したのはこの人だし。

『厳密には0.05秒遅れで繋いでいますからリアルタイムじゃないですしね』

『う、うん。なのは？』

「うん、フェイトちゃん」

エイミーさんの言葉を聞いたフェイトが、なのはに話しかける。

『こっちは、その……元気だよ。皆すごく優しく、なんだか心が追いつかない』

「にははは、きつとすぐに追いついてくるよ。大丈夫」

『うん、ありがとう』

なのはの言葉にフェイトがお礼を言った。

「アルフ、元気？」

『ああ、もうめちやめちや元気！』

『なのは達は今、外なの？そこは、森の中？』

フェイトが聞いてくるが、少し正しい。

「うん、裏山。今はあまり長く話せないし、贈り物もすぐには送れないから。だから私とユーノ君からのお祝い、見ててね」

『Stand by Ready』

「行くよユーノ君、隆介君、レイジングハート」

「うん」

「了解」

『All, right』

なのはの合図に俺達は頷く。

「夜空に向けて砲撃魔法、平和利用編！」

『Starlight breaker』

なのはがレイジングハートを上空に向けて構える。

「スターライトブレিকা 打ち上げ花火バージョン」

レイジングハートに桜色の魔力が集束する。

「ブレイク……シュート!!」

そして、砲撃魔法が放たれた。

しかしそれは上空で爆発すると、鮮やかな色となって散って行った。

それはまるで、本物の打ち上げ花火のように。

『うわ〜』

『きれい』

『すごい……光のアートみたいね』

『また無闇に巨大な魔力を』

それを見たリンディさん達が感嘆の声を上げる。

クロノだけは呆れていたようだが。

『すごいなのは、夜空に光がきらきら散って、とてもきれいだ』

「うん。続けて行くよ、ユーノ君」

「うん！」

そして、今度は連発で放った。

『れ、連発!?!』

『相変わらず、何つ 馬鹿魔力』

それには向こう側も驚いていたようだ。

「「はあ、はあ、はあ」」

しかし、あれだけ連発すれば、さすがに答えたのか、二人とも息をきらしていた。

ちなみに俺は、二人の魔法の補助と緊急時の対処が役割だ。

『なのは、ユーノ、大丈夫?』

「にやはは、大丈夫」

「も……全然」

心配したフェイトが二人に声を掛けるが、二人は息を切らせながらも答えた。

「ちゃんとしたプレゼントは、ビデオの返事と一緒に送るね。今は今日のうちにどうしても伝えたかったお祝い」

『ありがとう、ありがとねなのは』

「うん。きつとすぐ……きつとすぐに会えるから、だから今日は普通にお別れね。またねフェイトちゃん」

『うん、ありがとう。なのは』  
「うんー!」

そして、通信が途切れた。

どうやら限界時間に到達したようだ。  
こうして、俺達の贈り物は終わった。

くおまけ

「二人とも、本当に疲れてんだな」

「いくら範囲と威力を落としてもブレイカの連発だからね、疲れて当然だよ」

「でもユーノ君がコントロールをしてくれたおかげでうまく出来たよ。ありがとね、ユーノ君」

贈り物を送る事が出来たなのは達は、地面に座り込んでいた。

「あはは……他に魔法を使ってなかったから制御に集中でき……」

「あれ?」

「ん?」

「他に魔法を使ってないってことは……」

「ってことは?」

俺はこの時、嫌な予感を感じていた。

「……結界、張り忘れてた」

「ええ〜！〜！！！！？」

その時、裏山になのはの叫び声が響き渡った。

「じゃ、じゃあ……今のブレイカの打ち上げがご近所中に……」  
「……」  
「……」

結界の張り忘れとか、何というミスだよ。

「心配するな。こんな事もあるつかと、俺の方で結界を張っておいた」

「ほ、本当！？」

僕言葉に、二人が輝く目で見てきた。

『隆介さん。その……』

「ん？どうしたヴェネゼイラ」

そんな中、ヴェネゼイラから申し訳なさそうな感じで声を掛けられた。

『はい。隆介さんに言われて掛けていたりミッタのために、隔離型結界魔法の強度が紙以下になっていました……』

「……それで？」

俺はいやな予感を感じつつも、続きを聞いた。

『先ほどなのはさんの放った最初のスターライトブレイカで、結界魔法は壊れてしまいました』

「……」  
「……」  
「……」

もはや声すらも出なかった。  
俺の隔離型結界魔法の強度はリミッタ を掛けた事で、かなり弱く  
なっていたのを忘れていた。

「お、音と光以外にご迷惑はお掛けしていないと思うけど……もし  
かして私達、このまま打ち上げ地点に残ったままだと」

「非常にアレかも」

「アレだよね」

「アレだよな」

この時俺達の心は一つになった。

「ええッと、それじゃユーノ君。肩に乗って。隆介君は、装置を片  
づけて」

「う、うん」

「わ、分かった」

ユーノはなのはの肩に乗り、俺は通信のサポートとしての装置を片  
づける。

その時間わずか10秒。

「それでは、せーの」

「「「ごめんなさい！！！」「」「」

俺達は謝りながら走って逃げた。



くおまけ2く

某所、とある場所を走るリムジン車があった。  
その車の中ではアリサとすずかが外を見ていた。

「今の花火……何かすごかったね」

「うん。変わった花火だったけど、ピンクと緑ですごくきれいだった」

二人は、なのはが放った花火もどきをしっかりと見ていたのだ。

「花火の季節にはまだ早いのに、何だったんだらうね？」

「何だったんだらう？」

二人は首を傾げていた。

それが彼女達の親友による物だとは夢にも思わなかったらう。

## 第26話 花火は人気のないところでやりました(後書き)

ということでした、幕間最初の話はサウンドディスクの内容になりました。

ここで突然ですが皆さんにお願いがございます。

この幕間でこういった話を書いてほしいというリクエストがございましたら、感想またはメッセージでどしどしお寄せください。

現在の予定では2、3話分を予定しております。

期限は次回更新時までとさせていただきます。

また、もしリクエストがないようでしたら、このままA・Sへと行きたいと思しますので、よろしくお願いします。

次回の更新まで遅くても一か月は掛ってしまいますので、ご了承ください。

それでは、また次回でお会いしましょう。

第27話 プール、それは欲望と矛盾の塊？（前書き）

ようやく完成しました、幕間のフィナーレを飾る話です。

## 第27話 プール、それは欲望と矛盾の塊？

「なんでこうなった」

突然だが、俺は今非常に理不尽な目に合っている。  
それは……

「あ、隆介君。ど、どうかな？私の水着」

「隆介！私の水着は似合ってるわよね？」

「隆介君……その、私はどうかな？」

水着姿のなのは、アリサ、すずかの三名の俺への問いかけだった。

昼休み、屋上に向かっていた俺達は、なのはに呼び止められたのだ。

「プール？」

すべての始まりは、なのはの一言だった。

「うん！アリサちゃんたちと一緒に行く約束をしたの。それで隆介君も一緒に行こう」

「……理由は？」

「そ、それは……その……昨日かった水着を見てほしいからで（ボソッ）」

なのはに聞いただすもよく聞こえなかった。

「ダメ……かな？」

「うっ！？」

なのはの上目づかいに、俺は何も言い返せなくなった。

さすがの俺も、女性の上目遣いには弱い。

「わ、分かった。お言葉に甘えるよ」

「やった！」

なのははさっきまでとは打って変わって、嬉しそうに言うと走って行った。

（あの二人の差し金か）

俺はなのはの向かう先にいる金髪の少女たちを見て瞬時に悟った。

と言うよりも、さっきから殺気を感じていたのは気のせいじゃなかったのか。

と言うことで俺達は今プールにいる。

「ちょっと聞いているの？」

「ん？」

どうやら長い間考えに耽っていたらしい。

見ればちよつと頬を膨らませている三人がいた。

ちなみにアリサの水着は赤っぱいなぜかビキニタイプ、鈴鹿のは青色のこれまたなぜかビキニタイプ、そしてなのは白のまたまたビキニタイプの水着だ。

「だから私たちの水着が 似合ってんじゃないの？ あんた、それだけの」

僕のコメントに今度は三人ともが、怒っている表情をしていた。

「そう言われてもな、まさかお前たちは『オー、君の水着はまるでバラのように美しいよマドモアゼル』とか言わせる気か？」

『……………』

いや、仮定の話で顔を赤くされると、逆にこっちが困るんだが。

「っ……！（この殺気は……！）」

そんな時に感じた殺気にその元をたどると、そこにいたのは。

「はい、危ないですから気を付けてくださいね（キッ）」  
ライフセーバをやっている恭也さんだった。

器用にも注意をしながら俺だけに向けて殺気を放つという、無駄なスキルまで使っていた。

「あ、お兄ちゃん」

「本当だ、恭也さんだ」

恭也さんに気付いたなのは達が、恭也さんの元に向かう。

俺はそんな三人から少し距離を取っていた。

(ここがプールなのか)

と言うのは少しばかり”プール”とやらを見たかったからだ。  
なのはの誘いを受けたのも、多少はこれが理由だ。

知識では知っているが、実物を見たことがないので、こづいづのも  
また勉強になる。

(それに水なのに暖かい……所謂温水プールというものか)

「隆介〜！そんなところでぼさつとしてないでこっちに来なさい  
！！」

どうやらアリサ達のお呼びのようだ。

僕は手を振り返すと、三人の元へと向かった。

「っ！！？」

しばらく遊んだ時だった。

「どうしたのよ？隆介」

アリサが怪訝な表情を浮かべて聞いてくるが、それ所ではない。

<隆介さん！この近くに矛盾因子が！！>

【ああ、わかってる】

ヴェネゼイラからの警告にそう返す。  
体中が固まるような感触……それが矛盾因子が現れた証拠なのだ。

(とりあえずこのままじゃまずいな)

「ちょっと、大丈夫なの?! 隆介君」

「少し、向こうで休んでくるよ」

心配そうに声をかけてきたさすがにそう告げると、後ろを見ずにそのままプールを出た。

「タイムダウン、エクステンションブロードA」

俺の呟くのと同時に周りの色がモノクロになり、動きが止まった。  
タイムダウン……これは簡単に言えば時間を止める物だ。

ブロードAが完全停止、Dが50%スローだ。  
これなら誰にも見られずに矛盾因子を消せる。

「とりあえず、ヴェネゼイラ、セットアップ」

『All, right, set up』

俺はヴェネゼイラを起動させて剣状態にさせると、あたりを見回す。  
少しずつ因子が強くなってきている。

そして因子が最強になった時。

ザバン!!

「っ!! 水中か!!」

俺は水中からの攻撃に、上空に飛翔する。



だが水面を見ても何もいない。

ザバン！！ザバン！！ザバン！！

(どうやら水中でないと全ての行動が出来ないようだな)

立て続けに水中から攻撃する矛盾因子を見てそう踏んだ。

向こうはかなり素早く動き回っている。

しかし、対処なんて簡単だ。

「フォトンランサー……ファイアー！！」

俺はフェイトの魔法でもある”フォトンランサー”を水面に打ち出した。

これは雷系。

そしてここには水がふんだんにある

水は媒体だ。

そのため電撃を水面に向けて放てば、そこにいるすべての人物が感電する。

それは矛盾因子も当てはまる。

「ちよろいもんだな」

水面にぶかぶかと浮いている矛盾因子の元に近づきながらそう呟いた。

そして俺は躊躇なく浮かび上がっている矛盾因子を斬ったのだった。

「にしても、思わぬお小遣いがあったもんだ」

俺は手の中にある世界のかけらを見ながら、呟いた。

『ですね。それでは、隆介さん、タイムダウンを解除しますね』  
「了解」

ヴェネゼイラが待機状態に戻るのと同時に、時間の流れが正常に戻った。

何だか上半身が寒く感じるが、まあいいだろう。

「お待たせ」

「もう平気なの？」

俺が戻ってきたことに驚く三人に平気なことをアピールした。まあ時間にしてわずか1分程度だから驚くのも無理はない。

「ね、ねえもう上がらない？」

「う、うん。そうだね」

すると、すずかとアリサの二人がぶるぶると震えだした。

「どうしたの二人とも？と言うよりなのはもかい?!」

いや、なのはだけじゃない。

プールにいた全員がなのは達と同じように体を震わせていたのだ。

「何だか、体がびりびりとしびれるような……隆介君は平気なの？」

「あ、ああ俺は平気だけど（まさか）」

俺は一つだけ思い当たることがあった。

さっきのフォトンランサーだ。

俺のタイムダウンは時間を止めることはできても、停止中に起こった現象はもう一度動かしたのと同時に伝わってしまうのだ。

今の全員の体がしびれているのも、それが原因だ。

見れば、全員がプールから出ていた。

『皆さん！！プールから出てください！！これより総点検を開始いたします！！！！』

しかも総点検まで始めるほどの騒ぎになってしまった。

(「い、ごめんなさい」)

俺は心の中で従業員の人に謝った。

こうして、俺の初めてのプールは、とんでもない幕引きで終わりを告げるのであった。

ちなみに余談だが、今回の騒ぎでプールはしばらくの間休業となり対策が練られたのだとか。

そして前より確実な信頼性を持てるようになったとのことだったので、結果を見ればよかったのかもしれない。

第27話 プール、それは欲望と矛盾の塊？（後書き）

今回のお話はいかがでしたでしょうか？

次回からは予告通りA・S編へと突入します。

それでは、次回でお会いしましょう。

**第28話 始まりは優しさから(前書き)**

連続投稿です。

今回よりA・S編スタートです。

## 第28話 始まりは優しさから

突然だが、俺は海鳴市にある図書館に來ている。  
理由としては、少しでも知識を取り入れたいからだ。

なんせ本は先人たちの書いた知恵袋なのだから。  
ちなみに今読んでいる本は、海外で語り継がれている伝説に関する  
の物だ。

こう言った物でも、非常に為になる。

まあ、内容は全て英語なのだが、この俺には全く問題はない。  
そんな時だった。

「ん？」

「ん~~~~ん~~~~ん~~~~!!」

突然聞こえてきた声の方を見るとそこには、高い所にある本を取  
ろうと必死に手を伸ばしている、車いすに乗った少女がいた。

(見過ごすわけにはいかないよな)

俺はそう思い、その少女の横に行くと、一生懸命に取ろうとしてい  
た本を取って少女の前り差し出した。

「ふえ？」

「君が取りたかったのは、この本でいいのかな？」

突然の事に、少女は驚いた様子で俺を見ていた。

「あ、はい。ありがとうございます」

その少女は栗色の髪をした少女だった。  
というより、明らかにアクセントがおかしい。  
これはいわゆる関西弁と言うものか。

「いや、困った時はお互い様だ。ついでだしもし他に取って欲しい  
本とかがあったら取るけど、あるかな？」

「えっと、それじゃお願いします」

そんなこんなで、俺は少女が本を取るのを手伝う事にした。

俺は現在図書館の外にいる。

夕日が俺達を照らしている。

「今日は本当にありがとうございます」

「さっきも言ったけど別にお礼を言われるようなことはしてない。

……ところで、だ」

「？なんや？」

俺はさっきからずっと言いたかった疑問を口にすることにした。

「なぜに俺は、あなたの車いす押しをしているんでしょうか？」

ごく自然な形で、俺が押している事に疑問を抱いていた。

ただあまりにも自然だったため、疑問を口に出ることが出来なかつ

ただ。

「こんな可愛い美少女を、一人で返すわけにはいかへんやろ？」

「……………なんだか今猛烈に、この手を離したくなった」

「うちが悪かったさかい！！謝るから手離さんといてや！！」

俺の呟きに少女が、ものすごい勢いで謝ってくる。

「良いじゃない。今ならもれなくジェットコースターの体験が出来るぞ？」

「んなもん体験しとぅないわ！！」

ちなみに今現在、ものすごい急坂（下り）の途中だ。

「まあ、それは置いてだ。君の家は一体どこだ？さっきからこっち、こっちと言ってるけど」

「うーんと、もう少し先や」

という事で、俺は少女を家まで送り届けている最中だった。

ちなみに今進んでいる方向は、俺の家のある場所と同じ方向だ。

「あ、ここや」

しばらく歩くと、とある一軒家の前で少女がそう言った。

「あれ？あんたの家ここか？」



「そつやよ。どうかしたん？」

俺は驚いて少女に聞いた。  
なぜなら……

「ごつて、俺の家の真向かいじゃないか!？」

そつ、そこは俺の家のまん前だったのだ。  
全く気付かなかった。

「ええー!？そ、それじゃ、お向かいさんに引越してきた人って  
言うのは……」

俺の言葉に少女も驚いた様子だった。

「俺……だな」  
「……………」

あまりの事に少女は固まっている。  
まあ、当然だろうな。

「そつや！もしよかったらお茶でもどうや？本を取ってくれたお礼  
もしたいし」

「……………そつだな。お言葉に甘えるところかな」

こうして俺は少女の家へと、お邪魔する事になった。

「そんなら、ちょっと待つとつてな」

「どうも、ご丁寧に」

俺はリビングのテーブルに着くと辺りを見回す。

「そう言えば、君の親御さんは？」

「あ、私は、八神はやて言います」

「八神はやてか……良い名前だね。俺は鈴木隆介だ、よろしくな八神さん」

彼女から名前を聞いた俺は、自分の名前を名乗った。

「あ、ありがとな、隆介君ノノそれと、うちのことははやてでええよ。うちも隆介君と呼ぶさかい」

海鳴市の人間は名前で呼び合うのが流行っているのかと思いつつながら、俺はもう一度同じ質問をする事にした。

「それで、ご両親は」

「あ、えっと。私が小さいころに交通事故で」

俺の問いかけに悲しげな表情で答えた。

「悪い、変な事を聞いたな」

「あ、気にせんといて。そう言えば隆介君のご両親は？」

「はやてと同じだな」

「あ、その……」

俺達の間には再び変な沈黙が訪れる。

「あー！この話はおしまいだ！ー！」

「そ、そっやな！ー！」

強引に話題を変えると、俺達は話をし続けるのだった。

「もうこんな時間や」

「本当だ……っっていうよりかなり話しこんだな」

辺りを見回すと、すでに暗くなっていた。

「それじゃ、俺はこれで失礼するよ」

「せや！隆介君、夕食一緒に食べへんか？」

「いや、あまり世話になるわけにはいかないし」

はやての誘いを俺は断った。

さすがにそこまでやってもらうのも気が引ける。

「気にせんでええよ」

「いや、はやてが気にしなくても俺が 気にせんでええよ いやだ

から、はやてが 気にせんでええよ いや、だ 気にせんでええよ

……… お願いします」

「はい」

はやてのしつこいアプローチに負け、俺は結局夕食をこちそうになる事にした。

「隆介君、何かリクエストある？」

「そつだね…… 和食でもお願いしようかな」

日本人たるもの、料理の腕は和食で出る。  
お手並み拝見と行きましようかね  
つて、俺は一体なに様なんだろう？

（まあ、神様で正しいのかな？）

そんな事を思いながら俺は料理が完成するのを待つのであった。

「お待たせ」

「お〜」

はやての作った料理に、俺は思わず感嘆の声を上げる。  
はやての料理は、一言で言くと芸術品だった。

「それじゃあ……」

「「いただきます！」」

そして俺ははやてと夕食を取るのだった。  
ちなみに、見た目だけでなく味もおいしかった。

「はやて、皿洗い終わったよ」

「ありがとな、隆介君」

夕食の後、俺は皿洗いを手伝っていた。  
これくらいはしないとな。

「そっや！隆介君」

「今度は何だ？」

俺はこの後のはやての提案に、思わず固まる事になった。

「い、一緒にお風呂に入ろう／＼！」

「……………」

いきなりこの子は何を言い出すんだ？

しかも顔を赤くしながら。

「ほ、ほら、うちって足が不自由やる？だから手伝って欲しいんや」

「本当は？」

俺は軽く鎌をかけてみる事にした。

「隆介君と一緒に洗いつこがしたいんや！！……………ってもうたあ！  
？」

本心を口に出したはやてが慌てるが、もう遅い。

「……………はやて」

「な、なんや？隆介君」

半分ひきつっているはやてに、俺は殺気を放ちながら問答無用で言

い放つ。

「このフライパンでタコ殴りにされるのと、一人でお風呂に入るのとどっちが　一人で入ります!!　うんそれがいい……ってはや!?」

俺が気付いたころには、はやてはすでにお風呂に入っていた。

「俺もお風呂に入りますか」

そして俺は、すぐに家に戻り、お風呂に入った。

お風呂に入り、普段着をもう一度着て八神家のリビングに向かった俺は、はやてがお風呂から出てくるのを待った。

「隆介君、一緒に寝よう／＼」

そして今のは、はやてがお風呂からあがってきて最初に言った言葉だったりする。

しかも顔を赤くして。

「……………分かった」

「へ!?ほ、本当にええの?!」

俺の答えが意外だったのか、はやては驚きながら聞いてくる。

「まあな、そのくらいだったら構わないし、それに……」  
「それに？」

「……何でもない。夜も遅いし早く寝よう」

俺は紛らわすようにはやてに言った。

(それに、一人の寂しさは良く分かるからな)

それは俺が前から密かに感じていたコンプレックスだった。  
彼女にだけはあんな思いをしてほしくはない。

「それじゃ、隆介君。部屋まで運んでね」

ね じゃねえよ。

「はあ……はいはい、分かりましたよ」と

俺はため息をつきながら答えると、はやての膝に片手を入れ、もう  
片方の手を腰の方に入れて持ち上げた。

所謂お姫様だつこと言うものだ。

そして俺は、はやてを部屋まで運んだのだった。

「隆介君は、そこでええの？」

「ああ、ここで寝かせて貰う」

今俺は、はやての部屋のベッドの横の床に横になっていた。

「む。それじゃ、お休み」

「はい、おやすみ」

そして俺は眠りに着いた。

(そう言えば、人の家で寝るなんて初めてだよな)

そんな事を考えながら。

はやてSide

「……………」

私はなかなか寝付けませんでした。  
その理由は…………。

(今日はとても賑やかやったな)

私はふと、床に寝る隆介君を見た。

「すう…………すう」

隆介君は、静かに眠っていた。

(なんや、まるで家族みたいや)



私はそう思いました。

「家族……か」

物心ついた時から、私には家族と言う人は誰もいませんでした。  
毎月仕送りしてくるのは親戚のおじさんくらいしか、私には知っている人はいません。

(……………はよ寝よか)

私は考えるのをやめて、寝る事にしました。

S i d e o u t

**第28話 始まりは優しさから（後書き）**

いかがでしたでしょうか？

さて、次回はいよいよあの人物たちの登場です。

ちなみに次回の更新は長くても1か月後になりそうです。

それでは、次回でお会いしましょう。

## 第29話 動き始める歯車（前書き）

更新に時間がかかりすみません。  
本作の、最新話です。

## 第29話 動き始める歯車

はやてと知り合ってから、1週間が過ぎた。

まあ色々あった1週間だった。

はやてを病院に連れていったり、夕食を作ったり作って貰ったり上げたりなどなど。

その何気ない日々が楽しくて仕方がなかった。

そんなある日の事、俺ははやての定期診断で病院に行った時のことだった。

「明日がはやての誕生日!？」

はやての病状についてなどの説明を受けた後に、教えられた事実には俺は思わず声を上げてしまった。

「そうなんだけど……やっぱり言っただけだったのね」

ため息交じりに言う女性は、はやての主治医でもある石田先生だ。

「まあ、自分の誕生日なんて普通は言いたがらないですからね。特に彼女は」

彼女としばらく一緒にいた為か、性格などが少しだけだが、分かったような気がしてきた。

そんな俺だから、そう断言できるのだ。

「それでしたら、はやてを驚かしてやりたいので、このことを話したことは内緒と言う事で」

「はい、分かりました」

俺の無理なお願いに、石田先生は快く賛同してくれた。

「本当に変わりましたね」

「はい？」

「はやてちゃんです。今までは、あそこまで楽しそうではありませんでした。隆介君には本当に、感謝しています」

俺は嬉しそうに話す石田先生を前に、少しだけ驚いた。

「そ、そんな……大したことはしていませんよ」

「ふふ。そうですね」

ようやくからかわれた事に気付いた俺は、一目散に診察室を後にした。

(それにしても、はやてへの誕生日プレゼントはどうしようか……)

俺は、はやての待つ受付まで行く道中、それを考えていたのであった。

その日の夜だった。

いつものように夕食を終え、俺は食器を洗っていた

「はやてー、こっち時間がかかりそうだから先にお風呂に入ってい

いぞ〜」

「いやや、今日こそうちは隆介と入る」

俺の言葉に、はやてはそう言ってお風呂に入ろうとしない。

(はあ)

心の中でため息をついた。

この1週間毎日のようにこのやり取りをしている。

「……………理由を聞かせてもらおうか？」

「ほら、うち足がダメやさかい……………ダメ？」

「……………一生の地獄を味わってもいいんなら構わないけど」

俺の一言に、はやてがびくっと震えたのが分かった。

「き、今日も一人で入ろうかな〜」

はやてはそう言って逃げるようにリビングを後にした。

ちなみに最初の時は効果がなかったので、軽く殺気を放ったら、その後は十分に効果が発揮された。

そんな事を思いながら俺は、食器の後片付けを続けるのであった。

「隆介、一緒に寝よや〜」

夜、パジャマを着たはやてが俺にそう言いだした。

「……………何だかいろんな意味で間違っている気はするんだが」  
「ええやないか。今日は一緒に寝よう」

さすがに断ろうとも思ったが、たまにはいいかと思いはやての要求を呑むことにした。

後にひどい目に合うことになるとも知らずに。

「ムフフ〜隆介はやっぱり暖かいな〜」

「……………そうか？」

今までそのようなことは言われたことがないので、はやての言葉にはかなり違和感を感じた。

「そうやで〜……………そういえば隆介のご両親は、今どこにおるん？」

はやてが声のトーンを下げて聞いてきた。

別に彼女に悪気はないのだろう。

……………まあ、はやてに背を向けているのでよくわからないが。

「さあ」

「あ……………ごめんな。つらいこと聞いて」

「気にすんな。親のことなんてちっとも覚えていないから悲しくもないし」

はやてに言ったことは本当だ。

俺には元々両親はいなかった。

それは、前世でも同じだった。

だからこそ、ちっとも悲しいという心はない。

「ふわあ〜。ちょっと疲れたから先に寝るけど、はやても読書はほ  
どほどにして早く寝るんだぞ〜」

俺ははやてに声をかけて眠りについた。

「闇の書の起動を確認しました」  
そんな言葉が聞こえたような気がした。



第30話 勘違いは命の危機をもたらす（前書き）

連続投稿2話目です。

### 第30話 勘違いは命の危機をもたらす

3人称Side

隆介が寝てから少し経った時だった。

「あ、もうこんな時間」

今まで本を読んでいたはやては時計を確認した。

時刻はすでに0時に差し掛かるうとしていた。

なのではやてはベッドライトを消し、眠りにつこうとした。

しかし、突然部屋が明るくなったため、はやてはその明かりを発している本棚のほうを見た。

光っていたのは、はやてが生まれた時からそばにあった一冊の本だった。

「きゃ!？」

突然の揺れにはやては短い悲鳴を上げた。

すると、光の発生源である本がひとりで浮かび上がり、はやての前へと移動した。

「あ……ああ……」

はやては突然のことに声が出なかった。

しかし、ゆっくりと後ろの方に後ずさる。

(そ、そうや!隆介に助けを!!)

はやては後ろで一緒に寝ていた隆介に、助けを求めようとした。  
しかし……

「スー……スー……」

隆介は地面が揺れているにも拘らずに、いまだにすやすやと寝ていた。

(ア、アカン……)

はやては隆介に助けを求めるのを諦めた。

そうこうしている間にも、浮かび上がる本は表紙に何か浮き出ている。  
いた。

やがて、本が開かないようにしている鎖が壊れ、本が開いた。

『封印を解除します』

ひとりでにページがめくれていく中で、突然声が発せられる。

やがてページをめくり終わると、ひとりでに本が閉じはやての視線に本が下がった。

彼女は恐怖のあまりに声も出ずにその場に留まっているだけだった。

『起動』

声と同時に、本から白銀の光が発せられ、はやての体から水色の球体が出てきた。

その球体が本の前に浮かぶと眩しい光が発せられ、はやてはその光に思わず目を閉じた。

そして目を開けたはやてが見たのは……

床に展開された紫色の魔法陣と

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にてございます」

金髪の髪をした女性にピンク色の髪をした女性、さらには赤髪の少女そして銀髪の頭に耳を生やし、体格のいい男の4人だった。

「夜天の主のもとに集いし雲ー」

「ヴォルケンリッター、何なりとご命令を」

4人は地面に膝をつけてただ、主の言葉を待つ。

しかし、いつまでたってもその人物の声が聞こえない。

そのことを不審に思った赤髪の少女が徐に立ち上がり、”主”であるはやての方へと向かった。

【ねえ、ちょっとちょっと】

【ヴィータちゃん、しー】

いち早く彼女の異変に気付いた少女が、念話で3人に話しかける。

【でもさ】

【黙っている。主の前で無礼は許されん】

少女の念話に、金髪の女性とピンク色の髪をした女性が注意をする。

【無礼ってかさ、こいつ……気絶しているように見えるんだけど】  
「嘘!？」

あまりのことに、金髪の女性は声を出して驚いていた。  
これが、闇の書事件の始まりとなった。

Side out

??? Side

私は主が気絶されているため、どうすればいいかを考えていた。

「ん？誰だ」

その時、私は主とともに眠っている男に気付いた。  
男をよく見ると、只者ではない何かを感じた。

「シャル！この男を縛れ！！！」

「は、はい！！！」

だから私はシャルに男を縛るように指示を出した。  
一瞬にして男にバインドがかけられる。

「んう？一体なんだよお」

「……っ！！！」

目が覚めたのか何かを呟きながら、男は動き始めた。

私たちは素早くデバイスを構え臨戦態勢に入った。

S i d e o u t

「シャ　　れ!!」  
「　　い!!」

俺の耳に知らない人物の声が聞こえてきた。

俺はそんな声よりも、寝る方を選びそのまま眠ようとしていると、いきなり体が拘束された。

「んう？　一体なんだよお」  
「……っ!!!!」

俺は眠い目のまま声のした方を見た。

最初にはやてが明かりでもかけて、俺を縛りつけたのかと思っていた。

しかし少しずつ眠気が取れていき、目を開けると目の前にあったのは……

武器を構えている3人の女性と一人の男だった。

「……なんなんだ？　これは」

とりあえず声に出たのはそれだった。

するといきなりピンク色の髪をした女性が手にする剣のようなものが、首筋に向けられた。

「貴様、何者だ？」

「はあ……それはまずそつちが答えるべきではないか？」

俺はため息交じりに、ピンク色の髪をした女性に答えた。

「俺ははやての友人だ……たぶん。今日はたまたま泊まらせて貰っている。これで満足か？」

「悪いが、信じることはできないな。貴様から凄まじい魔力を感じている」

女性の言葉に俺はため息をつきながら答える。  
いまだに俺の首筋に刀が突きつけられていた。

「さては貴様！主の命を狙うものか！！」

「んなわけあるか！！俺はなあ、こいつとつと潰していいか？  
ーって、人の話は最後まで聞けよ！！！」

結局この命の危機は、気絶していたはやてが回復するまで続いた。  
なんだって俺がこんな目に……。

第31話 やっぱり平和が一番(前書き)

連続投稿ラストです。



### 第31話 やっぱり平和が一番

命の危機にさらされた俺は、あの後意識を取り戻したはやてを交えて、事情説明となった。

「それにしても、隆介君も魔法使いなんやね。驚いたわ」

「あ、あははは……」

はずだったのだが、俺が魔法使いだと言う事がばれていた。原因なんて、とっくにわかっていた。今俺の目の前にいる4人組の人物だ。

「さつきは本当にすまなかった」

「いや、生きているだけでも幸せだ」

ピンク色の髪をした女性 シグナムさんだがーの謝罪に俺はそう答えるしかなかった。

彼女たちにやられまいと浮遊魔法などを使って、必死に逃げているからだ。

というよりも軽くさつきは死にかけた。

「そつか……この子が闇の魔導書つてもんなんやね」

「はい」

はやての言葉に、シグナムさんが答える。  
なぜかシグナムさん達は跪いた。

「物心ついた時には、棚にあったんよ。綺麗な本やから大事にはしてたんやけど……」

「覚醒の時と眠っている間に、闇の書の声聞きませんでしたか？」

「うーん、私魔法使いとちゃうから漠然とやったけど…あ、あった」

シヤマルさんの問いかけに、はやては何かを探しながら答える。

「分かったことが1つある。闇の書の主として、守護騎士みんなの衣食住、きつちり面倒みなあかんゆうことや。幸い住むところはあ  
るし、料理は得意や。みんなのお洋服買ってくるから、サイズはか  
らせてな」

そう言っではやては何処からかメジャーを取り出した。

それを見た俺達は、固まっているだけだった。

「それじゃ、隆介君、お使い頼める？」

「ああ、分かった」

時間的には、もうすでに11時。

はやて達の意識が戻ったのが、朝の8時。

シグナム達から闇の書についての説明を、聞き終えたのが10時3  
0分。

あれ……俺って2、3時間しか寝てないような……。

という事で、俺ははやてに見送られる様にして、服を買いに行くの  
だった。

「ありがとうございます」

適当に見つくること6分、僕はデパートを後にしていた。

（なんで僕が女性ものの服を……）

別に女性ものの服を買う事に、抵抗があるわけではない。

俺ぐらいの年ならば、母親へのプレゼントと取ってくれる事があるからだ。

しかし、そんな事では言いきれない物が混ざっていた。

そう買う物の中に、下着が含まれていたのが、一番悩まされたのだ。

しかも今の店員、完全に俺のこと変態を見るような目をしてた。

（まあ、そうなってもいいために変装してしかも町より100キロ離れた場所のお店にしたんだから）

どうやってって？

転移魔法を数回に分けて繰り返したただけだ。

全く持って無駄な労力だった。

「はい買ってきたよ」

「ほ、本当に買ってきたのか……」

40分で帰ってきた俺に驚きの声が掛けられた。

「それにしても、本当に女性ものの服を買ってくるなんて……」冗談のつもりやったんだけど」

「はやて!! あんたという奴は!!」

「はいはい。シグナム達が着替えるさかい、外に行つてな」

はやての苦笑いを浮かべながらの言葉に、僕は一言文句を言おうとしたが、そのはやてによつて、リビングから追い出された。ちなみに、ザフィーラさんは、服を着たがらなかった。なぜ？

「俺には服は合わん」

らしい。

「さあ出来た。食べようか」

「うわ……今日は豪華だな」

「それじゃ、いただきます」

「」「いただきます」「」

夕食のとき、俺達は豪華な料理を前に、手を合わせた。

シグナムさん達も、はやてに合わせてるように手を合わせる。

「ヴィ、ヴィータ……箸の持ち方が違うよ」

「うるせえな! これでいいだろ!!」

俺の指摘にヴィータが突っかかって来る。

「分かった分かった。楽しい食事の時間だ。喧嘩をするのは駄目だ。箸の使い方くらいあとで教える」

とりあえずは、丸く収めて俺も料理に手を付けた。

「やっぱりおいしい」

「ふふふ。ありがと、隆介君」

「……おかわり」

「はい」

ヴィータの催促に、はやては笑顔で答えた。  
やっぱり家族が増えた事が、よほど嬉しかったのだろう。

「騎士甲冑？」

翌日、俺とシャマル、シグナム（彼女達曰くさん付けは不要とのこと）は図書館にやってきていた。

「ええ。我らは武器は持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません」

「自分の魔力で作りますから、形状をイメージしてくださいれば」

「そっか。せやけど、私はみんなを戦わせたりせえへんから…」

はやてはしばらく唸る様に考えると、パツと顔を上げた。

「あ、服でええか？騎士らしい服、な？」

「ええ、構いません」

「ほんなら資料探してカッコいいの考えてあげなな」

はやてはご機嫌になって甲冑のデザインを考えていた。

「……」

そんな時にやってきたのが、何故か玩具店だった。

「ええからええから。こういうところにこそそれらしい材料が…な？」

「なるほど」

(……まあいいか)

僕は色々突っ込みたかったが、黙ってはやて達に付いて行った。

「ヴィータちゃん、どうしたの？ヴィータちゃん？」

そんな中、ヴィータは陳列棚の何かを、じっと見ていた。

(あれって、ウサギのぬいぐるみか?)

僕はすぐにそれが何かを感じ取ると、何処からか視線を感じた。

「……(隆介君、ヴィータに内緒であのぬいぐるみを買ってくれへん?)」

「……(分かった)」

視線を送っていたのははやてであったが、なぜだか彼女の視線が僕にそう告げているように思えた。

だからこそ俺も、視線でそう返答したのだ。

その後、玩具店を後にし、はやての家へと向かう。

「いい風ですね……」

俺達は、夕焼けの中海沿いの道を歩いていた。

「ホンマや」

「お天気もいいですし」

「絶好のお散歩日和やな」

俺とヴィータは前で、楽しそうに話すシャマルとはやてを見ていた。

「ヴィータ」

「ん?」

「もっ袋から出してもええで」

はやての言葉に、ヴィータは不思議そうに袋の中に手を入れた。

「うわ〜……」

その中身は僕がさっきこっそりと買った、ウサギのようなぬいぐるみだった。

「はやて！あり」

ヴィータがお礼を言おうとした時には、すでにはやて達は先の方にいた。

それを見たヴィータは笑いながら、はやて達を追いかけて行った。

「隆介君も、早く！」

「はいはい」

俺も、はやて達に追い付くように走った。

その日の夜の事、はやてはシグナムに抱き抱えられながら庭の方に出ていた。

「うわあ　綺麗……」

今日は天気がよかったのか、空には星がいっぱいだった。



「主はやて。本当に良いのですか？」

シグナムが突然口を開く。

「何が？」

「闇の書の事です…あなたの命あらば我々はすぐにも闇の書のページを蒐集し、あなたは大きいなる力を得る事が出来ます。この足も治るはずですよ」

足が治る…それははやてにとっては願ってもいなかった事だろう…しかし。

「あかんで。闇の書のページを集めるにはいろんな人にご迷惑をかけせなあかんのやろ？」

そんなのはあかん。自分の身勝手に人に迷惑かけるのは良くない。わたしは、今のままでも十分幸せや…父さん母さんはもうお星さまやけど、遺産の管理とかはおじさんがちゃんとしてくれる」

「お父上の御友人…でしたか？」

はやての言葉にシグナムが相槌を打った。

「うん お陰で生活に困ることもないし…それになにより…今はみんながおるからな」

そしてはやては、シグナムに抱き返した。

抱きつかれたシグナムは、優しい表情をはやてに向けていた。

俺はそんな微笑ましい光景を、リビングで見っていた。

「はやて！」

そんな時、ヴィータがばたばたとはやてとシグナムがいる庭の前まで、駆けてきた。

「ん？ああ、どないしたヴィータ？」

「はやて、冷凍庫のアイス食べていい？」

「お前：夕食をあれだけ食べてまだ食うのか？」

ヴィータのおねだりに、シグナムが呆れたような表情を浮かべる。

「うるせーな、育ち盛りなんだよ！はやてのご飯はギガつまだしな」

(……………)

俺はヴィータの反論に、なにも言えなかった。

「しゃあないな…ちょっとだけやで」

「お〜」

許しが出たヴィータは、走る様に冷蔵庫に向かって行った。

「…………シグナム」

「はい？」

「シグナムはみんなのリーダーやから…………約束してな」

「はい？」

「現マスター八神はやては…………闇の書にはな〜んも望みない。私がマスターでいる間は闇の書の事は忘れて…………みんなのお仕事は家で一緒に仲良く暮らすこと…………それだけや。約束できる？」

「誓います。騎士の剣にかけて」

はやての言葉に、シグナムはしばらく考えると、はやてにそう約束をした。

(さて、俺はこっちの方でも見てるか)

庭の方から視線を外した先にいるのは……

「  
」

ものすごい上機嫌で、アイスを食べているヴィータだった。

「育ち盛り……ね」

「っ！？な、なんだよ！！文句があんのかよ！！」

俺の意味深の言葉に、ヴィータが突っかかって来る。

「いいえ、別に」

「嘘だ！！その目は文句があると言ってる！！！！」

以外に鋭いな〜と思いつつ俺は好物のイチゴケーキを一口食べた。

「へへ、いただき！！」

「な！？ヴィータ！！何をする！！」

いきなり食べかけのイチゴケーキを奪ったヴィータを、睨みつける。

「こつすんのさ、あむ……うん、おいしい」

「あゝっ!!?この野郎!!それは限定10個販売の激レアイチゴケーキ!!買ったために転移魔法を使って苦労して買ったやつなんだ!!返せ!!俺のケーキを返せええ!!!!!!」

俺はヴィータの胸ぐらをつかんでがむしゃらに揺さぶっていた。

結局この後、騒ぎを聞きつけてやってきたはやて達に引きはがされた後、俺とヴィータはこつてりと絞られることになった。

…… 本当に一体俺が何をしたんだよ。

**第31話 やっぱり平和が一番（後書き）**

次の更新は約一か月後です。

温かい目で待って頂ければ幸いです。

それでは、次回でお会いしましょう

第32話 日常が終わるとき(前書き)

お久しぶりです。

約2か月の放置すみませんでした。

第32話になります。

### 第32話 日常が終わるとき

（海鳴大学病院）

シグナム達が現れてから約五カ月後の11月27日。

この日は、はやての定期検診のため、病院に来ていた。

「命の…危険？」

「はやてちゃんが？」

石田先生に告げられた事実には、シャルマル達は驚きを隠せなかった。

「……ええ…はやてちゃんの足は原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、この半年で麻痺が少しずつ上に進んでいるんです。

この二ヶ月は…特に顕著で……このままでは…内臓機能の麻痺まで発展する危険性があるんです」

「っ!？」

石田先生の言葉に俺は、思わず息を呑んだ。

ガン!!

「何故……何故気付かなかった!」

診察室を出ると、シグナムは突然壁を叩きつけ、苛立ちをあらわにした。

「ごめ……ごめんなさい……私」

「お前にじゃない!自分に言ってるんだ……」

シグナムのその表情からは気付けなかった自分への怒りなのか、それとも自分の無力を呪っていたのかは分からなかった。

そう、はやてのそれは、病気などではなかった。

それは、闇の書による呪い。

はやてが生まれた時からすでに存在していた闇の書は、その主であるはやてと密接につながっていた。

闇の所が秘める強大な魔力は、未成熟状態のリンカーコアだけではなく、はやての体までもを蝕んで行き、健全な肉体機能どころか、生命活動さえも阻害していた。

それが、はやての足の麻痺であった。

そして、第一の覚醒……シグナム達が現れるようになってからその呪いは一気に加速した。

シグナムやシャマル達の守護騎士達が少なからずはやての魔力を使っている事がその要因の一つでもあった。

<シグナムさん達、動きますね>

(ああ。俺も動かないとな)

ヴェネゼイラの言葉に俺はそう答えた。



その日の夜、家を抜け出すシグナム達を、俺は隠れるようにして後を付けて行った。

そして、到着したのは病院の屋上であった。

「主の身体を蝕んでいるのは……闇の書の呪い」

「はやてちゃんが闇の書の主として、真の覚醒を得れば！」

シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータの4人が正方形の形に立っているのが見えた。

「我らの主の病は消える……少なくとも……進みは止まる！」

「はやての未来を血で汚したくないから人殺しはしない……だけど、それ以外なら何だってする！」

シグナムが剣を一振りした瞬間、紫色の魔法陣が現れ、シグナム達は騎士甲冑の姿になって言った。

「我らの不義理を……お許し下さい！」

「何をやってんだ？ お前ら」

俺は屋上の陰から、シグナム達の前に姿を現した。

「鈴木！？ なぜここに」

「なぜって、あんたらがこっそりと抜け出すのを見てたからな」

俺は呆れながら答えると、シグナム達を見た。

（うわ、かなり警戒されてるぞ）

「申し訳ないが、止めても無駄だ。これは主はやての為  
誰が止めると言った？」

シグナムの言葉を遮った俺の言葉に、全員が目を細めた。

「はやては俺にとっては家族同然だ。そんなはやての命の危機に何  
もしないなんて俺は嫌だね。だからこそ、俺も手伝わせて貰う」  
「でも、隆介君……私達のやろうとしている事は、犯罪なのよ？」

シャマルが心配そうな様子で俺に言葉を掛ける。

「だからと言って仮にも家族であるはやてを見殺しに出来るわけが  
ないだろ！！」

「分かった。シャマル達もそれで構わぬか？」

「はい。私も隆介君を信じます」

「あたしもだ。はやてが助かるんなら何だってやる！！」  
「俺も同じだ」

シグナムの確認に、全員が賛同してくれた。

「皆、ありがとう」

「何、礼を言うのは私の方だ。但しもう引き返せぬ。それでもやる  
と言うのだな」

シグナムの言葉に、俺は無言で頷いた。

さて、話は纏まったわけだが……。

「それじゃ、今日はもう遅いし蒐集は明日からにしよう」  
「うむ。そうだな」

俺の提案にシグナム達は頷くと、俺たちは屋上を後にした。

### 第33話 蒐集開始（前書き）

さて第33話です。

いよいよ蒐集作業が本格的に始まります。

### 第33話 蒐集開始

翌日、俺は一面砂漠の世界に来ていた。

「ここは……砂漠？」

「うむ。鈴木の実際に見させてもらおうと思ったのでな。お前には実戦をして貰おう」

シグナムが表情を崩さずに言った瞬間だった。

「グオオオオオ!!」

突然砂漠から変な怪物が姿を現した。

「これが対象か」

「そうだ。鈴木にはこれを倒して貰いたい」

俺の言葉に、シグナムが肯定した。

「了解。んじゃま、ぱっぱと片づけましょうかね」

俺は背中にある相棒、ヴェネゼイラを手にした。

『行きましよう、隆介さん!!』

「グオオオオオ!!」

俺という敵を認識したのか、一直線にこっちに向かってくる。

「ふっ！」

俺はそれを軽くジャンプして交わし、代わりに魔法弾を数発放つ。

「ゴオオオオ!?」

魔法弾自体に威力が無いため、ただ単に怯ませるくらいの効果だ。

「ソニックアタック!!!」

「ゴオオオオ!!!」

俺は一気に加速して、怪物に体当たりをした。  
しかし、そんな物で終わらせない。

「切り裂け!!! 殲滅剣!!!」

僕は剣状のヴェネゼイラに魔力を纏わせ、そのまま怪物に向け数回振り下ろす。

その一撃で、怪物は倒れた。

「これで、OK?」

『……………』

俺が振り返ると、啞然としているシグナム達の姿があった。

「どっしたんだ? 固まったりして」

俺はそんなシグナム達に声を掛けた。

「いや、鈴木がそこまでとは想像もしていなかったのにな」

そう言うシグナムは、何故か笑顔だった。

若干だが、恐ろしい。

「あの、シグナムさん？　なぜに笑顔でいらっしやるのですか？」

「いや、いつか私の相手になって貰おうと思ってな」

俺の問いかけに、シグナムはまたもや笑顔で提案してくる。

「なぜ？」

「何、純粋な興味だ」

あまり納得が出来なかったが、俺は提案を呑む事にした。

俺はできれば模擬戦を行う日が来ないことを、心から祈るのであった。

その後気を取り直して、俺たちは蒐集を続けたのだった。

「えっとシグナムとザフィーラが45ページで、浩介君とヴィータちゃんが120ページ……」

「言っておくが、9割はこいつだからな！」

俺とヴィータの蒐集ページを聞いた瞬間、ヴィータがそう言つと、全員が俺の方を見た。

「まずかったか？」

「いや、まずくはない。逆に嬉しいのだが……」

「隆介が強すぎるから、驚いてんだよ!!」

シグナムとヴィータが俺にそう言ってくるが、こればかりは仕方がない。

「いや、あれでも5割の力しか出してないんだが……」

「……………」

「だから俺を変な眼で見るな!!!」

怪物しかいない砂漠の世界で、俺の叫び声が響き渡つた。

「それはそうと、魔導師からも蒐集するか？」

「確かに、魔導師ならばかなりページが稼げるだろう」



今後の蒐集について話し合っているのだが、かなり物騒な単語が聞こえる。

魔導師から蒐集すると言う事は、魔導師を襲う事になる。

「悪いが、それは却下だ。魔導師から蒐集すれば管理局が動く。完全に蒐集するために、なるべく向こうの目に留まらないようにしたい」

「……鈴木と言う事も一理あるな。わざわざ危険を冒してまで襲撃する事もないな」

俺の意見にシグナムも賛同する。

「皆もそれで構わないか？」

「ああ、あたしは別に構わない」

「我もだ」

俺の問いかけに、全員が頷いた事で方針は決定した。

(これからは忙しくなりそうだな。ほんと)

そう思いながら、俺達は砂漠の世界を後にするのであった。

### 第34話 緊急事態（前書き）

今回最後の投稿です。

ここから、闇の書事件が幕を開けます。

### 第34話 緊急事態

蒐集を始めてから数日、俺達は順調に蒐集を続けて行った。

「隆介君、前方に高い魔力を持った生物がいます」

「了解!!」

本日はシャマルと行動を共にしている。

「これでようやく300ページは行きそうね」

「そうですね」

目の前に魔法生物が倒れているのを気にせずに、シャマルと話をした。

「そう言えば、最近ヴィータちゃんが焦りだしているのが、少し不安です」

「確かに。あいつ頭に血が上ると、制止を聞きやしないからな。早まったまねをしなければいいのだが……」

俺はヴィータが人を襲うんじゃないかと、不安に思っていた。

あれは頭に血が上ると見さかいが無くなるからだ。

（まあ、あいつもそこまで馬鹿ではないんだし、そんな事はしないよな）

俺は自分でそう結論付けると、シャマルに声をかけた。

「今日はこのくらいにしておいて、そろそろ戻ろうか」

「そうですね。はやてちゃんを一人ぼっちにさせておくわけにはいきませんからね」

そして俺たちは、そう言いながら海鳴市へと戻ったのだった。

「さて、帰りましょう 隆介さん!! どうしたんだ? ヴェネゼイラ」

シヤマルと別れてはやての家に転移魔法で戻ろうとしていると、ヴェネゼイラから切羽詰まったような感じで声をかけられた。

『海鳴市内に結界が張られました!! 術者はヴィータさんです!!』

「何!?!」

俺はヴェネゼイラの言葉に、思わず大きな声で叫んだ。

あれほど人を襲うなど言っておいたのに、本当にやるとは信じられなかったのだ。

「あの馬鹿!!!!」

俺はそう毒つきながら結界のある場所へと、転送するのであった。

### 3人称Side

夜、海鳴市内上空に赤いゴスロリのような服に身を包んだ少女と、一見狼のような者達がいた。

「どうだ、ヴィータ？見つかりそうか？」

「いる様な、いない様な……こないだっから出てくる妙に巨大魔力反応……あいつが見つかれば一気に20ページくらいは行きそうなんだけどな」

肩にハンマー『ゲラ ファイゼン』を置きそう答える。

「しかし良いのか？隆介から魔導師は襲うなど、言われているが」「はやての命が掛ってんだ。そんなのを聞いている時間なんてないんだ!!」

ザフィーラの問いかけに、ヴィータはそう答えゲラ ファイゼンをさらに強く握った。

「心得た。別れて探そう。闇の書は預ける」

「オーケー。あんたもしっかり探してくれよ」

ヴィータの答えを聞いたザフィーラはそのまま飛び去って行った。

そしてヴィータはグラ　ファイゼンを前方に掲げた。  
それと同時に赤色の魔法陣が展開される。

「封鎖領域、展開」

『魔力封鎖』

ヴィータを中心に結界が展開されていき、人や車などが消えて行った。

それは、はじき出されたと言った方が正しいのかもしれないが。

「……………魔力反応！大物見つけ！！行くよ、グラーフアイゼン」

『了解』

そしてヴィータはグラーフアイゼンを構え、魔力反応のあった方向へと向かって行った。

一方結界内のビルの屋上では、なのはが辺りを注意深く見回しながら立っていた。

彼女は自宅で突然結界が張られた事に驚き、その術者が近づいている事を知って、出てきたのだ。

『来ます』

そんな時、レイジングハートの警告でなのは空を見上げた。なのはの視線の先には赤い光が一直線に突っ込んできていた。それが”人”ではない事になのはは驚く。

『誘導弾です』

レイジングハートの言葉により、なのははすぐにシールド展開し、誘導弾を防ぐ。

しかしその誘導弾は思いのほか攻撃力が高いのか、なのはは苦しげな表情を浮かべながらも誘導弾を防ぎ続ける。

「テートリヒシュラーク！」

そんな時、ヴィータは背後からなのはに奇襲を仕掛けた。

なのははすぐにヴィータにきずきもつ片方の手でヴィータの攻撃を防ごうとするが、やはり攻撃力が高く防ぎきれずにビルから落下していく。

「きゃああああー！」

落ちて行くなのはに追撃をかけようと、ヴィータはなのはを追って下降して行った。

「レイジングハート、お願い！」

『スタンバイレディ、セットアップ』

しかしなのはも負けてはおらず、落下しながらもレイジングハートを起動させた。

「ふっ！」

ヴィータはそんな物にお構いなしとばかりに、鉄球をグラ　ファイゼンで叩きつけるようにして撃った。

「おらぁぁー！」

さらに追撃をしかけるように鉄球の衝突で生じた爆煙に、グラ　フアイゼンを振りかぶる。

だが、爆煙の中からはのが飛び出し、ヴィータに向き直る。

「いきなり襲い掛かられる覚えは無いんだけど！何処の子？一体何でこんな事するの？」

ヴィータは問いかけてくるなのはの言葉を無視し、鉄球を具現化させる。

「教えてくれなきゃ、分からないってばー！！」

なのはは少し前に放っておいた誘導弾を、ヴィータの背後へと移動させて、放った。

それに気付いたヴィータは一発回避し、もう一発を防御した。

「　　ッのやろぉぉー！」

ヴィータはなのはの奇襲に激情し、なのはに攻撃を仕掛ける。

『フラッシュムーヴ』



なのはは高速飛行魔法で回避した。

『シユータイングモード』

レイジングハートはシユータイングモードに変え、なのはは上空に泊まりヴィータの方向にレイジングハートを構える。

「話しを……」

『デイバイン……』

「ッ!？」

レイジングハートに収束する魔力の大きさに、ヴィータは一瞬驚きをあらわにした。

「……聞いてってば!」

『バスター』

そしてなのははヴィータに向けてデイバインバスターを放つ。それをヴィータはぎりぎりのところで回避したが、それが帽子に当たり、ボロボロになって地面へと落ちていった。

(はやてが……はやてがくれた帽子を……よくも!!！)

その落ちて行く帽子を見たヴィータは完全に頭に血が上った。

それは、隆介が一番危惧していた事でもあった。

そして、怒りを込めた目でなのはを睨みつける。

「うあ……」

なのははその視線に、少しばかり引いた

そしてヴィータはグラーフアイゼンを構え、再度赤色の魔法陣を展開する。

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！」

『エクスプロージョン。ラケーテンフォーム』

ヴィータの指示により、グラーフアイゼンの形状が変化し先端がとがっていて、後尾にはブースターのような物がついていた。それは確実に物理攻撃力が高い事を示していた。

「ふええ！？」

なのははヴィータのハンマーの形状のあまりの変化に驚いていた。

「ラケーケン……」

グラーフアイゼンについたブースターが火を吹き、ヴィータは回転して勢いをつけ、なのはに向けてハンマーを振りかぶる。

最初の一撃は避けたが最後の一撃をなのはは防護魔法で防ぐが、グラーフアイゼンは容易に防御魔法を貫通して、そのままレイジングハートに直撃する。

そのために、レイジングハートに罅が入った。

「ハンマー！」

「キャアアアア！」

グラーフアイゼンによってなのははビルの方へと吹き飛ばされる。しかし、ヴィータは止まらずにビルの方へと向かって行った。

「ケホツ！ ケホツ！」  
「てええええええ！」

ビルの中でせき込むのはに、ヴィータはさらに攻撃を仕掛ける。

「あ!？」

グラ ファイゼンがなのはへと迫る。

『プロテクション』

レイジングハートはボロボロになりながらも、なのはを守るために障壁を自動展開するが、

「く……ぶち抜けええ！」

『了解』

ヴィータの指示によってグラ ファイゼンはさらにブーストを強くしてレイジングハートの障壁を突破し、さらにはバリアジャケットをも破壊してなのはを壁に吹き飛ばす。

「う、うう……あ……」

ようやく落ち着いたのか、ヴィータは冷静さを取り戻しカートリッジを排出するとヴィータはグラーアイゼンを握り締めてなのは近づいた。

「……………」

なのは意識が朦朧した状態でもなおヴィータにレイジングハートを向けた。

だが、ヴィータはなのはを見降ろしグラ ファイゼンを振り、とどめを刺そうとした。

だが、それは何かによって阻まれる。

それは黒い斧を思わせるデバイスを持つ少女……フェイトとバルデイッシュによる物だった。

「ごめんなのは、遅くなった」

ユーノがなのはの肩に手を置いた。

「ユーノ……君？」

「仲間か!？」

ヴィータは後ろに後退しながら、焦りの色を出していた。

フェイトはバルデイッシュを、サイスフォームへと変化させヴィータに向ける。

「友達だ」

ヴィータは再び気を引き締めると、グラ ファイゼンを構えた。

「民間人への魔法攻撃。軽犯罪では済まない罪だ」

「あんだテメー？管理局の魔導師か？」

ヴィータがフェイトに突っかかる。

「时空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ。抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解除して」

「誰がするかよ!!!」

フェイトの勧告にも耳を貸さず、ヴィータは飛び去ろうとする。

「はい、そこまでだ!!!」

突然の声に、全員が驚きの表情を浮かべる。

その人物は、銀色の髪に白銀のバリアジャケットに身を包んだ隆介であった。

S i d e o u t

### 第35話 悪化する状況（前書き）

大変お待たせしました。  
第35話です。

### 第35話 悪化する状況

ヴェネゼイラの警告を聞き、俺は猛スピードで結界内に入り込んだ。

『グイータさん、かなり血が上っていますね』

「しかも相手はなのはかよ!？」

俺はあまりの最悪な組み合わせに、頭を抱えた。

『隆介さん、なのはさんが!!!』

ヴェネゼイラの警告に、慌ててなのは達の方を見ると、なのはの張っていた防御魔法が打ち破られ、レイジングハートに直撃している所だった。

「こりやまずいな!!」

俺は慌ててなのはに、物理ダメージを7割カットする透明な壁を展開した。

『間接的な防御よりも、直接助けに向かえばいいのでは?』

「そうしたいのは山々だが、あの攻撃を防御しながら助ける事出来ると思う?」

『……………いえ、出来ませんね』

きっぱりと断言するヴェネゼイラに少し傷つきながらも、俺はなのはがいた場所に視線を戻す。

「なのは達はどこに行った!？」

『恐らくあのビルの中かと』

見れば窓だった場所が壊れ、煙が出ていた。

「行くぞ！ ヴェネゼイラ」

『はい、隆介さん!』

俺はクリエイトを構え、窓の壊れたビルの方に向かった。

「時空管理局囑託魔導師、フェイト・テストロッサ。抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解除して」

そこにいたのはグラ ファイゼンを構えるヴィータと、彼女に向き合うように立っているフェイトがバルディッシュを構えていた。しかもユーノまでいる。

「誰がするかよ!！」

「そこまでだ!」

俺はヴィータが動こうとしたので、大きな声で叫んだ。



「なっ!?!」

「え!?!」

その声に、全員が驚いたように俺を見た。

「人は襲うなと言ったはずなんだが……」

「……ッ! 仕方ないじゃねえか!! まごまごしている時間は無い!!!」

ヴィータが睨みつけるように反論してくるが、これは少々まずい。

「隆介、早くその子を捕まえて!!」

「さてヴィータ。ゲンコツとアイス1日禁止、どっちがいいか選べ」

「両方一緒じゃねえか!! と言うより、あいつらと知り合いか?」

俺の選択肢にちゃんと突っ込んでから疑問を口にするあたり、割と冷静だろうけど今だけはそれが恨めしい。

「まあな。ちょっとした親友だ」

「隆介!! 早く!!!!」

いい加減に無視するのもつらくなってきたな。

「何を急ぐんだ?」

「早くその子を保護して!!」

今度は言い方を変えてきたか。

「断る」

「な!?!」

きつぱりと断るとフェイト達が見開いて驚いた。

まあ当然だろうな、敵であるヴィータに手を貸しているんだからな。

「な、なにを言ってるの!?! その子はなのはを襲ったんだよ!?!」

軽犯罪じゃ済まないよ!?!」

「うるせえよこっちの気も ヴィータ ……わあってるよ」

俺の一声でヴィータは黙った。

「お前たちはそこでじっとしていればいい。そうすれば無傷で帰れる事を保証する」

「ここを通す訳にはいかない!?!」

俺の忠告にも耳を貸さず、ファイトが退路を塞ぐように立ちふさがった。

「はぁ……………本来は戦いたくはないのだが……………致し方ない……………閃  
!?!」

俺はヴェネゼイラを地面に叩きつけ、けたたましい音と光を発生させた。

【ヴィータ、脱出するぞ!?!】

【お、おう!?!】

巻き沿いを喰らったヴィータの手を引いて、ビルから脱出することに成功した。

だが……

「アークセイバー!!」

「何!?!」

背後から迫る金色の刃を慌てて防ぐ。

しかもその先には、フェイトとアルフ、ユーノがいた。

(かく乱失敗か)

「力づくでも、話を聞かせて貰う!!」

「望む所だ!!」

「おいヴィータ!!」

ヴィータはこっちの制止を振り切り、フェイトに向かって行った。

『相変わらずですね、彼女は』

「はあ……まあ良いだろう。こっちはこっちで布石を おりゃあ  
ああああ!!!! っち!!」

溜息をついていた隙に、横からアルフが拳を突き出してきた。

(俺もちょっとテンぱってるかな)

「あんたはフェイトと友達になったんじゃないのかい!!」

「ああ、確かに友達だ!!」

「だったらなんで!! フェイトは………隆介と会える事を、楽しみにしてたんだよ!!」

アルフの言葉に、とても胸が痛くなる。

だが、ここは戦場だ。

余計な感情は命取りだ。

だからこそ俺は心を鬼にする。

「こんなこと言える義理ではないが、悪い。俺には成さなければならぬ事がある。そのためであれば、例え我が親であろうとも、この手に掛けてみせる!!」

「もういい!! こうなったら力づくでも吐いて貰うからね!!」

そう言っただけでこちらに突っ込んでくる。

「ちなみに、忠告しておこう。味方は一人とは限らない」

俺はすでに感じていたのだ。

こちらにやってくる増援の存在を。

「何?」

アルフは俺の言葉に動揺した。

「うおおあああ!!!!」

「ツグ!?」

不意を突く形でアルフを蹴り飛ばしたのは、ザフィーラだった。

「助かった、ザフィーラ」

「気にするな」

俺のお礼に、そう答える。

「それよりも、人を襲うなど言っただはすなんだが？」

「すまない」

ザフィーラが素直に謝ってきたので、一応は勘弁する事にした。

別の方を見ると、シグナムがフェイトのデバイスを真っ二つに切り裂いて、フェイトを飛ばしていた所だった。

「ザフィーラ、シグナム達と合流するぞ」

「心得た」

僕とザフィーラはシグナム達の方へと向かった。

「シグナム、ヴィータ！」

「鈴木……お前も来ていたのか」

ようやく合流出来た俺は、やや下の方でデバイスを構えているフェイト達の方に向き直した。

「二人とも、ここから撤退する」

「しかし、鈴木……」

俺の提案に反論してくるシグナムが、そんな事を聞いていられる暇なんて最初からない。

「黙って……これでも怒ってたんだ。これ以上駄々をこねるようならばこっちも容赦はしない」

「ッ！わ、分かった！！」

俺の殺気に怖気づいたシグナムが慌てて賛成した。

これedyouやく、めどが立った。

「しかし、どうやって撤退する？ あの者たちがいる以上、そう易々と返してはくれぬだろう」

「分かっている。だからこそその俺だ。ここは一枚切り札を切らせて貰おう」

俺は自信があつた。

何せ、それほどの切り札があるのだから。

「あ、ちなみにシグナム達は手出し無用で頼む」

「なんでだよ！」

俺の言葉に、ヴィータが反論をしてきた。

「あんた達は手札の数が限られている。その分、俺は大量の手札を持っていて、さらには膨大な力も持っている。そう簡単に破れたりはない」

俺の理由に、シグナムが目を閉じる。

「……分かった。その変わり、無事に戻ってこい」

「シグナム!？」

「言わなくても、そのつもりだ」

シグナムの結論にヴィータ達が慌てるが、俺はそれを無視してそう答えた。

「ぜってえに帰ってこいよ!！」

ヴィータはそう言い残し、転送して行った。

### 第36話 思いがけない事態

「……さて」

俺は上空からフェイト達のいる場所へと向き直った。

「周りに被弾する見方は無し。存分に力を発揮できる。お前たちの勝率など、0%だ」

「……それはどういう意味？」

俺の挑発を聞いていたフェイト達が睨みつけてくる。

「そのままの意味さ。あんた達はここで華麗に負けるのさ」

「やれるもんなら！」

「やってみて!!」

2人がそう言い切った瞬間、アルフがこっちに向けて特攻をしかける。

その後ろでフェイトが魔法を行使しようとしていることから、どうやらアルフは罠のようだ。

俺は懐から取り出した瓶から世界のかけらを2つ取り出す。

「世界よ、我に力を」

その言葉と同時に、二つのかけらが淡い光をまとった。

「な、何をする気だい？」

「世界の意志が命ず………爆!!」



俺は二つの世界のかげらをぶつけ合って、爆風を発生させてその場を離脱した。

「ん？あの魔力光は、なのはのか！？」

その途中でふとビルの方を見ると、桜色の魔力が集束しているのが見えた。

「しかもスターライトブレイカ かよ……………な！？」

なのはがスターライトブレイカ を放とうとした瞬間、なのはの胸の部分からいきなり手が出てきた。

（これは……………あの野郎！！）

俺にはそれが誰の仕業かすぐに分かった。

「ス、スターライト……………」

なのははそれでも魔法を放とうとする。蒐集されたにも関わらずに……………。

「ブレイカ ……！！！」

そしてスターライトブレイカ が放たれ、結界が破られた。俺は逃走よりもなのはの方を優先した。

「つとー！」

慌ててビルの方に向かい、意識を失って倒れようとしていたなのは

の体を受け止めた。

「ごめんな」

俺がもつとちゃんとしていればこんな事には……。

「これで僕の罪が消える訳じゃないけど、せめてこれだけはさせて」

俺はなのはが気を失っていて、聞いているわけでもないのに呟いていた。

俺はなのはに軽い回復魔法をかけた。

「これでひとまずは なのは ……！！ ……」

俺の言葉を遮りながら、フェイトが駆け寄ってきた。

「早かったな。なのはなら俺の方で軽く回復魔法を掛けておいたから、早く連れて行ってやれ」

「……何で」

「ん？」

「なんで、あの人たちの味方をしているの……！」

フェイトの問いかけに、俺は答えられない。

「さっきも言ったが、俺には言えない」

「待って……！」

「さらばだ……！ 行くぞ、ヴェネゼイラ……！」

フェイトの制止を振り切り、俺は転送魔法を発動させた。  
そして俺ははやての家に転送したのだった。

第37話 今後の方針（前書き）

第37話です。

これで連続投稿は終了です。

### 第37話 今後の方針

俺達はあの後戻り、はやてたちと夕食を済ませて、いつものようにお風呂に入った後、はやてが寝たのを見計らってリビングに集まった。

「それで、あいつらと隆介の関係って何なんだ？」

「……ヴィータが襲ったのは、俺の友人だ」

俺の言葉を聞いた瞬間、シグナムがレバンティンを取り出した。

「一応言っておくが裏切るつもりはないからな。今回のことだって向こう側には感知されないようにするつもりだったんだ……まあ、どこのバカが余計なことをしなければな」

「うっ!？」

俺のジト目に、ヴィータが体を震わせた。

「ところで、何か言うことがあるのではないか？ シャマル」

「あ、あの……」

俺の視線にシャマルはたじろぎながら後ずさった。

「俺もね、友人にああされて許せるほど、器は大きくないんだよな

……きつちりとお話をさせてもらおうじゃないか!?!」

「いやあああああ」

俺はシャマル表に引きずって行った。

### 3人称Side

隆介たちが話し合っているとき、アースラーでは……。

「ねえ、そういえばさ。あいつらの魔法……なんかちょっと変じやなかった？」

「あれは多分、ベルカ式だ」

クロノの言葉にアルフは首を傾げた。

「その昔、ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体型だよ」

「遠距離や砲撃魔法がある程度度外視して、対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は騎士と呼ばれる」

ユーノの解説にクロノが乗じるように補足した。

「確かに、あの人は自分のことをベルカの騎士と言っていた」

「最大の特徴はデバイスに組み込まれた”カートリッジシステム”という武装」

「儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに込めて、瞬間的に暴発的な破壊力を得る……危険で物騒な代物だな」

クロノはベルカ式の魔法体型に少々顔をしかめた。

「でも、どうして隆介君はなんであの娘たちと一緒にだったんだろう」

なのはがふと疑問を口に出した。

「きつと何かわけがあると思うの」

「なんでそう言えるの？」

フェイトの言葉を聞いたなのはが、驚いたような表情でフェイトに聞いた。

「あの時隆介は悔しそうな…悲しそうな表情をしていたから」

「どういう意味なんだろう」

フェイトの言葉に、その場にいたものが全員考え込んだ。

「分からないが、仲間割れでも起こっているのかもしれない」

「そうかもしれない」

クロノの導いた答えに、フェイトは賛同した。  
それは隆介の表情を間近で見たからだった。

「悔しいがあいつの戦力はかなり高い。こっちに来てくれれば万事が解決なんだが…なぜあいつは俺たちに何も相談をしないんだ。どんな理由があってもあいつのやっていることは犯罪以外の何物でもないんだ」

「もしかしたら、言いたくはないんだろうね」

クロノの言葉にアルフがそう言った。

「今度会ったら絶対にお話しするの…!!」

そしてなのは大きな決意を新たにこの話は終わった。

Side out

「ヒー!?」

「どうしたんだ? 隆介」

「いやなんでもない」

ヴィータ達と今後について話し合っているさなか、背筋に寒気が走った。

「それで、今後はどうするのだ?」

「そうだな……しばらくの間は向こうは動けないはずだ。なるべく悟られずに魔法生物のみの蒐集を続けよう」

「もし管理局の連中と対峙したらどうすんだよ?」

ヴィータの問いかけに、僕は少し考えた。

「その時は、逃げるのを前提に戦うようにすればいい」

「よし、それで行こう」

シグナムの一言で、今後の方針は決まった。

こうして、とんでもない夜は更けていくのであった。



### 第37話 今後の方針（後書き）

次回からは再び学校のほうになると思います。

## 更新停止のお知らせ

皆さんお久しぶりです。

えっと、大変悲しいお知らせです。

この度、この作品の更新を停止することになりました。

主な理由は私生活が忙しくなり執筆に充てられる時間が少なくなつたことと、執筆作品数が15を超えたためです。

これは単に自分の裁量ミスです。

お気に入り登録や評価をして頂いた方または読者の方には大変申し訳ないと思っております。

ですが、落ち着いてきたときには必ず更新を再開します。

ですので、それまでの間はゆっくりと待っていただけると幸いです。

それでは、また会える時まで

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2441m/>

---

魔法少女リリカルなのは～世界からの来客者～

2011年9月25日01時26分発行